
バカとテストと召喚獣 +

霧島卓也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣+

【Nコード】

N2135Q

【作者名】

霧島卓也

【あらすじ】

霧崎白夜はある日交通事故により死んでしまった。しかし神の力によって転生できることとなった。バカとテストと召喚獣の世界でなにを起こすのだろうか。一部原作と異なる部分がありますが仕様です。誰のセリフかわかりやすいように変更しました。

プロローグ（前書き）

神様〃神

霧崎白夜〃白

誰のセリフかわかるようにしてみました。

プロローグ

白「やっと手に入っただぜ。こいつを手に入れるために俺は食費を削ってしまっただけからな。さっさと家に帰って読むとするか。ん？間に合えばいいけどな」

そういつた霧崎白夜の目の前には赤信号にもかかわらず歩いている少女が見えた。

白「くそ！今度こそ間に合え！！」

急いで少女のところ走到了白夜は迷うことなく少女を突き飛ばしたが「車は急に止まらない」という言葉があるとおりにはトラックは止まることができずに白夜は跳ね飛ばされた。

白「はは、こんなところで死んじまうのか。まだ読んでないのにな。やばい意識がなくなってきた」

白夜の意識は最後にトラックの運ちゃんの声聞こえるか聞こえないかでなくなった。

神「すまんかった」

次に目を覚ましたのは老人の目の前で老人は謝ってきた。

白「えつと話が見えないのだが説明してもらえるんだろうな？」

死んだはずの白夜は地獄の閻魔のところへは行かずなぜかここにいるのだから、説明は必要だろう。

神「そうじゃな、まず私は神じゃ。そしてなぜお主が死んだかなのだが実は地獄の閻魔王と遊んどいたら閻魔帳のお主の名前の部分にペンのインクをぶちまけてしまったの。じゃから神々の会議の結果お主を特別に能力を追加したうえでほかの世界に転生させることになったのじゃ」

目の前の老人もとい神様は急にそんなことを言い出した。

白「じゃあバカとテストと召喚獣っていう小説の世界で性別は男、能力は答えを導き出すアンサートーカーとスーパーコンピュータ以上の演算能力。名前はそのまま頼む」

そう白夜が言っていると神様は悩んだすえに頷いた。

神「まあ能力はチートじゃろうがまあええじゃろ。それじゃあ2度目の人生をたのしむんじゃぞ」

そう神様が言っていると白夜の下には穴が開き落とされていった。

白「覚えとけよ！くそじじい~~~~~~~~!!」

こうしてバカテスでの人生が決まった。

ブログ（後書き）

なかなか更新できませんが気長に待ってもらえるとうれしいです。

バカテスの世界に誕生！（前書き）

白夜の父親〓霧崎父

白夜の母親〓霧崎母

今回のセリフはこんな感じ。

前回に続き白夜は白

バカテスの世界に誕生！

白「ばぶばぶ（ついにこのときがやってきた。）」

赤ん坊から始まったのでうまくしゃべれないでいる。

霧崎母「お父さん、白夜がなにかしゃべりましたよ」

母親が親父を呼んだようだ。

霧崎父「今は無理かもしれんが早くしゃべれるようになればいいがな」

白夜の口調は親父譲りになります。 以降出てきません。

霧崎母「まあ気長に待ちましょう。この子もまだ1歳半なんですから」

そうそうそのほうがいいと思うよ。

霧崎父「そうだな、しかしこの子にはなんだかすごい力がありそうだ。なにかに悪用されないように見守っていかんとな」

そして月日が流れ現在6歳。 文月小学校の1年生、原作キャラの吉井明久と坂本雄二に出会う。

小学4年、木下姉弟と出会いなぜかこっちの両親と木下家の両親に優子との結婚を約束される。 許嫁決定。 島田美波にも出会っている。 小学6年で姫路瑞希に出会う。

中学2年で霧島翔子とムツツリー二（寡黙なる性職者）こと土屋康太と出会う。

これまでは婚約云々は半分いやいやだったが中学の卒業のときに木下優子との交際が本格化してきた。

そして文月学園に入学し1年が過ぎていった。

両親は文月学園に入学が決まったときに亡くなった。 遺書により京都の祖父母の家に妹がいることが判明。

振り分け試験（前書き）

試験監督〃教師

吉井明久〃明久

姫路瑞希〃姫路

こんな感じかな。

振り分け試験

文月学園…。

新設校であると同時に、学業低下が嘆かれる昨今の日本に新たな風を起こす新システム、試験召喚システム。そんな試験召喚システムの実験校でもあるこの学園は今、試験の真つ最中なんだ。

え？中間試験？違うぞ。じゃあ期末試験？間違いだ。なら学年末試験？間違いだ。正解は世間から注目を集めるこの学校にのみある試験。その名も「クラス振り分け試験」。正に呼んで字の如くを地でいくこの試験は、次の二年生時に自分の振り分けられるクラスが決まる。ある意味では学年末試験より重大なものである。

そんな中で俺は現在日本史の問題を解いていました。えーっと。

（三権分立は司法、立法、あと何で成立しますか…）

この問題を見て。俺は思わずクスリと笑ってしまった。去年明久に同じ問題を出したことがあったのだが、こんな答えが返ってきた。

明久「二つまでなら絞れる。憲法が、漢方だったと思う。」

目から鱗がでる。というのはこういうことをいうんだと思ったぜ。

（まあ、今はもう大丈夫だろうが。）

Aクラス確実の成績を持つおれ。Aクラスは無理だけど、Bクラスぐらいなら大丈夫な成績を持つ明久。そして俺はそんな明久と同じ

クラスでバカをやりたいので…

ちょっとだけ点数調節したいと思う。

（この問題と、後この問題それから…）

俺がそうやって点数を調節していたときだった。

ガタン！

そんな何かが倒れるような音に続いて…

明久「姫路さん！」

俺の悪友、吉井明久の声が聞こえてきた。

振り返ってみると、そこには教室の床に倒れている女子生徒そんな彼女に心配そうに駆け寄る明久。よく見ればその女子生徒、俺の親友である姫路瑞希だった。そういえば朝からあまり顔色が良く無かったような気がした。

教師「吉井、席に戻りなさい」

明久「で、でも！」

教師「姫路、保健室に行くか？退室するのならテストは全教科無得点扱いになるが、どうする？」

明久「なっ！？先生、それはいくらなんでも酷いじゃないですか！教室を出ただけで無得点扱いなんて！」

淡々と事実を告げる監督教師に明久が食い下がった。確かにちょっと理不尽なんだよな、しかも瑞希は学年次席の成績を誇っているから。

教師「吉井、席に戻りなさい」

明久「っ!…」

教師「さあ姫路、どうする?」

姫路「…退席、します…」

瑞希はどうやら退席するようです。少しかわいそうだな。後でお見舞いに行つて見るかと俺が思ったときでだ。

「姫路さん、保健室に行こう」

そういつて姫路さんに寄り添う明久の姿があつた。

教師「吉井、席に戻りなさい!」

明久「先生、僕、頭が痛いし、それに倒れた姫路さんをほっとけません。だから保健室に行きます。」

教師「待ちなさい、吉井!」

そんな監督教師の言葉を無視して明久は瑞希に寄り添つて教室を出て行きやがった。

明久が瑞希をつれて保健室に行ってから少しして教室は再び試験中の雰囲気を取り戻した。だが瑞希はもとより、このままいけば間違いないく明久も無得点扱いだろう。どんな理由があろうと。

白「…」

明久の長所であり、短所でもある優しさ。そして、俺が明久を友として好きな理由のひとつ。そんな明久と友である俺がすべきこと、それは…。

ゴシゴシ…

テストの名前の欄、そこに書いてある。俺の名前を消すことだ。そして…

白「明久よ、お前は俺にとって誇れる友だ」

明久の理由のひとつに突っ込み？を入れとくことだ。

振り分け試験（後書き）

あやっちまったよ。すでに原作ブレイクさせてしまった。誤字あったら報告お願いします。誤字の部分をお教えください。

ようこそFクラスへ（前編）（前書き）

少しだけ分けます。

木下優子〓 優子

木下秀吉〓 秀吉

土屋康太〓 あだ名の最初の文字からム

ようこそFクラスへ（前編）

「ジリリリリ」

本日から新学期だが白夜は今起きようとしていた。

白「ふあゝあ、やばいなもうこんな時間か」

時間が遅刻になるかどうかだったので急いで着替えているとふいにドアがあいた。

「ガチャリ」

優子「白夜、遅いわよ。もしかして寝てるんじゃないでしょうね？それと入るわよ」

どうやら優子が部屋の前で待っていてくれたらしい。これでは優子までちこくするんじゃないだろうか。

白「すまん、さっき起きたところだ」

優子がすでに俺のところまで来ていたので素直にあやまった。

優子「誤ってる暇があったら早くしなさい。私まで遅れたらただじゃすまないわよ」

どうやらマジで切れていた。俺はすばやく着替えた。

白「すまねえ、待たせたな」

俺が準備ができたと見るや優子は急いで玄関をでた。

優子「もう、これじゃあ完全に遅刻じゃないの！今度のデートの時におごってもらうから！」

白「ああ、それは約束しよう。」

玄関を出た俺は急いで鍵を閉めて優子とともに急いで学校に向かった。

白「……眠みい」

優子「そう言うなら、遅くまでゲームなんかしなきゃいいでしょ？」

白夜と優子は並んで文月学園まで急いで走っているとその姿は端か

から見ればただのバカツプルに見えるこの二人、それはこの二人の間に決して千切れない運命の赤い糸が硬く結ばれているからである。

白「優子だって、遅くまで何かしてただろ。それなのにどうして朝早くから起きられるんだよ」

優子「それは私が優等生に見えるように遅くまで勉強してるからよ。それと秀吉が起きるのが早いから、実は起こしてもらってるのよ。」
それとそのはず、なぜなら優子は重度といってもいいほどズボラなのである。

秀吉「……姉上と白夜は遅かったの」

誰かと思いきや先ほど話に出た優子の弟の秀吉だった。

優子「このバカ白夜が寝坊してたせいよ。このままじゃ優等生に見えるなくなるじゃないの！」

白「だからそれはすまないといってるだろ！」

時間がないのに痴話喧嘩をし始める姉たちに秀吉はあきれていた。

明久「秀吉に木下さん、そして白夜、おはよう」

秀吉「うむ。おはようなのじゃ」

白「おう、おはよう明久」

優子「おはよう、吉井君」

4人は挨拶を済ませると一緒に学園に向かい歩き始めるなか、

明久「白夜と木下さん、二人の言いたい事はわかるけど公然と道路の真ん中で痴話喧嘩は止めない？」

よく周りを見てみると俺たちは注目されていた。

白「……これはさすがに恥ずかしいな」

よく見ると隣の優子も顔を紅くしていた。

優子は恥ずかしいのか足を少し速めていた、秀吉と明久は俺と優子にあきれた視線を向けてきた。

白「それより時間がやばくねえか、急ぐぞー！」

遅刻まであと少しまで時間がたっていた。

優子「な、何!?」

ム「……………あの川の向こうは楽園」

白「ムツツリーニ！？　　いったいどうしたんだ！！　　あとその川を渡ると帰ってこれなくなる」

秀吉「戻ってくるのじゃ！？　　ムツツリーニ！！」

優子は突如として吹き上がった赤い噴水に何があったかわからないため、慌てるが明久とおれはすぐに何があったか理解したようで現世につなぎ止めようと声をかける。

優子「土屋君、あなたどこ見てるのよ／＼」

そっぴいだった優子からムツツリーニに視線を向けてから優子に再び視線を戻すとその先には風でスカートがめくれて必死に中を見られまいとスカートを抑えている優子がいた。

白「ムツツリーニ、貴様は死にたいのか？」

ム「……（ブンブン）」

俺がいつも愛用している家宝の妖刀ムラマサを少しだけ刃をだして脅すとムツツリーニはすぐさま否定し始めた。

男子生徒が優子、明久、秀吉の共通の友人である土屋康太だと気づき挨拶をするが康太からの反応はなく、優子は引きつった笑みを浮かべ、俺たちは呆れていた。

ム「………　大丈夫だ。　まだ、逝くわけには行かない。　俺にはまだ見るべきものがある」

明久「ムツツリーニ、良かった」

康太は何とか立ち上がると明久と秀吉は安堵のため息を吐く。

優子「白夜、お願いだからすぐにそれを出す癖をなんとかしてくれないかしら。　見るだけでも怖いから」

白「何でだ？　　優子だって、あんないやらしい視線で見られたら、ムかつときてるだろ。　おれはそれが抑えきれないだけだ」

優子「そんなことないわよ！？　　私は白夜みたいすぐに刃物に手をかけないわ！？」

白「どうだか、家では下って痛い、離してくれよ優子」

優子「余計な事を言っいけない口はこれかしら？口は可哀そうだから腕にしてあげるわ」

優子は白夜が優子の家での状態ををばらしかけ優子は額に青筋を浮かべながら白夜の間接を外そうと腕を持ち始めた。

ようこそFクラスへ（後編）（前書き）

鉄人こと西村先生〃西村
今回の追加

ようこそFクラスへ（後編）

白「……ううう。痛てえぞコラ」

白夜は優子に外された優子を非難するような視線を彼女に送るが、優子「あたしとの約束を破ろうとした白夜がいけないのよ」

優子は額に青筋を浮かべたまま言い切り、

白「……ああ。すまない。以後気をつける」

優子「わかれば良いのよ。それより、早く行きましょう。新学年初日に遅刻はいやでしょ」

優子に睨まれた白夜は落ち込んでいるようで小さな声で申し訳なさそうに優子に謝ると優子は白夜の落ち込んだ表情に弱いようであるため息を吐きながら急ぐように言う。

秀吉「姉上の言う通りじゃのう。このまま、遅刻と言うのはさすがに避けたいのじゃ」

明久「そうだね。せつかく」

ム「……………（こくこく）」

4人は復活した康太を加えて文月学園に向かう。

白「鉄先生、おはようございます」

西村「……霧崎、その挨拶はなんだ？」

明久「そうだよ。白夜、さすがに鉄人にでも鉄先生は失礼だよ」

優子「……吉井くん、あなたも充分に失礼よ」

白夜が校門の前で仁王立ちしている西村教諭に挨拶をすると西村教諭は白夜の挨拶のため息を吐くと明久は白夜を叱るように言うがその言葉も西村教諭には失礼だと優子はため息を吐きながら言う。

明久「えっ！？ そうなの？ それなら、どうしよう………そうだ。

鉄人が喜ぶような事を言って話をそらそう。白夜、わかった？」

白「おう。わかったぜ。明久」

秀吉「……明久、白夜、それは口に出さない方が良いのではないかな？」

明久はない頭をフル稼働させて答えを出すと白夜は明久の答えに頷くが西村教諭の額には目に見えるくらい青筋が浮かび上がっており、秀吉は西村教諭の様子に引きつった笑みを浮かべるが、

明久「西村先生、今日も黒いですね」

白「黒くて硬いな。こんなので攻められる奥さんは幸せ者だな」

明久と白夜は笑顔で親指を立てながら、西村教諭を誉めているつもりであるがそれは誉め言葉ではなく、白夜の言葉にいたっては少し卑猥である。

西村「……吉井と霧崎、お前達は俺を怒らせないと気がすまんなか……！」

白「……痛いです」

明久「……これ以上バカになったらどうするんですか？」

鉄人は白夜と明久を叱ると2人の頭にげんこつを落とし、2人は涙目で頭を押さえる。

西村「大丈夫だ。吉井はそれ以上、バカになる事はない。それと霧崎は一言余計だ」

明久の訴えを西村教諭は一喝すると、

西村「本題から、ズレたな。吉井、霧崎、木下姉弟、土屋、これが振り分け試験の結果だ」

西村教諭は懷から5枚の封筒を取り出し、5人に配る。

白「明久、クラスはどこだ？」

明久「僕は振り分け試験は結構できたから、Cクラスくらいだと思うんだ」

白「ええ！？だがそれはないな、お前はバカだし。おれはお前が途中退席扱いの姫路を保険室に連れて行くところを見たから、名前をわざと消したんだ」

明久は振り分け試験は調子が良かったと自信ありげに言うと白夜は明久がFクラスだと自信ありげな表情で言う。

優子「……ちょっとそれどういうことよ！あんなに来年こそは一緒のクラスになりましようと話をしたでしょう！」

秀吉「……そうじゃのう。なぜ、明久も白夜もそんなことをしたのかが不思議じゃ」

ム「……………（こくこく）」

白夜と明久の様子に優子は怒鳴るように言々と秀吉と康太は同意見のようで頷き、

西村「……吉井と霧崎、今だから言うがな。俺は吉井を去年1年見て、『もしかすると、お前はバカなんじゃないか？』なんて疑いをかけていたんだ、そして霧崎、『もしかすると、お前は酷いほどお人よしじゃないのか』なんて」

明久「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているようじゃ、更に『節穴』なんてあだ名をつけられちゃいますよ」

白「そうだな、そんなんじやいつか生徒に殺されるぞ」

西村教諭はどこか遠くを見つめて言う白夜と明久は封筒のノリが上手く外れないようで2人で同じ動きをしながら、封筒を開けようとしている。

西村「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気がついたよ」

明久「そう言つて貰えると嬉しいですよ」

白「だよな」

白夜と明久は封筒が上手く開けられないため、2人そろって封筒の上を軽く破るとそこには折り畳まれた1枚の紙が入っている。

西村「喜べ、吉井と霧崎。お前達2人への疑いはなくなった」

白夜と明久が紙を開くと、

『吉井 明久…… Fクラス』

『霧崎 白夜…… Fクラス』

と大きく書かれており、

西村「吉井、お前はバカだ。そして霧崎、お前は愚か者だ」

こうして、白夜と明久の最低クラス生活が幕を開けた。

西村「それと転校生の名前を見たときに霧崎黒羽という名前だった
がもしかしてお前の身内じゃないだろうな？」

ん、あいつが来るってことはお婆様が不穏な気配を感じ取ったか？
白夜「ああ、そうですよ。小学校以来手紙のやり取りしかしてま
せんが実の妹です。自分より確実にしつかりした奴なので問題は起
きさないと思いますけどね」

西村「そうか、それなら安心だな。お前もあまり問題を起こさな
い」とありがたいんだがな」

白夜「雄二と明久が同じクラスの場合は必ず無理とだけ言ってお
きますよ。ストッパーにはなれないんでw」

西村「わかった、もういいからさっさといけ。お前たちはただで
さえ遅刻しているんだからな」

こうして遅刻しながらも厄介事がなんなのか考えるのであった。

霧崎黒羽参上（前書き）

霧崎黒羽〓 黒羽

高橋教諭〓 高橋

藤堂学園長〓 そのまま

今回のこんな感じ

霧崎黒羽参上

黒羽「ここがあの文月学園ですか聞いていた通りの学校ですね。お兄様は元気なんですかね」

この春、文月学園に新たな生徒が転校してきた。そしてこの少女こそ霧崎黒羽、あの白夜の妹である。

西村「お前が転校生の霧崎黒羽だな？もうすぐ担当の教師が来るはずだからしつかり言う事を聞かないと

あとで俺が指導することになるから気をつける。そういえば名前を言っただけだった俺は生徒指導の西村だ」

この教師は見た目トライアスロンか何かで鍛えた筋肉がむさくるしい教師ですね。生徒指導の教師のようですし目をつけられないように気をつけなければなりませんね。

黒羽「西村先生、担当の先生って今こっちに走ってきているあの女の先生ですか？」

何やら職員玄関のあるであろう位置から走ってきている先生がいるので一応聞いてみた。

西村「高橋先生、あなたともあろう方がなぜ遅刻するんですか？今日は転校生が来るのでお願いしますとあれほどいったのに」

高橋先生ってそんなに天然なんでしょうか。

高橋「すいません、書類整理に手間取ってしまいました。霧崎黒羽さん、それではまず初めに学園長にあつてから試験をしますので私についてきてください」

学園長か、噂では妖怪ババアとか言われてるぐらいの見た目らしいですがどんな方なんでしょうね。

黒羽「先生、試験パスしていいですか？」

お婆様からの依頼遂行のためにはFクラスでなくてはなにかと都合なので試験なんてどうでもいい。

高橋「事情があるようですが一応編入できるかの試験なので受けてく

ださい」

めんどうなのですが仕方ありませんね。

黒羽「わかりました。それでは噂多き学園長に会いに行きましょう」

高橋「学園長にどんな噂があるかは気になりますが時間もあまりありませんし急ぎましようか」

ところ変わって学園長室前。

コンコン

高橋「学園長、転校生を連れてきました」

学園長「高橋先生かい、さつさとはいつといで」

高橋先生が要件を言う中からお婆さんの声が聞こえてきました。
なるほど此処の学園長はお婆さんでしたか。

高橋「失礼します」

黒羽「失礼します」

高橋先生が先に入ったことを確認してから例にならって挨拶をしてから入ります。

学園長「ほう、あんたがああのクソジャリの妹かね。兄と違って礼儀正しいさね」

この学園長はおそらく知らないんでしょうね。この私が霧崎家の暗殺姫だということは。まあ知っていても霧崎家次期当主候補ぐらいでしょう。

黒羽「学園長、この私をFクラスに入れてもらえないでしょうか？」

学園長は一瞬信じられないものを見ているようにこちらを見てきた。

学園長「いったい何を考えてあの馬鹿だらけの設備の悪いFクラスに行こうと考えているのさね」

やはり理由は聞いてきますか、まあそれはそれでいいですけどね。

学力的には私もお兄様同様Aクラス並の学力はありますからね。

黒羽「お兄様の監視も役目にありますからね、Fクラスの方が仕事もしやすいですね」

学園長は少し悩んでからうなずいた。

学園長「わかったよ、それならお前さんの兄をどうにかすることを

条件にFクラスでもいいさね。ただし問題だけは起こしてくれない
でおくれ」

めんどくさいですがしかたがありませんね。

黒羽「それでは学園長も忙しそうなのでいそいでクラスの方いきま
すね」

学園長「さつさといきな。そのかわり放課後に編入試験を受けても
らうさね」

こうして黒羽の最低最悪クラス、Fクラスでの生活は決定したので
あった。

霧崎黒羽参上（後書き）

そのうち続きを更新していきます。

Fクラスだよ！全員集合！！（前書き）

福原教諭〓 福原

F F F 団〓 モブまたは団員＋アルファベツト

島田美波〓 美波

姫路瑞希〓 姫路

今回からバカテストが始まります。タイトルはドリフ風にしちえみた。

Fクラスだよ！全員集合！！

問題（国語）

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- （１）得意な事でも失敗してしまう事
- （２）悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- 『（１）弘法も筆の誤り』
- 『（２）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、（２）なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

霧崎白夜の答え

- 『（１）猿も木から落ちる』
- 『（２）泣きつ面にムチ』

教師のコメント

（１）正解ですが、（２）だとあなたの中にドSの心があるように思えます。

吉井明久の答え

- 『（２）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか

土屋康太の答え

『（１）弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね

Fクラスの教室に向かう途中Aクラスを通りがあった。Aクラスの設備は俺の想像以上で教室の大きさは通常の5倍か6倍程もあり、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートに加え、ドリンクバーや菓子まで用意されてまさに至れり尽くせりの状態だった。

優子「それじゃあ私はAクラスだからまた食堂で会いましょ」

優子はAクラスなのでここで別れたがあとで昼食を食堂と一緒に食べると約束したので昼になったら食堂に行かなければならない。オンボロのFクラスのプレートを見出し教室に入ると、既にそこには殆どのFクラスの生徒が集まっていた。

雄二「おう、白夜か遅刻ギリギリだな」

不意に名前を呼ばれる。そこに立っていたのはわが悪友の一人の坂井雄二だった。

白夜「なんだ雄二がこのクラスの代表か」

白夜「いかにも、俺がFクラス代表だ。席は決まってないらしいから好きな場所に座ってくれ、といってももう殆ど空いてないがな。」

そう言われて教室を見渡すと既に8割以上の席が埋まった状態だった。

白夜「席なんて何処でもいい」

雄二「何だお前、仲のいい奴と近い席になりたいとか思わないんだな。」

白夜「生憎、仲のいいやつなんてほとんどいないしな。」

雄二「秀吉ならあそこにいるがな。」

雄二が指を指した場所にはいつのまにか先に行っていた秀吉が座っていた、俺にはこの学園に友人というのがそんなにいない、そもそも新たに作るうと思うのがめんどくさい。

白夜「あそこの席が空いてるな、あそこをもらうか」

そう言つて無理やり話を切り上げる。鉄人はFクラスの設備に不満があるなら試召戦争で上位のクラスの勝利し設備を入れ替えるしかないと言ったが、このクラスにはAクラス以上の学力の生徒は俺を含めて僅か二人、残り48人は全員Fクラス相応の学力で優等生揃いのAクラスに勝つなんて漫画みたいな話だ。頑張ってもぜいぜいDクラスかEクラスに勝てるぐらいだ。そもそもこのクラスの連中の殆どは成績を上げようなんて思ってもいないだろう。そんな事を考えてると、教室のドアが行き勢いよく開いた。

明久「すみません、ちよつと遅れちゃいましたっ」

雄二「早く座れ、このウジ虫野郎」

なぜか遅れてきたのに愛嬌たつぷりに挨拶した明久に対して雄二はうじ虫といった。

雄二「聞こえないのか？ああ？」

明久をさらに威嚇する坂本、そんなに遅刻したのが気に入らないのか。

明久「……雄二、何やってんの？」

明久は雄二を呼んだ。

この二人悪友同士のはずだがなぜかいつもこういった挨拶をする。

なぜか明久だけものいいがひどい。

福原「すいません、ちよつとここで待っててください。呼んだら入ってきてください」

黒羽「わかりました」

とりあえず私は教室の前で待機らしいですね。

福原「えーと、ちよつと通してもらえますかね？」

ドアの外から覇気のない声が聞こえてきた。その声の主は寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、冴えないおっさんだった。おそらくこのクラスの担任だろう。

福原「えー、おはようございます。このクラスの担任の福原慎です。よろしく願います」

福原教諭は汚い黒板に名前を書こうとしたが、やめた。というか、チョークすらろくに用意されていない。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

机が卓袱台で椅子が座布団の時点で明らかに不備だ。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないです！」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

教室の隅には蜘蛛の巣が張られ、壁はひび割れや落書きだらけで最早学び舎とは言えない惨状だった。

福原「では、自己紹介の前に転校生を紹介します。皆さん仲良くしてください。」

FFF団「「「女の子ですか？」「」「」」

転校生と聞いて馬鹿どもが騒ぎ始めた。

福原「はい、女の子ですが皆さん静かにしないと嫌われますよ、それでは霧崎さん入ってきてください」

その一言でFFF団のバカどもは静かになった。だが俺は違う、霧崎と聞いて冷や汗が止まらないのだ。

黒羽「霧崎黒羽といます。1年間よろしくお願いします。あとお兄様はあとでお話があります」

やっぱり黒羽か、お話ってあの事か？だとしたらまあいいか。

モブA「霧崎ってまさかあの霧崎がこのクラスにいるのか？Aクラス確定って言われてたよな？」

モブB「どうしてこのクラスなんだ？」

ああ、黒羽のせいでバカどもがまた騒がしくなった。

福原「それでは窓側の人から順に自己紹介をお願いします」

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属してある。霧崎白夜とは姉上共々幼馴染みじゃ」

そう言って立ち上がったのは、演劇部のホープこと秀吉だった

FFFの団員「……なーにー……」

いきなり男子から驚きの声があがった。

「……土屋康太」

次の生徒は土屋だった。土屋は自分の名前だけ言っとそれだけで自己紹介を済ませていた。あらためて見渡すと男子ばかりだった。この学園の男子は勉学とは無縁の連中ばかりではないのかと思う程に俺が一人で呆れているとまた次の生徒。

美波「ーです。海外育ちで、日本語はできるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はー」
今度は島田だったやはりクラス全員が男子というわけでもないそう

だ。
美波「趣味は吉井明久を殴ることです」

明久をターゲットにしたピンポイントでバイオレンスな趣味だ。

美波「はろはろ！」

島田が笑顔で手を振る相手は、遅刻して雄二にウジ虫扱いされていた、明久だった。

明久「……あう。し、島田さん」

美波「吉井、今年もよろしくね。あれ霧崎もいたんだ。」

どうやら明久にしか気づかなかつたらしい。

その後も淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進み、そして俺の番が来る、

白夜「霧崎白夜だ、趣味はゲームと漫画と剣術。先ほど秀吉がいったとおり木下姉弟とは幼馴染みだし、土屋や島田この後自己紹介する吉井、そしてこのクラスの代表とも幼馴染みだ。ちなみに秀吉やその姉の優子、そして妹の黒羽に手を出したやつはおれの刀の錆にするからそのつもりでよろしく頼む。」

紹介することだけ言って終わらせる。たまにシスコンと間違われるが違うからな、その次は俺の後ろの明久の番だった。

明久「ーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

FFF団員『ダアアーリイン!!』

野太い声の大合唱。連中は明久に向けて叫んでるつもりだろうが、前の席に座る俺にも耳障りな声が同じくらい響く。全く明久の近くの席になったせいでとんだ災難だ。というか明久が勝手に俺の席の近くに座ったんだが。その後も自分の名前を告げるだけの単調な作業が続きそろそろ終わりに差し掛かった頃、不意に教室のドアが開き、息を切らせた女子生徒が現れた。

姫路「あの、遅れてすみま、せん……」

FFF団員「えっ？」

教室全体から驚いたような声が上がる。その様子を見て俺は、今朝の鉄人の言葉を思い出す。騒がしくなるクラスの中で担任の福原教諭がその姿を見て話しかけた。

福原「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路

さんをお願いします」

姫路「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしく願います。」

団員A「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。

姫路「あ、は、はい。なんですか？」

団員A「なんでここにいますか？」

聞きようによつては不愉快な質問をする。最もこれはクラスの連中の殆どが疑問に思っているはずだが。姫路の成績は俺よりも更に高く、学年主席の霧島翔子に次ぐ学年二位の成績だ。

姫路「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいまして・・・」

その言葉で俺は今朝、鉄人の言つた事の全てに納得ができた。もう一人のAクラス入り確定でありながらFクラス所属となつた生徒は姫路の事だつたのだ。最も姫路は試験を休んだ訳ではないのだが。しかし、試験途中の退席は0点扱いの為結果はFクラスだもつとも俺は名前を書かなかつただけだが。そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言いつの声上がる。

団員A「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに」

団員B「ああ。科学だろ？アレは難しかったな」

団員C「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて」

団員E「黙れ一人っ子」

団員D「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

団員H「今年一番の大嘘をありがとう」

明久に限らずどいつもこいつもバカばっかだ。そんな中姫路は逃げるように明久と雄二の隣の席に着く、大方、バカな空気に耐えられなくなつたんだろうな。その後、近くの席では坂本が姫路に明久がブサイクである事を謝つたり（俺は別にブサイクだとは思わないが）、明久が男子に興味を抱かれていたり等の会話が聞こえてきたが、適当に聞き流していた、というか、新学期初日から明久の扱いは散

々だった。

福原「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」と担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると。

バキィツ バラバラバラ・・・

教卓はゴミ屑と化した。

福原「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください。」
福原教諭はそう告げると、教室から出て行った。本当にこんなでいいのか？近くでは姫路が苦笑いをしていた。笑って気分が晴れるなら俺も是非そうしたいものだった。ふと気がつくと、明久と坂本が教室から出て行ったが特に気にならなかった。その後、教室では担任とクラス代表不在の状態で残り少ない自己紹介が行われた。須川という男子の自己紹介が終わりそうなところで、坂本、吉井、福原教諭の三人が戻ってきた。

福原「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

雄二「了解」

先生に呼ばれて坂本が席を立つ。

ゆつくりと教壇に歩み寄る姿は先程までのふざけた雰囲気は見られない。

福原「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原教諭に言われ、頷く雄二。最もクラス代表といっても最低クラスの成績者の中での一番に過ぎないし、俺や姫路に比べればその成績は遥かに劣るはずだが。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ。さて、皆にひとつ聞きたい」

雄二は、ゆつくりと、全員の目を見るように告げるが、正直俺はどうでもよくなっていた。こんな馬鹿だらけのクラスが試召競争をやったところで、勝てる可能性は低いし、これから先、こいつ等の成

績が上がるとも思えない。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

しばらくはこのボロ部屋で気ままに平穩に過ごさせてもら・・・

雄二「ー不満はないか？」

FFF団団員「「「大ありじゃあっ！」「」「」」

俺の考えとは関係なしに、これから慌しくなりそうな予感がした。

Fクラスだよ！全員集合！！（後書き）

これからが本番かもね

開幕決定 VS Dクラス試験戦争（前書き）

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希と霧崎黒羽の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけかりませんでしたね。

霧崎白夜の答え

『問題点……確かマグネシウムは炎にかけると酸素に反応したはずなので危険である
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

一応正解ですがなぜうる覚えなんですか？

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても

今回は前書きでバカテストしてみた。そして今回は前回最後の言葉からつながってます。

開幕決定 VS Dクラス試験戦争

雄二「そこで、Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

壇上に自己紹介の為立った筈の雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は当然非難轟々の嵐を巻き起こした

FFF団A「勝てるわけがない！」

FFF団B「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

FFF団C「姫路さんが居たら何もいらない！」

選りすぐりのバカだからこそそのFクラスが、逆の意味での選りすぐりのAに戦争を仕掛ける。

試験戦争は負ければ設備を1ランク落とされるのだから、更に最低になる事を考えれば自殺行為に当たるそれに、非難の嵐が吹き荒れるのは当然だった。

だが雄二は、その非難の嵐に怯む事もなく、代表らしい堂々とした姿を崩す姿勢が見られない。

ある程度治まった処で、不敵な笑みを浮かべ口を開く。

雄二「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

自信に満ちたその発言に、クラスはしんと静まった。

不敵な笑みを崩さないまま、雄二はある個所に視線を向けた。

雄二「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてない

で、前に出てこい」

ム「……………！！（ブンブン）」

姫路「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。

顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

雄二「紹介しよう。こいつがあ有名なムツツリー二だ」

ム「……………！！（ブンブン）」

ムツツリー二と言う名に、クラスがざわめいた。

その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。

……とされていた人物が、今日の前にいる。

FFF団D「バカな、奴がそうだと言うのか？」

FFF団G「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

FFF団F「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ」

ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。

雄二「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

姫路「えっ？ わっ、私ですかっ！？」

雄二「ああ、主戦力だ。期待している」

その容姿と共に知られている彼女の成績を考えれば、もっともな話である。

FFF団E「そうだ、俺達には姫路さんが居るんだった!」

FFF団C「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

FFF団A「ああ。彼女が居れば何もいらなない」

白夜「お前はあとで風紀指導室な」

FFF団A「だが、断る」

白夜「じゃあ西村先生の補修室だな」

FFF団A「それだけはご勘弁を」

白夜「じゃあ今度から言うなよ」

FFF団A「イエス、マイロード」

ネタ過ぎるだろそれは、まあいい。

雄二「ゴホン、話がそれたが。それだけではない木下秀吉だっているし、俺も当然全力を尽くす。」

次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇部のホープという要素で有名な人物。

そして自身もまた、代表として名乗りを上げた。

FFF団「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか?」

FFF団「それじゃあ、実力はAクラスレベルが2人も居るってことかよ? もしかしたら、やれるんじゃないか?」

FFF団「ああ、なんかやれそうな気がしてきた!」

士気は確実に上がっていき、ほぼ全員やる気が出始めて来た。
そこへ雄二の一言

雄二「それに霧崎白夜がいる、こいつはあの有名な冷酷なる惨殺者だ」

そう雄二がいうと白夜が怒鳴った。

白夜「おいその名を呼ぶな、殺したのはせいぜい性犯罪とか殺人をやってる犯罪者だけだ！まあ負けてはいないがな」

クラスから笑みが一瞬にして消えた。

FFF団A「冷酷なる惨殺者って確かチンピラすら容赦しないって噂だったよな？」

FFF団C「おい、それって怒らせないほうがいいよな」

FFF団E「ああ。しかも噂ではヤクザの息子だって話だ、両親は死んだらしいがな」

FFF団G「俺は風紀委員だって聞いたぞ、なんでも校則違反者は即刻風紀指導室とかいうところに1回目は連れてかれて指導、2回目からは鉄人の根城こと補習室（生徒指導室）行きらしい」

FFF団H「まじか！じゃああいつには逆らわないでいよう」

FFF団「」「」「異議なし！」「」「」

雄二「それに吉井明久だっている」

FFF団「おい吉井明久ってだれだ？」

FFF団「知らねえな、ってかそんなやついたか？」

雄二のやつはいきなり明久の名前を出した。

明久「ちよつと雄二！ どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？ みんなの視線が冷たいんだけど！」

雄二「明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」
FFF団B「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

明久「ちつ違うよつ！ ちよつとお茶目な16歳につけられる愛称で……」

雄二「そうだ、バカの代名詞であり、久遠の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちょうどいい」

明久「肯定するな！ それに自分から降っておいて、そのセリフはないよね！？」

白夜「まあ落ち着け明久。これから挽回してけば良いだろ？」

白夜になだめられ、一先ずはと席に着く明久。

それに構う事なく、政治家の演説を思わせるような堂々たる態度で言い放った。

雄二「とにかくだ！ 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」

FFF団「当然だ！」

雄二「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

FFF団「おおーっ！！！」

雄二「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

FFF団「うおおーっ！！！」

姫路「お、おー……」

雰囲気を押され、瑞希も懸命さが見て取れるように小さく拳をふりあげる。

その姿に明久が和んでる所に、雄二の一言。

雄二「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。

無事大役を果たせ！」

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？ しかも今字が違わなかった？」

雄二「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみる。俺は友人を騙す事はしない」

明久「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

下位勢力との試召戦争など、面倒でしかない。
だからこそ、そんな面倒事を持ってくる奴に危害を加えない訳がないだろう。

結局雰囲気の流れ、明久は意気揚々と出ていった。
ある程度時間がたつたところで、雄二が一言。

雄二「とまあ、ああいうバカだ。皆も危なくなったら、あいつを囲にしてさっさと逃げるように」

白夜「やっぱりか……仕方ない、俺も行ってくる」

雄二「お前も物好きだな」

白夜「お前が酷過ぎるだけだ」

数分後

明久「騙されたあつ!!」

そのしばらくの後、明久が教室に転がり込んできた。

Dクラスにつかみかかれ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

雄二「やはりそう来たか」

明久「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！　白夜が来てくれなかったら、今頃どうなってたと思ってるんだ!？」

雄二「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」

明久「少しは悪びれるよ!!」

白夜「まあ落ち着けよ。こいつが酷いのは今に始まった事じゃないだろ?」

そこへ刀を持った白夜が戻ってきて、明久を宥めた。
明久と違い無傷のその姿に、雄二は一言。

雄二「斬ってないだろうな？」

白夜「問題ない。刃を少し見せれば、大抵の奴は怯える」

雄二「これは思わぬ収穫だな。生贄ではなく、お前を行かせるべきだったか？」

明久「生贄って言った！？ 今生贄って言ったな！！？」

内容を考えたら、当然の表現である。

姫路「吉井君、大丈夫ですか？」

美波「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろにされた明久に、瑞希と美波が駆け寄った。

明久「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

美波「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

明久「ああっ！ もうダメ、死にそう！！」

冗談と分かっているけど、白夜はその言葉に戦慄を覚えた。

そしてうめき声を上げ始めた明久に、手を差し伸べる。

白夜「……ほら、立てるか明久？」

明久「え？ うん、ありがとう」

雄二「そんな事より、今からミーティング行っぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

雄二「で、明久。時間は伝えたのか？」

明久「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

雄二「じゃあ明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

明久「そう思うなら、パンでもおごってくれると嬉しいな？」

彼、吉井明久は生活破綻者である。

彼は1人暮らしであり、親からの仕送りを元手に生活しているが……仕送りを後先考えず趣味に費やす為、本人いわく“清貧生活”を送っていた。

姫路「あれ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

明久「いや、一応食べてるよ？」

白夜「水と塩、もしくは砂糖じゃ食べるとは言わん。全く……ほれ」

白夜は取り出したカロリーメイトを、明久に投げ渡した。それを見て、明久は表情を輝かせる。

白夜「賞味期限切れだけど、良いか？」

明久「あつ、うん。食べられるなら」

雄二「お前、明久の奥さんみたいだな？ 何かと世話焼いてる事と言い」

白夜「それは身近にズボラが……」

秀吉「白夜よ、その先はならん!!」

白夜が口を滑らせようとしたところで、秀吉の制止が入った。その事に気づいて、ホッと胸をなでおろした。

白夜「……そっそうだったな。すまん秀吉、助かった」

雄二「ズボラが、どうかしたのか？」

秀吉「そっそうじゃ。戦争に向けて、力をつけねば！」

白夜「おっとそっえば。すまねえおれちよつと飯は食堂行つてくる。」

黒羽「じゃあ私も行きますお兄様。今日は直接来てしまったので売店行くのもなんですし」

そっえば黒羽が来たのは今日だったな

白夜「ああ、そっだ。じゃあ黒羽も一緒に行くか」

雄二「どうしてだ？飯ならここでもいいだろ？」

白夜「そっもいかなくて、いかないと俺の命がやばくてな」

雄二「まあいい戦争のときに戻つてくれればな」

白夜「恩にきるぜ、これで優子に殺されなくてすむ」

雄二「なるほどな、そっいうことか」

白夜はそれだけいっつと黒羽を連れて急いで食堂に向かった。

ほかの皆はそのまま食事に。

食堂でのやり取りは省きます。

明久は白夜からもらったカロリーメイトを、少しずつ味わい噛みしめていた。

明久「久しぶりに固形物を食べるって、幸せだね……」

雄二「全く、まあ明久みたいなバカに彼女なんて無理だから管理できないのはしかたがないが」

明久「雄二、せめて即答で言わないで！！……うっつ、何だか変わったチョコレート味だね？」

秀吉「いや、それチーズ味じゃな」

色がドス黒いのは、明久が血の涙を流しているからである。

ふと秀吉が瑞希に視線を向け、瑞希が何か決心した様な表情をするのを見て、ほほ笑む。

姫路「……あの、良かったら私が、お弁当を作ってくださいようか？」

明久「え？……ほっ、本当に良いの！？」

姫路「はい。明日の昼でよければ」

雄二「へえっ、良かったじゃないか明久。女子の手作り弁当なんて殴り殺したい位羨ましいぞ」

明久「うん！でも雄二だと冗談に聞こえないよ??」

冗談だとは分かっているけど、雄二だからこそ笑えない明久だった。美波「ふーん。瑞希って、随分優しいんだね。吉井だけに作ってるなんて」

姫路「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

雄二「え？ 俺達にも？ いいのか？」

姫路「はい、嫌じゃなかったら」

秀吉「わしと白夜と白夜の妹はいらないぞい。白夜曰く一人分でも3人分でも代わらないとか言ってるわしと姉上の分まで作ってきてくれるからの。むしろ一人分だけ作るのががめんどくさいとか言っておったしの、それに黒羽とかいう妹も白夜が作るじやろうからの」女の子の手料理を断ることできるのは秀吉や白夜以外居る訳もなく、その他の人は喜んだ。

作る当人は、5人分となると大変なのに、嫌な顔一つしない。

その様子に明久は、再度彼女に再度関心の視線を向けていた。

明久「それじゃ、そろそろ本題に入らない? 雄二」

雄二「ん？ ああ、そうだな」

秀吉「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

まず真つ先に、秀吉が疑念をぶつけた。

それもそのはず、段階を踏んでいくならEクラスが妥当であり、目的はA。

雄二「簡単だ。姫路に問題がない今、Eなら正攻法でも勝てるが、

Dクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

明久「成程。つまりこれは、最初のステップってわけだね」

雄二「ああ。ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

明久もそこだけならなんとかわかる。

雄二の確信した表情による言葉に、全員が頷いた。

雄二「代表としては、お前も頼りにさせてもらうぞ。明久！」

明久「うん！！」

Dクラス VS Fクラス

今年度初の試験召喚戦争が、幕を開ける

学園長「ほおっつ、今年の2年は1学期初日から試召戦争やるってのかい？ 面白いじゃないか、承認してやりな」

高橋「承知いたしました」

学園長「さて、どうなるかね？ 見せて貰おうじゃ……ん？ Fクラスと言えば、例のガキが居るクラスかい？」

高橋「はい。霧埼白夜……“冷酷なる惨殺者”」

学園長「そうかい、それはますます面白そうじゃないか……それにしてもあの冷酷なる惨殺者かい、どんな戦いになるか見せてもらおうかね。問題を起こさなければいいんだだけさね。」

VS Dクラス（前書き）

問題（保健体育）

女性が妊娠時、体内で子供（胎児）を育てるときには胎児の入れ物になる器官を答えなさい。

土屋康太の答え

『子宮』

教師のコメント

正解です。保健体育に関しては学年一位の土屋君には簡単な問題ですね。ところで解答用紙についている血痕は、土屋君の鼻血ですか？

霧崎白夜の答え

『培養液』

教師のコメント

今の時代、培養液の中で胎児を育てるのは違法ですが、培養液は女性の体の一部ですらない為、当然不正解です。

吉井明久の答え

『お母さんのお腹』

教師のコメント

文月学園が幼稚園だったら、よくできましたと褒めてあげたいのですが、残念ながら、文月学園は高校なので不正解です。

今回の追加

須川〓名前を忘れたため苗字だけ

横田〓苗字しかしらないためそのまま

V S Dクラス

Fクラス対Dクラス

俺と姫路は戦線に出ないで回復試験を受け続けていた。振り分け試験の点数が、全科目0点扱いで、回復試験を受けてから出ないと戦力にならないからだ。そんな俺たちに雄二が声をかける。

雄二「いいか、お前ら二人はこの戦いの要だお前らの活躍次第でこの戦いの勝敗が大きく動く、だから一問でも多く問題を解いて点数を稼げ」

姫路「は、はい！がんばります」

白夜「仕方が無いな。快適な空間で学園生活を送るためだしな」

姫路は気合と緊張交じりに答え、俺はめんどくさそうに答える。

姫路「あの、白夜君、皆の為にがんばりましょう」

姫路が俺に声をかけてくる。そういや、姫路に話しかけられるのは久しぶりだ。

白夜「別に俺は皆の為にやるんじゃないけどな」

姫路「え？」

白夜「俺は快適な空間で知り合いと学園生活を送りたいから、機会があればその内上位のクラス相手に試召戦争を仕掛けて見ようと思ってた、そんな時に丁度、雄二も試召戦争を提案してきたから、丁度いいいな」

俺は、姫路に自分の考えを話す。変な誤解をされても困るからだ。

姫路「でも、白夜君はさっき、やれるだけのことはやると約束してくれました、それにもう白夜君は私たちの仲間じゃないですか」

姫路の言葉に少しだけ面食らう、偶然同じクラスになった奴に対して仲間だなんていうとは思ってなかったからだ。そんな時、雄二がまた、俺たちに声をかける。

雄二「お前ら、普通に聞こえてるからな」

姫路「あ、ご、ごめんなさい！」

白夜「別に内緒話してる訳じゃねえよ、それに、試験で手を抜いてる訳でもないはずだ」

俺と姫路はそれぞれ雄二に返事をする。

雄二「まあいい、それよりも横田。少し頼まれてくれ」

横田「はい、なんですか」

そっつい、横田を呼び、メモ用紙を渡す。一瞬見えたそのメモの内容は、『逃げたらクロス』だった。

雄二「伝言だ、明久達中堅部隊に渡してくれ」

坂本は脱走兵に対し容赦しないようだ。メモを受け取り横田は教室を出て行った。

白夜「秀吉。無事だったか」

横田が出て行って少して、秀吉達前線部隊が帰ってきた。

秀吉「守りは明久達に任せておいた、ワシらは消耗した科目の点数を補充しに来たのじゃ」

雄二「そうか、なら早く、回復試験を始める。とはいっても、消耗した科目を全部受けてる余裕はないだろうがな」

雄二の言うとおり、消耗した科目を今から全科目受けていたら、元の点数で上回るDクラスを相手にしている明久達はそれまで持ち堪えられない。敵の突破を許したら、すぐにこのクラスに突入して代表の雄二を討ちに来るだろう。

姫路「吉井君達は大丈夫なんでしょうか？」

姫路が心配そうに呟く。

秀吉「今は明久や島田たちを信用するしかなかろう、ワシらも一、二科目受けたらまた、戦線に復帰するからお主は残りの回復試験を済ませるのじゃ。白夜は終わっておるのじゃろうしの」

白夜「当たり前だ。ふざけていなければ余裕だしな」

そっいつて、姫路を励ます秀吉。前から思ってたがなんで秀吉はそ

んな年より染みた言葉遣いなんだ、女みたいな容姿も相まってツツコミどころ満載だ。優子にばらしてやろうかな。

須川「坂本、時間稼ぎの為の偽情報を流したい、知恵を貸してくれ！」

そう言つて、教室のドアを思い切り開けて入ってきたのは、戦線に参加していたはずの須川だった。

雄二「須川、どういう事だ？」

須川「Dクラスの奴ら一気に蹴りを着けるらしい、教師を集めようとしてる」

確かにそれはまずい、Dクラスの前線を指揮しているのは、塚本という男子のようで奴は声が大きく命令が行き届きやすい、そのおかげでFクラスの前線部隊にも敵の行動が掴めたのだが、当然Dクラスの連中もその情報を聞きつける、そして命令通り、教師を連れてきてそうなれば実力の差がよりはつきりと出る。

秀吉「雄二、どうするのじゃ」

姫路「このままじゃ、吉井君たちが……」

秀吉と姫路は雄二の顔を心配そうに見上げる。雄二も流石に危篤を感じているようだ。そこに音も立てずに現れた土屋が雄二に話しかける。土屋は隠密行動や謀法活動に長けており、戦闘には極力参加せず情報伝達や偵察を担当している。

雄二「ムツツリーニ。どうした？」

ム「……Dクラスの塚本が数学担当の船越先生を呼ぼうとしている。恐らく、立会いになってもらう為に」

ついにDクラスが行動を開始したようだ。

雄二「まで、船越先生だと……須川。今から言う事を速やかに実行してくれ」

そっぴい須川を呼び何かを話し出す雄二、何か良い策があるのだろうか？

須川「わかった、すぐに放送室に向かう」

雄二「途中でDクラスの奴に襲われないように注意しろ」

白夜「俺が付いて行こう、そのほうが安全だろ」

雄二「ああ頼んだぞ須川に白夜」

……放送室。校内放送で偽の情報を流す気か？だが肝心なのは情報の内容だ、信憑性があり船越教諭を確実に呼び出せる内容でないといけない。

ピンポンパンポン　連絡致します

放送の合図になる。声の主は須川だ。

船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています

……は、明久が体育館裏で？

大事な話があるそうです。なんでも近所のお兄さんが独身で相手がないそうです。

放送が流れる。船越教諭は婚期を逃して、ついに生徒達相手に単位を盾に迫るようになった。危険人物だ。これなら確実に体育館裏に向かうだろうし、明久が来るまで何時間でもその場で待ただろうが、嘘だとばれたら明久が大変なことになる。

雄二「これで、当面の危機は回避できたな」

清々しい笑顔で言つてのける雄二。相変わらず明久に対する扱いは散々な仕打ちだ。秀吉も状況を理解したらしく、複雑そうな面持ちで雄二を見つめる。

姫路「そんな、吉井君は船越先生のような年上の方が好みだったなんて」

姫路はさっきの放送をどう誤解したのかショックを受けている。年上好みといってもさすがにストライクゾーン広すぎだろ、ていうか、明久が惚れてるのはお前だ姫路。

それから更に、回復試験を続け、俺と姫路はようやく全科目の試験を終えた。ちなみに、木下は二科目だけ受けた後一足先に戦線に戻

っていった。

姫路「坂本君。回復試験終わりました」

白夜「雄二。いつでもいけるぞ」

雄二「よくやったお前ら、回復試験も終わったことだし、俺達も参戦するぞ」

白夜「俺達？てことは雄二。おまえは戦線に出るのか？」

雄二「ああ、本隊を連れて明久達に加勢する」

それは意外だった。この場面で代表自ら赴くとは。

白夜「代表のお前が前線に来て危険じゃないのか？」

雄二「気にする事はない、俺がやられる前にDクラス代表の平賀源二をお前らで倒せばいいだけのことだ」

簡単に言ってくれる坂本。それに対し姫路が口を開く。

姫路「あの、多分平賀君は護衛の人を沢山連れてると思いますよ、私達二人でも護衛の人たちを全員と戦ってたら時間がかかってしまいます、その間にDクラスの人たちが坂本君を狙ってくるんじゃない？」

姫路が問題を指摘するが、俺はある疑問を思い浮かべる。

白夜「なあ、雄二」

雄二「どうした、白夜」

白夜「Dクラスの連中は俺と姫路がFクラス所属だって知ってるのか？」

俺の質問に対してニヤリと笑う雄二。どうやら正解のようだ。俺と雄二は姫路に作戦の内容を説明した後、教室を後にする。

姫路「あの、白夜君」

白夜「なにか用か？」

廊下に出ると同時に、姫路に声をかけられる。

姫路「もし、その、よろしければ明日、皆で屋上でお昼と一緒に食べませんか？」

いきなり妙な事を言い出す。

白夜「何でいきなりそんな話になるんだ？てか、皆ってあいつ等？」

雄二「姫路と俺と明久と秀吉と島田とムツリーニだ」

雄二が代わりに答える。

白夜「あのあとにながあつたんだ？」

二人に質問する俺。

雄二「明久は今、一人暮らしで親の仕送りで生活してるわけだが、あのバカは仕送りを無計画に自分の趣味に使うから食費がほとんどなくて主食が塩と砂糖の状態なんだ」

白夜「一人暮らしは知ってるが塩と砂糖って調味料だろ……」

明久の私生活は俺の常識を遥かに超えているようだ。

姫路「そんなんじゃ、吉井君が可愛そうなので私、吉井君のためにお弁当を作ってあげる事にしたんです」

仕送りを無計画に使ってそうなった結果だから自業自得だが、口を挟まずに聞き続ける。

雄二「そのついでに、俺達にも料理を振舞ってくれという事だ」
坂本がそう説明する。

白夜「いや、俺は秀吉や優子の分も一緒に普通に弁当を持って来てるんだが……」

雄二「そうつれない事言うなよ、せっかく姫路がご馳走してくれるんだ、素直に受け取っておけ。他の連中には俺が説明しといてやる」

姫路「あのご迷惑でしょうか……？」

姫路は不安そうな表情で俺の顔を覗き込む。

白夜「……わかった。お言葉に甘えてご馳走になるとするか。ただしもしあれが入っていたら容赦しないぞ、姫路」

俺がそう言つと姫路は笑顔を作る。

姫路「そうですか。それは仕方ありませんね」

白夜「期待してるよ。あと、俺も一応持つてくるぞ？ 優子も誘わないとあとが怖いしな」

学校で他の生徒と食事をするなんて、今までは秀吉と優子だけだったし、正直言えば気が乗らないが、別に嫌と言うほどでもないのからそう答えとく、というか俺が不安なのは姫路の上達具合だった。

雄二は明久と合流する為、一旦別れる、俺と姫路は下校時刻になって下校する生徒に紛れて前線に近づく。そして、その現場に到着すると。明久と平賀の会話が聞こえてきた。

明久「ちくしょう！あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに」

平賀「何を言うかと思えば、吉井君。いくら防御が薄く見えてもFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

どうやら明久がバカなのは全校に知れ渡ってるようだ。

明久「それは同感、確かに僕には無理だろうねだから」

明久「姫路さんよろしくね」

平賀「は、」

吉井の言葉の意味を理解しかねている様子の平賀。

姫路「あ、あの……」

平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が肩を叩いた。

平賀「え？あ、姫路さん？Aクラスはこの廊下を通らなかったと思うけど」

やっぱり、姫路さんがFクラス所属だと思ってないようだ。

姫路「いえ、そうじゃなくて、……」

言いづらそうに身体を小さくする姫路。どうでもいいが、明久はその姿を見て萌えていた。

姫路「Fクラスの姫路瑞希です。Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を挑みます」

平賀「はあ、どうも」

「Fクラス 姫路瑞希 339点

VS

Dクラス 平賀源二 129点」

姫路は大剣を振り落とす。こうしてDクラス代表を打ち取り、この戦いは決着した。

Dクラス戦その後（前書き）

問題（物理）

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました

霧崎白夜の答え

『粒子だつたはず』

教師のコメント

またあなたはうる覚えですか。たまにはまじめにやってみてください。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

Dクラス戦その後

Dクラス代表　平賀源二　討死

FFF団「うおおーっ！」

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳につんざく大音響が校舎内に響き渡る。

FFF団F「凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！」

FFF団H「これで、畳や卓袱台ともおさらばだな！」

FFF団D「ああ。アレはDクラスの連中の物になるんだがらな」

FFF団G「坂本雄二サマサマだな！」

FFF団C「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

FFF団A「坂本万歳！」

FFF団B「姫路さん愛しています！」

白夜「今度はお前か、今回はゆるさんぞ」

FFF団B「冗談です、許してください」

白夜「はあ、仕方がないから許すが二度目はないぞ

代表である雄二を褒め称える声（最後の奴除く）があちこちから聞こえる。

Dクラスの生徒達はというと殆どが、うなだれた状態でその奥では、雄二がFクラスのメンバーに囲まれている姿が見える。

雄二「あー、まあ、なんだ。そう手放して褒められると、なんつか」

頬を？きながら照れ臭そうにする雄二、あいつがそんな仕草を見せるとは意外だった。

FFF団E「坂本！握手してくれ！」

FFF団C「俺も！」

完全に英雄扱いの雄二、俺だけに限らず、他のクラスメイト達もあの教室に相当不満があったようだ。

そんな風に思いながら眺めていると、明久が雄二に近づいてきた。

明久「雄二！」

雄二「ん？明久か」

雄二が振り向く。そこへ、明久が駆け寄って、

明久「僕も雄二と握手を！」

手を突き出す。

明久「ぬおお！」

ガシッ

明久「雄二……！どうして握手なのに手首を押さえてるのかな……！」

雄二「押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！」

そんな訳がない。

明久「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

雄二「……」

明久「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

雄二「今、何をしようとした」

多分、雄二の手首を曲げようとした。

明久「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首が痛いっ！」

雄二「おーい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

明久「す、ストップ！僕が悪かった！」

雄二「…チッ」

雄二のやつは舌打ちをして明久を解放する、この二人は試召戦争が終わったというのにいつまで争っているつもりなんだ？しかも、仲間同士で。

あのまま続けば、明久の生爪は雄二のペンチにより剥がされていたかもしれない。

雄二「……ブツブツ……」

すると、雄二が何かをつぶやきはじめる。

雄二「……生爪……」

俺の予想は正解のようだった。

平賀「まさか、姫路さんがFクラスなんて……信じられん」

その後ろからは、力無く歩み寄る平賀。

姫路「あ、その、さつきはすいません……」

姫路も平賀に近づき声をかける。

平賀「謝ることではない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

姫路のやり方はまさに騙し討ちだったが、これも戦略の内、平賀もそのへんは分かっているようだった。

平賀「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日からで良いか？」

明久「もちろん明日で良いよね、雄二？」

平賀を哀れに思ったのか、明久は雄二にそう聞く。

雄二「いや、その必要はない、Dクラスを奪う気はないからだ」

雄二はあっさりと言った。最終目標がAクラスである以上、Dクラスを手に入れる必要はほとんどないからだろう、

しかし、Dクラスと戦った以上、何か必ず目的があるはずだ、

雄二が俺達の実力やチームワークを測るためにDクラスに挑んだとは思えない。

明久「雄二、どういうこと？折角普通の設備を手に入れることができるのに」

雄二「忘れたか？俺達の目的はあくまでも、Aクラスのはずだろう？」

やはり、それが理由の一つのようだった。

明久「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

明久は雄二が全く読めてないようで、納得のいかないように雄二に問い続ける。

雄二「少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

それは愛称とは言わない。

明久「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ？」

雄二「おつとすまない。近所の小学生だったか」

明久「……人違いです」

雄二「まさか……本当に言われた事があるのか……？」

明久は小学生にすらバカ呼ばわりされているようだ。

雄二「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

平賀「それは俺達にはありがたいが……それでいいのか？」

雄二「もちろん、条件がある」

その条件とやらがDクラスと試召戦争をした最大の目的だろう。

平賀「一応きかせてもらおうか」

雄二「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるあれを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。しかし、あれはDクラスのものではなくBクラスの物である。

雄二「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあると思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

それだけで、Fクラスの設備を回避出来るなら確かに悪い取引ではないし、うまく事故に見せかければ嚴重注意程度で済むだろう。

（西村先生に目をつけられてるらしい明久や雄二がやったら、そうはいかないだろうがな）俺が考えてる間に、平賀もこの条件を承諾し、

雄二と冗談半分の雑談をして去っていった。

雄二「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけるとFクラスの連中は雑談を交えながら教室に向かい始める。

帰り支度をするんだろう。俺も帰り支度をするため教室に戻る。

教室で自分の鞆を取り教室を出ようとし立ち上がると、姫路が使っていた卓袱台の下に鞆にラブレターを思わせるような便箋と封筒が挟まっていた、

もしあれが本当にラブレターなら姫路に惚れてる明久にとっちゃ不幸の手紙みたいなもんだ、だが万が一、嫌、億が一の確立で吉井宛のラブレターなら二人は両思いということになる。

まあそんなことはないだろうし、俺には関係のない話だ。そう思いながら、教室を後にする。

校門を出たところで優子が立っていた。

優子「遅い！」

白夜「すまん、優子。」

優子「なんで遅くなったのかは理解してるけど、それでももう少し急いできてもいいでしょ？」

白夜「そうだな。あつ！そっいえば夕飯の買い物しなきゃならなかった」

優子「試召戦争のあとで疲れてるのに買い物とか少し大変でしょ？私も手伝うわよ」

優子はそう言っではくれてるけど実際そんなに疲れているわけじゃなかった。

白夜「そうか、じゃあ頼む。そっいえば昼に見たと思うが黒羽がこっちに来た」

優子「あれには驚いたわ、確か黒羽ちゃんって京都の高校いってるはずよね？」

優子が興味深そうに聞いてくる。そっいえば理由は話していなかったな。

白夜「どうやらお婆様の差し金らしい」

優子「それなら深くは聞かないわ、あのお婆様ならありえないことはなさそうだし」

1度だけ優子とうちのお婆様とは会ったことがあった。

優子「そういえば試召戦争はどうなった？」

試召戦争の事は今朝、優子に話してあった。試召戦争が長引くと帰りが遅くなるからだ。

白夜「ウチのクラス代表が雄二だったおかげで勝っちまったよ」

優子は少し首をかしげた。

優子「なんであの問題児の坂本君が代表だったからって勝つの？」

白夜「あいつはあれでも小学校の時は神童と呼ばれるほど頭の回転はいいんだよ。まあなぜ勉強しなくなったかはしらんがな」

白夜はその場にいなかったたので翔子と雄二の間に何があったのかなどは把握していません。

優子「代表と坂本君の間になにかあったのかもしれないわね。それより早く買い物して帰りましょ、あれからだいぶ時間がたったようだし」

白夜「そうだな。早く帰らんと秀吉と黒羽にからかわれるしな」

優子「それはあの子達だし否定できないわね」

こうして白夜と優子は仲良く喋りながら買い物をして帰るのであった。

翌朝、いつも通り学校に向かう。クラスの大半の生徒は昨日消耗した点数を補充する為のテストを受けている。俺は昨日、あまり点数を消耗してない為その必要はないので、ゆっくりできる。そんな時、近くで明久と島田の会話が聞こえる。

美波「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がっちゃたじゃない！」

そういえばこの学園にはそんなのがあったんだった、というか島田はまだ上がる余地があったとは思わなかった。

美波「-と、本来は掴みかかっているんだけど」

島田はそんな事を言っているが、既に明久の顔には殴られたような跡がある。鼻血とかが出てるし。

美波「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

この二人に一体何があったんだろうか？

明久「うん、さっきから鼻血が止まらないんだ」

美波「いや。そうじゃなくてね」

明久「ん？それじゃ何？」

美波「一時間目の数学のテストだけど。監督の先生、船越先生だつて」

俺の脳裏に昨日の校内放送が思い浮かぶ、明久は一時間目を無事に過ごせるのだろうか？

四時限目が終わり、昼休みが来る。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！今日は姫路の手作り弁当だったな勢いよく立ち上がる雄二には疲れが見られない。

雄二「おい、白夜、お前も姫路の弁当食うんだろ、早く来いよ」

俺に声をかける雄二。約束なので付き合う事にする。

明久「そう言えば今日は白夜も一緒なんだね雄二から聞いたよ」

明久が俺に近寄って話しかけてくる。

秀吉「そう言えばそうじゃったの、白夜は一昨日のミーティングの時にはおらんかったからの、話し合いもしなければの。そういえば姉上を呼んで来なくていいのかの」

秀吉はそんな事を言うがすっかり忘れていた。

白夜「いけね、忘れてた。それじゃあ俺はAクラス行ってくるから先にいっててくれ」

明久「それじゃあ屋上にいるから遅くならないようにね」

俺が行こうとしたら明久がそういった。

雄二「お喋りはもういいだろ、俺は飲み物でも買ってくるから先行つてろ」

美波「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

雄二「俺達の分とっておけよ」

明久「大丈夫だってば、あんまり遅いとわからないけどね」

雄二「そう遅くはないはずだ。じゃ、行ってくる」

雄二と島田は財布を持って一階の売店に向かっていった。

明久「僕らも行こうか」

姫路「そうですね」

明久は姫路が抱えていたバックを受け取る。そして俺と雄二と島田以外は屋上まで歩く。

Aクラスでの会話は省略します。

秀吉「天気が良くてなによりじゃ」

姫路「そうですね！」

外は良く晴れた青空で秀吉の言うとおり、弁当日和だった。屋上には俺達以外誰もいないようで貸しきり状態だ。

明久「気持ちいいね！」

黒羽「確かにこれは気持ちいいですね」

ム「……（コクリ）」

「おつす、早くも登場だぜ」

俺は屋上についてそういった。

優子「Fクラスの交流みたいなのに本当に私がいてもいいのかしら？」

秀吉「いいのじゃよ、姉上のことは事前に白夜が説明しておったからの」

優子が疑問に思ったことに秀吉が答えた。

姫路「あの、あんまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱の蓋を取る。

男子（白夜と秀吉以外）「おおっ！」

俺と秀吉以外が同時に歓声をあげる。中には、から揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番のメニューが重箱に詰まっていた。

明久「それじゃ、雄二には悪いけど、先にー」

ム「……（ヒョイ）」

明久「あつ、ずるいぞムツツリー二つ」

明久が取るうとしたエビフライを土屋が素早く摘み取る。

白夜「エビフライなら他にもまだあるんだからいいだろ？」

明久「まあ、それもそ……」

バタン ガタガタガタ

明久が言い終わる前に土屋が豪快に倒れ、小刻みに震えだした。

明久「……」

秀吉「……」

黒羽「……」

明久と秀吉と顔を合わせる。そして黒羽は驚いているようだ。

姫路「わわっ、土屋君！？」

姫路が慌てて配ろうとした割り箸を落とす。

ム「……（ムクリ）」

土屋が起き上がる。

ム「……（グッ）」

そして、姫路に向けて、親指を立てる。

「凄く美味いと」伝えてるつもりらしい。

姫路「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

土屋の言いたい事が伝わったらしく姫路が喜ぶ。しかし、土屋の足は未だにガクガクと震えている。

姫路「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路がどんどん笑顔で勧めて来る。しかし、今の土屋の様子を見た後ではそれを素直に口に入れる気にはなれない。

明久（……秀吉、木下さん、白夜。あれ、どう思う？）

姫路に聞こえないくらいの小声で明久が話しかけてくる。

秀吉（どう考えても演技には見えん）

白夜（まさかそこはまだ成長してなかったか）

優子（え！それどうゆうことよ）

黒羽（どういうことですか、お兄様）

白夜（明久、秀吉、優子、そして黒羽。姫路のやつが作ってきた弁当だが多分王水の材料が混じってる）

明久（なんだって！見た目はあれだけいいじゃないか）

白夜（昔あいつは調理実習のときに科学薬品を入れたことがあったな、教師すら倒れた）

秀吉（ならば、ここはワシに任せてもらおう）

無謀にも秀吉が名乗りを上げる。

明久（そんな、危ないよ！）

秀吉（大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのだ）

それはタフな内臓だ。というか、ジャガイモの芽なんて食った事あったのかよ？あれ毒だぞ。

秀吉（安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じてー）

秀吉が、意外と頼もしい台詞を言おうとしたところで、

雄二「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

雄二が現れた。

明久「あっ雄二」

明久が止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パク　　ボタンーガシャガシャン、ガタガタガタ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた。

美波「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が雄二に駆け寄る。

雄二は土屋と同じように震えている。コイツは本物のようだ……雄二と明久は何かアイコンタクトみたいなことをしているが、その内容はさっぱりわからない。

雄二「あ、足が……攣ってな……」

姫路に気を使ってるのか、あからさまな嘘をつく雄二。正直かなり無理がある。

明久「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな？」

秀吉「うむ、そうじゃな」

そんな雄二にフォロー？をいれる明久と秀吉。

美波「そうなの？坂本ってこれ以上ないぐらい鍛えられてと思うけど」

事情のわかっていない島田が不思議そうな顔をする。

明久「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ」

明久がビニールシートに腰を下ろしている島田の手を指差す。

美波「ん、何？」

明久「さっきまで、虫の死骸があつたよ」

大嘘だ。

美波「ええっ！？早く言つてよ！」

慌ててよける島田。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方が良いよ」

「そうね。ちよつと行ってくる」

席を立つ島田。明久は妙に女にはお人好しな奴だ。

そして俺達は作戦会議を始める。

雄二（明久、今度はお前が行け！）

明久（む、無理だよ！僕だったらきつと死んじやう！）

秀吉（流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

優子

さすがにあれはないわよ

白夜（雄二、お前さつき卵焼き食ったんだからお前が素直に不味過ぎてこれ以上は食えないって言えよ、それで万事解決だ）

明久（何言ってるのさ白夜！そんな事言ったら、姫路さんが凄く傷つくじゃないか！）

白夜（お前はそんな事と自分の身の安全とどっちが大事なんだよ……）

明久（そんなこと言われても……）

明久「あつ姫路さん、アレはなんだ!？」

姫路「えっ？何ですか？」

明久の指した明後日の方向を姫路が見る。

明久（おらあ!）

雄二（もごああっ!?!）

その隙に雄二の口の中に弁当を押し込んでいた。

明久「ふう、これでよし」

秀吉「……お主、存外鬼畜じゃな」

白夜「おい明久おまえなんてことするんだ!」

優子「吉井君、あなた最低ね」

黒羽「吉井様は最低な馬鹿ですね」

明久は俺と秀吉と優子の言った事には無反応だった、最後の黒羽の言葉にだけは落ち込んだようだが。

明久「ごめん、見間違いだったよ」

姫路「あ、そうなんですか」

こんな古典的な手にひっかかる姫路。成績が優秀な割にはかなり単純なようだった。

姫路「あれ、早いですね。もう、食べちゃったんですか？」

明久「うん、雄二が『美味しい美味しい』て凄い勢いで」

雄二はそんな事一言も言っていないが、倒れながらも力なく首を振る。

姫路「そうですかー嬉しいです。」

明久「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二?」

雄二「う……う……。あ、ありがとうな姫路……」

目が虚ろだった。俺はとても礼を言う気にはなれない。

姫路「あの、実はですねー」

明久「ん、どうしたの？」

姫路が鞆を探る。

姫路「デザートもあるんです」

明久「ああ、あれはなんだ！」

雄二「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

雄二が即座に明久の行動を阻止する。これ以上ここにいると次は俺もやばい、二人がいつもの如く喧嘩を始めている隙にゆっくりと立ち去ろうとしたとき。

秀吉「ワシがいこう」

明久（秀吉！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

優子（秀吉！？あなた何言ってるの！）

黒羽（秀吉様、それではあなたが犠牲になるではありませんか！）

雄二（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

白夜（秀吉、少し考え直したらどうだ）

秀吉（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

本当に毒をも消化する胃袋なら大丈夫かもしれないが。

姫路「どうかしましたか？」

白夜「あ、いや、！なんでもない」

姫路「あ、もしかして……」

姫路が顔を曇らせる。嫌がつてるのがバレたか？自分で気づいてくれるならそれでいいのだが。

姫路「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてきちゃいましたっ」
俺の期待は外れた。そして姫路は階段を下りていった。

秀吉「では、この間に頂くとするかなの」

秀吉が果敢に容器に手を触れる。

白夜「……すまん。あとでこれでも飲ますからな」

明久「ごめん。ありがとう」

優子「さすが私の自慢の弟よ」

黒羽「あとで膝枕ですかね」

なんか黒羽がカミングアウト気がするが気にしないでおう。

秀吉「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない」

そして、容器を傾け、一気にかきこむ秀吉。

秀吉「むぐむぐ、なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ!」

自称『鉄の胃袋は』白目で泡を吹いていた。

明久「…雄二」

雄二「…なんだ?」

明久「…さつきは無理に食べさせてゴメン」

雄二「…わかってもらえたならいい」

白夜「優子、明久。手分けしてこれを雄二と秀吉に飲ましてくれ。

俺は土屋のやつに飲ましてやるから」

優子「そういえばさつきから持つてるけどそれなんなのよ」

白夜「姫路の殺人料理用の中和剤だ。本当は最初に弁当に隠し味と偽ってかけるつもりだったんだが明久たちが急いで食おうとするからかけそこなっただよ」

明久「なるほどね、それじゃあ急いで飲ませないかね」

俺の多分人生で始めてであろう学校での集団での食事は姫路の殺人弁当で幕を閉じた。

優子は秀吉に中和剤を飲ました後にAクラスへと戻っていった。

激しい昼食を終え、復活した奴らも含めてお茶をすする。

美波「ねえ、坂本どうして次はBクラスなの? 目標はAクラスですよ?」

島田が雄二が次の目標をBクラスにしたことについて疑問を投げかける。

雄二「正直に言おう」

雄二がいきなり神妙な面持ちになる。

雄二「どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスに勝てない」

それは最もだと思うが、雄二がそんな事を言うとは予想外だった。美波「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更でこと？」

島田はそう聞くがそれは絶対でない。

雄二「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

明久「雄二、さっきといってることが違うじゃないか」

俺は雄二の考えの一部を見抜き代わりに説明する。

白夜「クラス単位では勝てないから、一騎討ちにでも持ち込むのか？」

雄二「よくわかったな白夜。その通りだ」

明久「一騎討ちに？どうやって？」

雄二「Bクラスを使う」

雄二はそう言うが、明久は理解できてないようだった。

雄二「明久、試召戦争で下位クラスが負けた場合どうなるか知ってるよな？」

明久「え？も、もちろん！」

姫路（吉井君、下位クラスは、負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ）

明久「設備のランクを落とされるんだよ」

姫路が助け舟を出したのがバレバレだがそこはスルーする。次は雄二が明久に質問する。

雄二「では、上位クラスが負けた場合は？」

明久「悔しい」

さすが明久。バカ丸出しの答えだ。

雄二「ムツツリーニ、ベンチ」

明久「僕を爪切り要らずの身体にする動きがっ」

姫路「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

また、姫路が助け舟を出していた。

白夜「つまり、うちに負けたら最低の設備に替えられるんだ。そして、そのシステムを使って交渉する訳だろ」

俺も明久に説明する。

黒羽「交渉ですか？」

雄二「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからうまくいくだろう」

雄二の説明は続く。

雄二「それをネタに交渉する。Bクラスとの戦いの直後に攻め込むぞと」

明久「なるほどね」

明久を含めた全員が理解したようだ。

雄二「ということで明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告してこい」

再び、明久に貧乏くじを押し付ける雄二。

明久「断る、雄二が行けばいいじゃん」

さすがに断る明久。大勢で行けば痛い目にあう確率は減るんだが、明久はそれに気がついてないようだ。

雄二「そうか、ならジャンケンできめるか？」

明久「ジャンケン？」

あれ、明久の奴また迷ってるのか？

明久「OK。乗った」

こうして雄二のペースに飲まれていく明久。ほんとに学習しない奴だ。

雄二「ただのジャンケンじゃつまらないし、心理戦ありでいこう」

さらに、雄二からの提案。これで明久に勝ち目は完全になくなった。明久「わかった、僕はグーを出すよ」

雄二「そうか、なら俺はー」

雄二の手は……

雄二「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」
脅しだった。

雄二「行くぞ、ジャンケン」

明久「わぁあっ！」

慌てる明久を無視して雄二が進める。

雄二はパーで明久はグー。

雄二「決まりだ、言って来い」

明久「絶対に嫌だ」

雄二「Dクラスのと看みたいに殴られるのを心配してるのか？それなら今度こそ大丈夫だ保証する」

雄二の全く当てにできない保証とは？

雄二「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いらしい」

明久「そっか。それなら確かに大丈夫だね」

白夜「なんでだよ！」

俺は思わず声に出して突っ込んだ。

雄二「でも、お前ブサイクだしな……」

明久「失礼な！365度どう見ても美少年じゃないか！」

白夜「明久、円の角度は360度だぞ、まさかあれだけ教えてやったのに覚えてないだろ！」

雄二「5度多いな」

秀吉「実質5度じゃな」

明久「2人なんて嫌いだ、そしてごめん白夜」

そう言いながらもBクラスに駆け出す明久そして、

明久「……言い訳を聞こうか」
ボロボロの明久が戻ってきた。こうしてBクラス戦の準備は調ったのだった。

キャラ設定（前書き）

ここいらで主人公のキャラ紹介しときましようかね。まあサブキャラはいますが設定は簡単なもので。

キャラ設定

名前：霧崎白夜

年齢：17歳

性別：男

キャラの特徴：銀髪で赤目の身長178センチで細身な感じ。

召喚獣の特徴：見た目は騎士団制服のような服装でツインブレードを持っている白夜のデフォルメキャラ。

召喚獣の装備：騎士団制服のような服、腰にハンドガン、ツインブレードを手に持っている。

備考：バカテスの本編キャラの幼馴染で転生者。昔に不良と喧嘩した経験あり、そのときについたあだ名が「冷酷なる惨殺者」。警察にはお世話になったが自身が持つ能力で会計などの仕事を手伝ったため警察側が事件をもみ消した。

名前：霧崎黒羽

年齢：17

性別：女

キャラの特徴：黒髪で赤目身長158センチでスリム体系

召還獣の特徴：見た目は剣道の胴着に防具（頭なし）をつけている感じで黒羽のデフォルメキャラ。

召還獣の武器：メインは刀、符術も使えるように学園長を白夜とともに脅して変更させた。

備考：白夜の妹で今回は祖母のところで修行していたので2年からになってしまった。

名前：木野紀子

年齢：17歳

性別：女

キャラ特徴：サドな女で人が怪我をしたりすると喜び、そうでないときは気の弱そうな人間をいじめて快樂を得ている。

B クラス戦（前編）（前書き）

問題（科学）

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか
吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

霧崎白夜の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
正解です。申し訳ありませんが、吉井君と土屋君を後で職員室に連れてきてくれませんか

お知らせ

Fクラス男子はほとんどがF F F F団の団員のため^{アルファベット}団員番号で表示していくことが多いです。

今回の追加はCクラス河合〓苗字だけ

根本恭二〓根本

小山友香〓小山

木野紀子〓紀子

芳野〓苗字だけ

Bクラス戦（前編）

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴る。Bクラスとの戦いがいよいよ始まる。雄二「よし、言ってくる！目指すはシステムデスクだ！」

FFF団「サー！イエッサー」

明久達の前線部隊は雄二の号令を合図に廊下に駆け出した。

俺は今回雄二の本隊の副官で教室に残る事になる。

雄二「白夜、敵の代表は知ってるか？」

白夜「たしか、根本恭二だったな。奴は評判が色々悪い上に悪知恵が働くからな、Dクラスの時と同じ感覚で挑んだら痛い目を見るだろな」

雄二「そうだな、それにBクラスには木野紀子もいる」

白夜「木野って根本の参謀役の木野紀子だよな？」

木野紀子は一年の時から根本の参謀で噂によると人を痛めつけるのに

快感を感じているサディストで根本に弱みを握られた奴の何人かが木野の玩具にされてるらしい。

雄二「奴らは勝つためならどんな汚い手段でもやるような連中だ用心してもし過ぎる事はないと思え」

白夜「勝つために手段を選ばないという点ではFクラスの代表様と同じってか？」

雄二「ははっ、そう思ってくれて構わないぜ」

俺と雄二がそんな冗談を交わしていると。教室のドアが開く、入ってきたのは

他のクラスの女子生徒だった。

河合「失礼します。Cクラスの河合といいます。Fクラス代表の坂本君に伝言を伝えに来ました」

雄二「俺が坂本だ伝言とは何だ？」

河合「Bクラス代表の根本恭二君が協定を結びたいので、音楽室に来てほしいとのことですが、

勿論立会いになるような先生はいません」

白夜「根本が協定をそれをなんでCクラスのアンタが伝えに来る」

俺は河合に問いかける。

河合「Bクラスの人がFクラスの教室に近寄ろうとするとFクラスの人達に妨害されるからです」

それでCクラスの河合が頼まれたらしい。

白夜「雄二どうする？」

雄二「協定を結ぶかどうかは内容次第だが話ぐらいい聞いてもいいだろ。もちろん、

用心のため本隊のメンバーを連れてだかな」

という事は俺も同席する事になる。

雄二「白夜、異論はないか？」

白夜「代表のお前が決めたなら文句はない」

俺と雄二の意見がまとまると河合は携帯を取り出し、どこかに電話を掛ける。

根本に連絡を入れてるのだろう。

河合「おまたせしました、では私に付いて来て下さい」

俺達は河合に案内されて音楽室に入る。

根本「ようこそFクラス代表さん」

音楽室に入るなりそう言ってきたのはBクラス代表の根本恭二。

むこうも用心のためか数人の取り巻きを連れている。しかしその中には参謀の木野の姿がない。

白夜「あなたの参謀の木野はどうした」

俺はその事を根本に聞く。

根本「ああ、あいつは別の仕事が入ってね、今ここにはいないんだ」

雄二「それは、前線の指揮か？」

雄二が問いたです。

根本「それを言ったら、俺は自分達の戦況を相手に漏らすことになる、代表としてそんな真似は出来ない」

雄二「それもそうだな、じゃあそろそろ、協定の内容を聞こうか」
本題に入る二人。

根本「簡単な話さ、四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして

続きは明日午前九時からに持ち越し、その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する」

坂本は少し考えた後。

雄二「いいだろ、協定を結ぶ」

協定に賛成した。確かにこの協定は俺達にとって好都合だ。

あいつらを教室に押し込めば今日の戦闘は終了になるだろうし、そうなれば、作戦の本番は明日になる。

この調子では本丸を落とせそうにないし、その時はクラス全体の戦力よりも姫路個人の戦力が重要となる。

雄二もそれを思っただろう。雄二は根本と協定を結んだ後音楽室を跡にし俺もそれに続く

、帰り際根本の制服のポケットになぜか手紙が見えたが特に気に留めることはなかった。

白夜「……やられたな雄二」

雄二「ああ、根本はこれを狙ってたわけか」

白夜「木野がいなかったのはこの教室を攻撃する為に指揮をとってたからだろうな」

教室に戻った俺達が見た光景は、穴だらけになった卓袱台と折られたシャープペンと消しゴムだった。

明久「……うわ、こりゃ酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

そこへ秀吉と明久が前線から戻ってきた。

雄二「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

明久「雄二がそういうならいいけど」

雄二の言葉に頷く明久。

明久「でも、どうして雄二と白夜は教室がこんなになってるのに気づかなかったの？」

明久の質問に対して俺と雄二は協定のことや教室を留守にしていたことを説明する。

秀吉「明久。とりあえずワシらは前線に戻るぞい。向こうでも何かされているかもしれん」

そう言い秀吉は教室を出て行く。

白夜「明久、お前も秀吉と共に早く戻れ」

明久「ん。雄二に白夜、あとよろしく」

雄二「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

明久は秀吉を追い駆け出し、俺と雄二は回復試験に必要な道具の準備をする。

午後四時が過ぎて、前線にいたメンバーの一部が戻ってきた。なぜか明久が気絶した状態で。

白夜「姫路、明久がなぜこうなったか説明できるか？」

俺は姫路に聞いて見る。

姫路「直接見たわけではないんですけど、誰かに散々殴られた跡に頭から廊下に叩きつけられ

たような怪我をして倒れてたんです」

多分それ正解だ。俺の脳裏には怒りに燃える島田が明久を半殺しにするビジョンが浮かんだ。

明久「…ここはどこ？」

明久が死の淵から生還したようだ。

姫路「吉井君！心配しましたよ」

秀吉「試召『戦争』じゃからといって本気で怪我をする必要はないんじゃないぞ？」

心配そうに声を掛ける姫路と秀吉。起きたばかりの明久に雄二は戦況を伝える。

雄二「一応計画通り教室前に攻め込んだ、最も、こちらの被害も少くないがな、白夜。

このメモを読んでくれ」

俺はこちらの被害の書かれたメモを読む。

ム「……（トントン）」

雄二「ムツツリー二か。何か変わったことはあったか？」

土屋は今回も情報係で、戦闘に参加せず、周囲を警戒していた。相手の動きを逃さずチェックする為。

雄二「ん？Cクラスの様子があやしいだろ？」

ム「……（コクリ）あと黒羽がBクラス男子数人に連れ去られた。

根本が何かで脅していたのをカメラで確認した」

白夜「よし、秀吉はこれをもって康太とともに黒羽を迎え行つてやれ。俺のあだ名を使ってもかまわないから必ず助け出すんだ、いいな」

俺はそういつて薙刀を秀吉に渡した。

秀吉「ふむ、了解した。必ずや黒羽を救い出してみせようぞ。ムツツリー二、案内せい」

ム「……最近本名で呼ばれない、まあいい。こつちだ秀吉」土屋の話によるとCクラスが試召戦争の用意をしていて黒羽がさらわれたらしい。黒羽は秀吉と康太に任せて問題はCクラスだ、Aク

ラス相手に戦うわけじゃないだろうし目的は―

雄二「漁夫の利を狙うつもりか。いやらし連中だな」

雄二が俺より先に答える。この戦争の勝者を相手に戦うつもりだろ、疲弊している相手に。

明久「雄二、どうする」

雄二「んー、そうだなー。Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスを使
って攻め込むぞとか言って

脅せば俺達を攻める気もなくなるだろう。」

白夜「そもそも、俺らが勝つなんて思ってもないだろう」

明久「Cクラスとの協定うまくいきそうだね」

雄二の提案に俺と明久が言葉が続ける。秀吉を残し（雄二の意向で）
教室から出ると、

島田と須川と出会う。

美波「吉井。あんたの返り血こびりついて洗うの大変だったんだけ
ど。どうしてくれんのよ」

須川「それって吉井が悪いのか」

やはり、吉井を殺したのは島田だった。

白夜「島田に須川。ちょうどいい聞いてくれ」

俺は二人に事情を話し、同行を頼む、この人数だと吉井が使者をや
った時のように

Cクラスの連中が襲ってくるかもしれないので人手がいる。

美波「んー別にいいけど？」

須川「俺も大丈夫だ」

交渉成立。

秀吉「急がんとCクラスの代表が帰ってしまうぞい。」

「うん、急ごう」

俺、雄二、姫路、明久、島田、須川の六人でCクラスに向かい、土
屋と秀吉の2人で黒羽の救出に向かう。

まことに勝手ながら黒羽のほうは省略させていただきます。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だこのクラスの代表は？」

坂本が扉を開き教室の全員に告げる。教室には大勢残っており、土屋の情報どおり漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしてるようだ。小山「私だけど、何か用かしら？」

名乗り出たのはショートの女子。確か、バレー部の小山友香だ。

雄二「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるかは？」

小山「クラス間交渉ふうん……」

いやらしい笑みを浮かべる小山。

雄二「ああ。不可侵条約を結びたい」

小山「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本君？」

根本だと？

根本「当然却下。だって、必要ないだろ？」

明久「根本君！Bクラスの君がどうしてここに！」

吉井が驚きの言葉を発する。奥から木野を初めとした取り巻きを連れてきて現れたのは根本恭二。

根本「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召

戦争に関する一切の行為を禁止したよな」

明久「何を言ってる……」

根本「先に協定を破ったのはそつちだからお互い様だよな」

根本が告げると同時に取り巻き動き出し、背後から数学教師の長谷

川教諭が現れた。

芳野「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

白夜「邪魔だ！Fクラス霧崎白夜が相手になる。サモン！」

雄二を攻撃しようとした芳野を俺が身代わりになる。

明久「僕は協定違反なんてしてない！これはCクラスとFクラスの」

明久が抗議するが何を言っても無駄だ俺は明久に指示を出す。

白夜「無駄だ明久、早く雄二を連れて全員逃げろ！」

雄二「白夜の言うとおりだ明久。根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まってる！」

根本「ま、そゆこと」

明久「屁理屈だ」

根本「屁理屈も理屈のうちだってな」

雄二「明久、逃げるぞ」

明久「くそっ！」

ようやく雄二達がCクラスから退避する。

「Fクラス 霧崎白夜 数学 600点

VS

Bクラス 芳野孝之 数学 161点」

俺の召喚獣はツインブレードで芳野の召喚獣を一刀両断する。しかし、直後にBクラスの召喚獣が二体召喚される。

「Fクラス 霧崎白夜 数学 600点

VS

Bクラス 高原聡子 数学 167点

Bクラス 小野田洋平 数学 163点」

Bクラスの召喚獣二体同時相手は流石に手間がかかるが、撃退に成功する。

木野「たったの一人相手に何してんの？邪魔だから早く補習にでもいったらあ」

そう言つて現れたのは根本の参謀の木野紀子。

木野「君強いんだねえ、いいねえそういう男の子、虐め甲斐があつてドキドキしちゃう」

物騒な事をいう木野、噂通りのサドのようだ。

「Fクラス 霧崎白夜 数学 587点

VS

Bクラス 木野紀子 数学 186点

Bクラス 犬飼正志 数学 151点
Bクラス 三村貴子 数学 166点

これではきりが無い。このまま数学で戦い続けたら。いずれ点数が0点になり、俺は戦死、こいつらは一気に雄二を狙い襲撃してくる上、俺がいなくなれば、雄二の護衛は手薄になる。俺が焦りはじめていると。

須川「霧崎！俺と代われ！」

白夜「須川！逃げると言っただろ」

須川「お前がやられたら、Fクラスにとって致命的な戦力ダウンだ、早く坂本の下に逃げ！」

須川の言う事は正しい、俺が本隊の副官に選ばれたのは姫路に次ぐ戦力で雄二を守るという目的もある。

その俺がここで戦死する事は、雄二の戦死に繋がりがねない。

白夜「悪い須川。頼む」

須川「ああ、逃げ」

俺は須川にその場を託し全力で走る。少しして、須川がやられたらしく、Bクラスの追っ手がぞろぞろと来る。

その途中で吉井と島田を見つける。

白夜「お前ら何立ち止まってる！早く逃げろ、追っ手がもう目の前だ！」

明久「白夜！無事だったの？」

白夜「須川が来て代わってくれたんだよ、そんな事より早く走れ」

明久「いや、白夜は先に行って、雄二たちを守ってほしい、僕は敵を食い止める」

明久がそんな事を言い出す。

白夜「敵が何人いると思ってるんだ！お前らじゃすぐにやられるだろ」
美波「霧崎お願い、ウチらを信じて！ウチらだって簡単に戦死する気なんてないわ」

白夜「島田まで何言ってる……もう敵が来ちゃった、後で絶対来い！」

いいな」

美波&明久「もちろん（だよ）（よ）」

俺は二人を残し逃げ続ける。

教室に戻り雄二たちと合流する。

雄二「白夜、無事だったか」

秀吉「心配したぞい」

白夜「秀吉のほうは終わったようだな、黒羽は何かされてたか？」
ム「・・・Bクラス男子に襲われてた、後一步遅かったら危なかった」

康太の状態から察するにまじでやばかったらしいな。よし、Bクラス
のやつらには明日地獄をみせてやろう。黒羽は現在秀吉の腕の中
で泣いていた。少し制服がずれている気がするがそういうことだっ
たのだろう。

白夜「ああ、しかし須川がやられた、それに明久と島田もヤバイ」

俺は状況を説明する。

姫路「坂本君、吉井君は、大丈夫、なんですか……」

姫路が泣きそうな声を出す。

雄二「もちろんだ。他の奴ならともかく、明久ならなんとかなる」

姫路「……でも」

白夜「雄二、お前何言って……そういうことか」

雄二「確かにあいつは勉強が出来ない。でもな、学力が低いからと
いって、すべてが決まるわけでもないだろう？」

姫路「そ、それは、どういう……？」

雄二「あのバカも伊達に 観察処分者 なんて呼ばれてないってこ
とだ」

雄二は極めて力強くそう言った。

明久「あー、疲れた！」

姫路「よ、吉井君！無事だったんですね！」
本当に戻ってきた明久に姫路が駆け寄る。

白夜「マジでやりやがった……」

俺も流石に驚きを隠せずその場に立ち尽くす。

明久「うん、これぐらいなんとも……って痛い！」

島田に爪先を踏み抜かれる明久。

明久「し、島田さん。僕が何か悪い事でも」

美波「（キツ！）」

明久「あ。いや美波」

明久に睨みを利かす島田。

姫路「……随分と二人とも仲良くなってますね？」

明久「え？これで？」

姫路が妙な事を言う、客観的に見ても険悪にしか見えない……と思
ったものの俺も直後に明久が

島田を『美波』とよんでる事に気づく、この二人はいつも俺の知ら
ない間に何をしてるんだ。

雄二「お。戻ったか。お疲れさん」

秀吉「無事じゃったようじゃな」

秀吉と雄二もやってきて、土屋も明久を見て小さく頷く、雄二たち
は本当に明久がやられるとは思ってなかったらしい。

美波「あれ？黒羽が泣いてる気がするけど。何かあったの？Bクラ
ス男子がさらったってことは聞いたのだけど」

白夜「後一步秀吉たちが間に合わなかったら貞操が危なかったって
とこだ。あまり触れてやるな、秀吉のおかげで今は落ち着いてるが
いつ自殺なんてことを考えるかわかったものじゃないからな。兄と

しては情けないばかりだ。何も出来ないのだからな」

美波「あんたはあまり考えないほうがいいわよ、優子が気にするだらうし」

島田はこのまえの屋上以来優子のことを名前で呼んでいるようだ。

雄二「さて、お前ら」

その場に残る全員を見渡し雄二が告げる。

雄二「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、

正直Bクラス戦の直後のCクラス戦はきつい」

敵もそれを狙っているなら、俺達が勝ってもすかさず攻めてくるだろう。

今思えばCクラスの河合がBクラスからのメッセンジャーになっていたのは、

根本と小山が裏で繋がっていたからだ。

明久「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

秀吉「そうじゃな……」

雄二「心配するな」

頭を悩ます明久達に雄二が活き活きとした顔で告げる。

雄二「向こうがそう来るなら、こっちにも考えがある」

明久「考え？」

雄二「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

この日はこれで解散し、続きは翌日に持ち越したとなった。

Bクラス戦（前編）（後書き）

更新が著しくなくなります。

B クラス戦（後編）（前書き）

問題（英語）

以下の問いに答えなさい

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good ? better ? best
bad ? worse ? worst』

霧崎白夜の答え

『good ? better ? best
bad ? worse ? worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good ? gooder ? goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est を付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad ? butter ? bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

前回に続きましてBクラス戦です。

山田教諭〃山田

B クラス戦（後編）

翌朝、俺達は昨日雄二が言っていた作戦を聞きに集まる。

雄二「秀吉にコイツを着てもらう」

雄二がそう言つて鞆から取り出したのは女子の制服。

白夜「お前、なんでそんなの持つてるんだ？」

秀吉「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

白夜「秀吉、お前死にたいのか？」

秀吉「どうゆうことじゃ白夜」

白夜「雄二の話を聞けばわかるさ」

そう、坂本雄二の話を聞けばね。

雄二「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装いCクラスを挑発してもらう」

雄二のその言葉で秀吉は理解できた。

Aクラスには秀吉の双子の姉のである優子が所属しており、一卵双生児のようにそっくりな容姿をしている。

あいつに化けてAクラスとして圧力をかけるという策だ。

雄二「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

秀吉「い、いやじゃ。それなら白夜に頼んで姉上にやってもらえばよからう、わしはまだにしたくないのじゃ」

雄二からの要請を断り、その場で怯える秀吉。俺は優子にメールで連絡するべく携帯を操作した。

雄二「ん、どうゆうことだ秀吉。それになぜそんなに怯えてるんだ？」

白夜「秀吉の変わりに俺が答えよう。秀吉の姉である優子は優等生だから自分の評判に傷がつくのを嫌がっているな。

おそらくこのままやっていたら秀吉は優子による制裁がくるだろうからそれに怯えてるんだ」

そこまで説明したら雄二も少しは納得したらしい。

ちなみにその近くでは、土屋が凄い速さでカメラのシャッターを切っていた。秀吉の怯えた姿でも売る気だろう。

優子「こんな時間に呼び出して何のようよ白夜」

いつの間にかメールに気づいた優子が来てた。

白夜「ああ、実はCクラスをAクラスのほうで潰してほしいんだ。

俺等は昨日に引き続きBクラスと

やらなきゃならんし、なによりBクラスとCクラスは協力してるらしくてなどにかしたいんだがだめか？」

優子「そうゆう事ね、どうせBクラス代表があの本根だからでしょ。最近Cクラス代表と付き合ってるって噂を聞くもの」

白夜「ああそうだ、それでやってくれるか？」

優子「本当はやりたくないんだけど、仕方ないわね。いいわよ、その代わり条件があるけど」

嫌なそんな顔をしてはいるがどうやら条件つきでやってくれるようだ。

白夜「条件はあれか」

優子「ええ、次のデートで全額白夜のおごりならやってあげてもいいわよ」

俺以外の連中は俺に対してカッターを構えている気がするがまあいいだろう。今度のデートは俺の財布が寂しくなりそうだ。

白夜「わかった、それで連戦が防げるなら安いもんだな」

いいや安くはないじゃる白夜。

優子「決まりね。それじゃあCクラスに行きましょう」

秀吉「うむ、そうじゃな」

優子が雄二を連れて教室を出て行く。俺と明久と秀吉とも後に続く。そのまましばらく歩き、Cクラスを目の前に立ち止まる俺達。

白夜「さて、ここからは済まないが一人で頼むな、優子」

Aクラスの使者をやるなら、Fクラスの俺達が一緒にいるのはまずいため離れた場所に隠れ様子を見る事にする。

優子「白夜の頼みとはいえ気が進まないわね」

当の優子はあまり乗り気ではないようだ。

白夜「優子、お前がやってくれないとこちらの計画が狂う。お前ならうまくできるだろ？」

優子「むう……。仕方ないわね……」

白夜「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。優子なら出来るはずだ」

優子「はあ……。あまり期待しないでね……」

溜息と共に弱々しくCクラスに近づく優子。この状態でうまくやってくれるだろうか？

明久「白夜、木下さんは大丈夫なの？別の作戦を考えた方が……」

白夜「多分大丈夫だろう」

明久も優子の様子を見て心配するが俺はあくまで、大丈夫だと言いつ張る。

明久「心配だなあ……」

雄二「シッ。木下が教室に入るぞ」

優子がCクラスに入る。

優子「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！」

……あれは誰だ？……もちろん優子だ。心の中で自分に言い聞かせる俺。

小山「な、何よアンタ！」

この怒声は昨日のCクラス代表の小山だろう。いきなり豚呼ばわりされてご立腹のようだ。

優子「話しかけないで！豚臭いわ！」

自分から来ておいて豚呼ばわり、どこからつつこめばいいんだ？

小山「アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数がいいからつていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！」

こちらの思惑通り、小山は優子の手のひらで踊らされていた。

優子「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で充分だわ！」

小山「なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって

！？」

小山にとってFクラスは豚小屋同前の認識のようだ。最も俺も同じような感想だが。

優子「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、今回は特別に貴方達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。ちようど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！」

そう言い残し、優子は戻ってきた。

優子「これで良かったの？」

優子の顔はなぜかスッキリとしていた。

雄二「ああ、素晴らしい仕事だった」

小山「Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

Cクラスからは小山のヒステリックな声が聞こえる。

白夜「Cクラスの連中は災難だな。代表が感情的で短絡的なことをおっぱじめるから、

もうすぐDクラスと同じ設備になるんだ、根本も手を組む相手を間違えたようだな」

雄二「ははっ全くだな」

俺の言葉に雄二が笑い返す。優子はAクラスに戻り。俺達はあと十分後に迫った試召戦争に備えFクラスへ向かった。

あの後午前九時よりBクラス戦が再開され、明久達は昨日中断されたBクラス前に行き進軍を始めている。雄二曰く、

『敵を教室内に閉じ込めよ』とのこと。そして俺と雄二は教室で待機して待つ。

雄二「ここが正面場だな」

雄二がそう呟く。

白夜「ああ、Bクラスを攻略するには例の作戦を姫路にやってもら
うことになってるからな、それまで明久達が姫路が戦死しないよう
にフォローできるかどうかが問題だ、

いくら姫路でもBクラスの奴らに一つの科目で大勢で来られたらや
られる可能性は充分ある。

事実昨日の俺がそうだった」

俺は雄二に今回の作戦の問題点を指摘する。それに対し雄二はノー
トに現在の戦力を書きながら答える。

雄二「あの時は須川が助けに戻ったんだよな。確かに須川が行かな
ければお前はやばかったが、それは近くに見方がいない状況だった
からだ、

今回は姫路の近くに常に何人が同行させてるから昨日みたいな事に
なる危険性は低いはずだ」

確かに雄二の言うとおり、昨日みたいな状況を防ぐ為に姫路には総
指揮官を任せ、Fクラスのメンバー多数に護衛をさせている。俺が
少し安心してしていると。

いきなり教室のドアが開いた。中に入ってきたのは明久一人だった。

明久「雄二っ！白夜！」

雄二「うん？どうした明久。脱走か？チヨキでシバくぞ」

白夜「明久、なんで一人で戻ってきた？」

明久「話があるんだ」

雄二「……とりあえず、聞こうか」

吉井は何時になく真剣で雄二もそれを察したのか真面目な表情で明
久の方を見る。

明久も真面目な表情で雄二に顔を向ける。

明久「根本君の着ている制服が欲しいんだ？」

雄二「……お前に何があつたんだ？」

白夜「なあ雄二。俺がコイツをチヨキでシバいていいか？」

今のは半分本気だ。

明久「ああ、いや、その。えーっと……」

雄二「まあいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいなんとかしてやる」

明久のカミングアウトとも取れる発言に対し雄二は何とか受け入れた。

雄二は明久がその手の趣味に目覚めても不思議ではないと思っているのだろうか？

明久「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

いきなり、明久がとんでもない事を言う。雄二はそれに構わず吉井に聞き返す。

雄二「理由は？」

明久「理由は言えない」

白夜「どうせ根本が姫路の書いたものを持っていたんだろう？」

明久は驚いた。

明久「どうしてわかったの白夜？」

白夜「それはいいえない」

坂本は顎に手を当てて考え込む。俺にはさっきから、明久が何をしたいのかが全く見えてこない。

根本の制服を欲しがり、姫路を戦闘から外すこの二つの要求に関連性は特に見られない……と思ったところで何かが繋がる、協定を結ぶときに見た根本の制服のポケットに入った手紙。そして、Dクラス戦のあった放課後に見つけた姫路の鞆から見えたラブレターのような手紙。俺は吉井に試しに聞いてみる。

白夜「吉井。姫路はちゃんと総指揮官として働いてるのか？」

明久「えっ！？あつ、うん……もちろんだよ」

一瞬だけうろたえる吉井。これで確信した。姫路の鞆から見えたラブレターと思わしき手紙、あれが根元の手に渡ったんだ。

恐らく木野たちがFクラスのシャープペンや消しゴムを壊してる最中に見つけてそれを根元に見せた、

そして根元は姫路の弱みを握り脅迫のネタにしていることを。

白夜「雄二。俺からも頼めないか？」

雄二「白夜？」

明久「えっ？白夜？」

俺まで雄二に頼みだした事に二人は驚き声を出す。雄二は俺と明久の顔を交互に見たあと。口を開いた。

雄二「……条件がある」

明久「条件？」

雄二「姫路が担うはずだった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させる」

雄二は明久の無茶な願いを聞き入れた。

明久「もちろんやってみせる！絶対に成功させる！」

雄二「良い返事だ」

白夜「悪いな雄二、それで明久に何をさせる気だ？」

雄二「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

明久「皆のフォローは？」

雄二「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

明久「……難しい事を言ってくれるね」

白夜「もし、失敗したらどうするんだ？」

雄二「失敗するな。必ず成功させる」

強い口調の雄二。失敗はそのまま敗北に繋がるも同然だからだ。

雄二「それじゃ、うまくやれよ」

雄二は教室を出ようと立ち上がる。当然、俺もそれに付いていく。

明久「え？どこかに行くの？」

雄二「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな」

多分室外機の事だろう。

雄二「明久」

教室を出る直前、雄二は明久に振り向かずこう言った。

雄二「確かに点数は低いが、秀吉やムツリー二のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している」

明久「……雄二」

雄二「うまくやれ。計画に変更はない」

明久「わかった、それと白夜。さっきはありがとう」

俺達は明久の言葉を後ろから聞き教室をでていく。そこでさっきお礼を言われた事に気づく。

白夜「……そんなことよりDクラスに行くぞ」

雄二「そうだったな、白夜」

俺は雄二と共にDクラスへ向かう。

白夜「万が一、明久が失敗したらその時は俺がやるか……」

俺はその途中で独り言を呟っていた。

現在の時刻は午後二時五十七分。作戦開始まであと三分。Dクラスに指示を出した後、

俺達はBクラス教室前に集まり根本と対峙していた。

根本「お前らいい加減諦めろよな。機能から教室の出入り口に集まりやがって暑苦しいことこの上ないっての」

ドンッドンッ

木野「霧崎君たらまた来たの？そんなにあたしに甚振りたいのかなあ。」

素直にそう言ってくれればいくらでも苛めてあげるのに恥ずかしがり屋さんだねえ」

根本と木野が俺達を挑発するように嘲笑う。

雄二「どうした？軟弱なBクラス代表サマと腰巾着さんはそろそろギブアップか？」

雄二は挑発に乗ることなく言い返す。姫路が戦線から外れた為、本隊も総動員することになったのだ。

雄二「はア？ギブアップするのはそっちだろ？」

白夜「無用な心配だな」

根本「そうか？頼みの綱の姫路も調子が悪そうだぜ？」

白夜「……お前らじゃ役不足だからな。俺が代わりに遊んでやることになった」

木野「言ってくれるねえ……もうすぐあたしの玩具になる子が」

白夜「そういうあんたこそ、もうすぐウチのクラスのハイエナ共の見せ物になるってのに随分と能天気なもんだな」

ドンツドンツ

根本「さっきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

雄二「さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

根本「けっ。言ってるどうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

木野「あはは！皆あたしの玩具にしてあげるよ。特に霧崎君には一番最初にあそんでもらうからね！」

雄二「……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

雄二の指示に従い本隊が一斉に後退する。

根本「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

白夜「あとは任せたぞ、明久」

木野率いる敵の本隊を引き付け、雄二は壁の向こうにいる人物。明久によく通る声で告げる。時間はジャスト午後三時。作戦開始だ。

ドゴオツ

Bクラスから少し離れた途端、豪快な音が響き渡る。明久がBクラスの壁を破壊したんだ。

木野「ッ！何今の！？」

木野の表情が変わる。

白夜「これでBクラスへの道は繋がった。態々俺を追って手下を引き連れながら根本の元から離れてくれるなんて、そんなに俺に遊ばれたいみたいだな」

俺の言葉に木野が叫ぶ。

木野「くっ、いい気にならないでよ！まだ教室には近衛部隊が残ってるはず、

それにいくらなんでもこの人数を同時に相手に勝てるわけがない」

白夜「まあ数学の時だったらお前の言うとおりだったかも知れないがな、今ここにいるのは、英語Wの山田先生だ。

白夜見せてやれよ、あのサディスト気取りの女に甚振られる姿の方がお似合いだつてな」

白夜「ああ」

木野「さつきから何を…」

「Fクラス 霧崎白夜 英語W 600点

VS

Bクラス 木野紀子 英語W 190点

Bクラス 林宗一 英語W 154点

Bクラス 真田由香 英語W 167点

Bクラス 加西真一 英語W 160点

Bクラス 糸田小百合 英語W 158点

Bクラス 三村貴子 英語W 162点」

木野とほかBクラスの面々「600点！」

木野達が一斉に声を上げる。

白夜「英語Wが一番得意なもんでね」

俺の召喚獣は腕輪の能力を発動する。両手の剣を同時に振ると巨大なかまいたちが発生し敵の召喚獣を一体も残さずに切り刻む。

これが俺の召喚獣の腕輪の能力『風の刃』^{カゼノヤイバ}。自分の負けを悟った木

野はその場に座り込む。

白夜「勝負ありだな」

俺は木野に近寄り、上から見下ろす。

木野「よくも……よくもこのあたしを見下したわねっ！」

瞬間、木野が懷に隠し持っていた、小型のナイフを振りかざす。俺はそれを素早くかわす。

山田「木野さん！やめなさい」

雄二「白夜！あぶねえ！」

山田教諭と雄二の声が響くが俺は焦ることなく、妖刀ムラマサの柄頭で木野の後頭部に叩きつける。その一撃で木野は気を失った。

山田「霧崎君。怪我はないですか？」

山田教諭が駆け寄ってくる。

白夜「見ての通り無傷です」

山田「そうですか、しかし、今のは流石に過剰防衛ではないですか？」

白夜「あのまま、ナイフを振り回されてたら他の奴まで怪我したかもしれないんだ、俺にはアレ以外の方法なんてない。

一応責任もって、こいつは保健室に連れてくんでそれで大目に見てくれませんか？」

山田「……まああの状況では咄嗟に手が出してしまうのも仕方がないかもしれないですね。ではここは君に任せて私は失礼します、木野さんの事を学園長に報告する必要がありますので」

そういつて、山田教諭は去っていった。入れ替わるように雄二が話しかけてくる。

雄二「それで、白夜。こいつどうする気だ。当然素直に保健室に連れてくわけじゃないよな？」

白夜「いや、後でちゃんと保健室に連れてくようにする。後でな」

俺は本隊のメンバーに木野を任せて雄二と共にBクラスに駆け出す。本隊のメンバーは大喜びで引き受けてくれた。

そして俺達がBクラスで見た光景は。

「Fクラス	土屋康太	保健体育	441点
VS			
Bクラス	根本恭二	保健体育	203点」

土屋が保健体育で根本を打ち取る姿だった。今ここに、Bクラス戦は終結した。

B クラス戦、そのあと……（前書き）

問題（保健体育） 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

ずいぶん急な話ですね。

斉藤白夜の答え

『初めての体験』

教師のコメント

い、いったいなにをいってるんですか！

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その

訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント
詳しくすぎです。

Bクラス戦、そのあと……

秀吉「明久、随分と思い切った行動にでたのう」

白夜「結果オーライだからいいんじゃないか」

戦後、Bクラスにやってきた秀吉は明久にそんな事を言い。俺が代わりに秀吉に答える。

明久「うう……。痛いよう、痛いよう……」

白夜「素手でコンクリートの壁壊したんだからな、痛みが100%跳ね返るわけじゃないがそりや痛えだろう」

秀吉「なんともお主らしい作戦じゃったな」

明久「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

秀吉「後のことを何も考えず、自分の立場を追いつめる、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

明久「……遠まわしに馬鹿って言ってない？」

白夜「いや、割とわかりやすく馬鹿って言うてると思うぞ」

明久「あんまりだっ！」

秀吉「白夜よ。あまり明久を泣かせるようなことを言うでない」

白夜「先に言ったのは秀吉だからな。とりあえず。これで明久の放課後は職員室行き決定だな」

秀吉「ご愁傷様じゃのう……」

雄二「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩を叩く。それについては俺も同意だ。

雄二「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組み代表？」

根本「……」

床に座り込み黙り込んでいる根本。

雄二「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、周囲の連中が騒ぎ出す。

白夜「落ち着け、お前ら。最初に雄二が言っただろう。俺達の目標はAクラスだ。Bクラスを手に入れる必要なんてないだろう」

俺の言葉に雄二が続く。

雄二「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」

その言葉でFクラスの連中は納得したような表情になる。Dクラス戦のときにも言った事だし、雄二の性格をやっと理解してきたのだろう。

根本「……条件は何だ」

根本が力なく問う。

雄二「条件？それはお前だよ、負け組み代表さん」

根本「俺、だと？」

雄二「ああ。お前には散々好き勝手やつてもらったし、正直去年から目障りだったんだよな、それに今回はいろいろとしてくれたみたいだな」

雄二は根本の痛いところをつくが、周りの人間は誰もフォローしない。本人もわかってるみたいだ。それとBクラス男子の一部が震えているようだ。まあ監視カメラなどの映像で証拠はばっちりだけだな。

雄二「そこで、Bクラスのお前らに特別チャンスだ。Aクラスに言っつて、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられにからな。あくまでも戦争の意思と準備があるだけで伝えるんだ」

根本「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけのはずだったが。

雄二「ああ。Bクラス代表がコレを着ていったとおりにしたら見逃そう」

そう言い。雄二が取り出したのは、朝、秀吉に着せようとしていた制服。これは明久が制服を手に入れるための手段だが恐らく雄二の

個人的感情も含まれてるだろう。

根本「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを…

…！」

根本が慌てふためく。

Bクラス男子「Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！」

Bクラス女子「任せて、必ずやらせるから！」

Bクラス男子「それだけで教室を守るなら、やらない手ないな！」

…… Bクラス生徒達の裏切り。まあこうなるんじゃないかと思って
いたぜ。

雄二「んじゃ、決定だな」

根本「くっ！よ、寄るな！変態ぐふうっ！」

Bクラス男子A「とりあえず黙らせました」

雄二「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石
の雄二も驚いてるようだ。

雄二「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」

明久「了解っ」

明久が倒れている根本に近づき、制服を脱がせる。その表情は当然、
気持ち良さそうな顔ではない。

根本「う、うう……」

うめき声をあげる根本。

白夜「明久、そこどけや」

明久「わかったよ」

白夜「ほらよっ！」

根本「がふっ！」

そこに俺の追加攻撃。その後男子の制服を剥ぎ、女子の制服をあて
がうが、やり方がわからないようだ。

Bクラス女子「私がやてあげるよ」

Bクラスの女子がそう提案する。

明久「そう？悪いね。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」

Bクラス女子「それは無理。土台が腐ってるから」

白夜「大丈夫だ、そこはこれのとおりによれば可愛くなるはずだ」
おれはあらかじめ書いておいた根本をかわいくする方法をそ変わりにあてがってくれるという女子に渡した。

Bクラス女子「これならなんとかかなりそうね」

明久「じゃ、よろしく」

明久はそう言い。根本の制服を持ってその場を離れた。姫路の手紙を回収するためだろう。こっちはこっちで根本の着替えを始める。ちなみに、木野の方はFクラスの本隊のメンバーに木野を縛る為に用意した拘束具を貸しそれで木野を拘束し本隊メンバーの見せ物にしてある。（撮影あり）終了しだい保健室に連れて行くように指示を出してある。これで山本教諭との約束も守ったことになる。そして根本も。

Bクラス男子「いいからキリキリ歩け」

根本「さ、坂本め！よくも俺にこんなことを」

Bクラス男子「無駄口を叩くな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」

根本「き、聞いてないぞ！」

Bクラス男子「ああさつき決まったことだからな」

いつの間にか撮影会までスケジュールに入っていた。これからの出来事は根本には一生忘れられないトラウマになるに違いない。

白夜「まあ、そんなことで、Bクラス戦もなんとか勝利したわけだ」
帰宅後、俺は試召戦争の結果を優子に話した。

優子「また勝ったの？さすが白夜じゃない」

白夜「いや今回は2年のバカ代表のおかげもあるな」

明久のおかげというと優子が首をかしげた。

優子「どうして吉井君のおかげなの？」

白夜「それはだなあのバカが壁を破壊してまで奇襲を仕掛けたからさ」

秀吉「じゃが明久はまた西村教諭に呼び出されて補習じゃろうな」

優子「はあ、吉井君も懲りないわね。まただなんて」

白夜「まあ、明久はそのうち退学だろうけどな」

秀吉「白夜よ、冗談に聞こえないのじゃ」

失敬ななぜ俺が冗談をいうわけないじゃないか。

優子「秀吉、白夜は本気で言ってるわよ」

秀吉「な、なんじゃと！」

白夜「むしろ今まで停学や退学がないのが不思議なくらいだ」

優子&秀吉「否定できないのじゃ（わ）」「」

黒羽「いっそBクラス男子全員退学になればいいんです」

白夜「まあそれもそうだな。秀吉、今日は黒羽のこと頼んだ」

秀吉「どうゆうことじゃ、白夜」

黒羽「秀吉様、私は今回心に深い傷を負いました。ですので秀吉様に癒してほしいんです」

白夜「そういうこと、ほんじゃよろしくな」

優子「心配しなくてもいいわよ、秀吉。このことは白夜のお婆様も認めているようだし」

秀吉「どういうことじゃ？」

白夜「今夜にでもゆっくり黒羽にでも聞くといい」

黒羽「それでは秀吉様行きましょうか」

こうして、のんびりじゃべりながら一日が終わるのであった。

Bクラス戦、そのあと……（後書き）

うーんどうも思うように作れないな。

Aクラス戦だよ。試験召還獣戦争最終戦（前書き）

問題（生物） 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希と霧崎黒羽の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

霧崎白夜の答え

？優子？炭水化物？たんぱく質？ビタミン？ミネラル』

教師のコメント

？以外はすべて正解ですが

それで生きていけるのはあなただけです。

それと木下さんとは健全なお付き合いのようで教師一同応援していますよ。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

霧島翔子〓翔子

工藤愛子〓工藤

佐藤美穂〓佐藤

久保利光〓久保

Aクラス戦だよ。試験召還戦戦争最終戦

Bクラス戦が終結してから二日後、俺達は点数補給のテストを終えた日の朝。残すAクラス戦についての説明会を受けていた。

雄二「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、

他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

壇上の雄二が珍しく素直に礼を言う。

明久「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

白夜「確かに明久のいうとおりだぞ。本当にどうしたんだ雄二？」

雄二「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

その様子から察するにこれが雄二の本音で間違いないようだ。

雄二「ここまで来た以上、絶対Aクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

別に俺はAクラスの設備が手に入るならそれでいいが、クラス内ではそんな雄二の言葉に賛同する声が沸きあがる。

雄二「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

俺を初めとした先日の昼食時にいたメンバーは既に聞いた話だったので驚かなかつたはそれ以外の連中はかなり驚いており、教室中にざわめきが広がった。

雄二「そして、やるのは、当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子とFクラス代表の坂本雄二。クラス間の戦争を代理で行うのだから、

代表同士の一騎打ちは当然だ。しかし、雄二がどうやって勝つのが問題だ。相手は学園主席の霧島翔子だ

俺は奴と昔に同じクラスになった事が、その学力は俺や姫路でも、

明らかな差をつけられている。俺がそんな事を考えていると。

明久「馬鹿の雄二が勝てるわけがなあっ!？」

雄二「うおっ!？」

余計な事を口にした明久の頬カッターがかすめる。しかも明久の前の席に座る俺のすぐ近くも横切る。

雄二は友達を本気で殺すつもりなのか？

雄二「次は耳だ」

明久は友達とわれてないらしい。というか、新学期初日といいやつぱり明久の席の近くはロクな事がない。

Aクラスの設備を手に入れたら明久から離れた席に座ろう、というかFクラスは自由席なんだから別に今いる席に座る必要もなかったが。

雄二「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

さつきカッターを投げた男はあっさりと認めた。

雄二「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

だが、俺達は現在二連勝だ。

雄二「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を皆に見せてやる」

白夜「中学時代勉強せずに暴れて悪鬼羅刹になったやつがよくゆうよ」

雄二「ぐっ!だが絶対に勝ってみせる!」

図星のわりに大した自身ですなこのゴリラ(雄二)は。

FFF団「おおーっ!」

全員の意味を確認するまでもなく雄二を信じているようだった。

雄二「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

秀吉「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ」

白夜「霧島は日本史もかなりできるし、雄二が得意って訳でもないよな？一体日本史でどうやる気だ？」

雄二「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負だ」

白夜「なるほど、その条件だと、満点が前提になって、ミスした方が負けになるから注意力勝負になるな。」

確かに召喚獣勝負よりかは勝ち目はあるが……」

明久「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？そうしたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

秀吉「確かに明久の言うとおりじゃ」

俺が言おうとした事を明久が先に言い、秀吉がそれを肯定する。

雄二「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまですぐに頼り切ったやり方を作戦などというものか」

明久「？？それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるのか？」

雄二「いいや。アイツなら集中してなくても、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろう」

それもそうだ。

秀吉「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろネタを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの間中も木下の言葉に頷く。俺も色々考えて見るが、雄二が何を考えているのか見当がつかない。

雄二「俺がこのやり方を選んだ理由は一つ。ある理由が出れば、アイツは必ず間違えると知っているからだ」
ある問題？

雄二「その問題は『大化の改新』」

小学生で習う中大兄皇子が645年に発布した政治的改革だ。

雄二「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明久が雄二に問う。

雄二「そんな掘り下げた問題じゃない。もつと単純な問いだ」

秀吉「単純というところ何年に起きた、とかかのう？」

雄二「おっビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

そんな基礎的な問題を、霧島が間違えるのか？そもそも何で雄二はそんな事を知っている？というか、

雄二はさつきから霧島を親しい奴みたいな呼び方をしている。別にそれは問題ではないが。

雄二「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

白夜「そりゃ小学生レベルの歴史問題でも簡単な方だからな明久だつてこれくらいでき……」

そう言いながら後ろの明久の方を振り向くと何故か俺から顔を逸らす。見なかったことにしよう。

雄二「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ」

姫路「あの、坂本君」

雄二「ん？なんだ姫路」

姫路「霧島さんとはその……仲が良いんですか」

俺も思っていた事を姫路が聞く。

雄二「ああ。アイツとは幼馴染だ」

明久「総員、狙ええ！」

明久が雄二に牙を向いた！？

雄二「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

明久「黙れ男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

雄二「俺が一体何をしたと！？」

雄二の言葉に耳を傾ける事無く明久は雄二に殺意を向ける。

明久「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ」

須川「了解です隊長」

白夜「お前らうるさいぞ、鉄人こと西村教諭の根城に放り込むぞ！」
FFF団「……すいませんでした！」「……」

俺があまりにもうるさいためそういつたらクラスのやつらは謝った後、静かになった。

姫路「あの、吉井君」

明久「ん？姫路さん。何？」

姫路「吉井君が霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりゃ、まあ、美人だし……」

姫路「……」

ん？島田はともかく姫路からも殺気が漂うぞ。気のせいか姫路ってこんなキャラじゃないはずだよな？

明久「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

これはかなりヤバイ。このままではAクラスと戦う前にFクラス内で内戦が勃発し同士討ちをおっぱじめる事になる。

（死ぬのは主に明久と雄二だが）

白夜「おまえら全員のほうが良かったか？」

秀吉「白夜の言うとおりじゃ、姫路や島田もほかのやつもじゃが一旦座るのじゃ」

殺気を出しながら俺がクラス全員に注意すると秀吉も他の連中を宥めてくれる。

明久「む。白夜と秀吉は雄二が憎くないの？」

白夜「俺は他人色恋沙汰なんかに興味はないからな」

秀吉「それに冷静になって考えて見るがよい。相手はあの霧島じゃぞ？男である雄二に興味があるとはおもえんじやろうが」

秀吉がそう言った瞬間に全員の視線が姫路に集まる。

姫路「な、なんですか？もしかして私、何かしました？」

いや、姫路は特に何もしてない。ただ、霧島は去年から男には興味

がない同性愛者で今は姫路を狙っているという噂が流れているだけだ。所詮ただの噂に過ぎないが。

白夜「いや秀吉、他の皆も聞いてくれ。霧島が同性愛者というのは嘘だ。霧島が好きなのは確かに雄二だ！だがしかしなぜか雄二のやつはそれを拒んでいる。だから提案だ！このまま雄二に不幸を与えたいならAクラスに負けた場合、罰として雄二を霧島に引き渡すのはどうだ？」

明久「でもそれだと雄二が不幸と思うけど他からすればうらやましいよね？」

白夜「確かにそうだが霧島は雄二に対してはどんな手段も選ばない。つまりスタンガンなどで痛めつけるという行動も取れるわけだ。他のやつもそれでどうだ！」

俺がそういうとFクラスの雄二以外の男子は全員口をニヤつかせてこういった。

FFF団「『『『『『『異議なし！』』』』』」

雄二「なんでだよ！まあいい。とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えてたんだ。

アイツは一度覚えた事は忘れないほど頭が良い、でも今回はそれが仇になる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

雄二「システムデスクだ！」

優子「一騎討ち」

雄二「ああ？Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、秀

吉、土屋と首脳陣を揃えてAクラスに来ていた。

明久「ねえ、白夜」

白夜「何だ？明久」

明久がいきなり声をかけてくる。

明久「毎回こうしてたら僕の制服は繕いだらけにならなかったんじや……」

白夜「確かにそうだよな」

今頃気づいたのか？と心の中でツツコンでおく。

優子「一体何が狙いなのか？」

雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉の双子の姉で俺の許嫁の木下優子。

雄二「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子が警戒するのも当然だ。下位クラスの俺達が一騎討ちで学園トップの霧島に挑む事時代不自然なのだし何か裏あると思っっているだろう。

優子「Fクラスとの面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけど、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないわ」

雄二「賢明だな」

ここまでは予想通り。ここからが本番となる。

雄二「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

優子「時間は取られたけど、それだけよ？何の問題もなし」

優子の挑発に乗り、昨日Aクラスを攻めたCクラス。決着は半日でつき、Cクラスの設備はDクラスと同じになった。

雄二「Bクラスとやりあう気はあるか？」

優子「Bクラスって……昨日来てたあの……」

雄二「ああ。アレが代表がやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだ、さてさて。どうなることやら」

優子「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

これは試召戦争のルールの一つ。戦争に負けたクラスは三ヶ月の間、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ。

雄二「知ってるだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』という形になってることを。規約にはなんの問題もない。……そしてDクラスもだ」

優子「……それは脅迫かしら？」

雄二「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

明久「今の雄二ってなんか根本君みたいだね……」

白夜「ああ。この交渉の仕方、悪役みてーだな」

俺と明久は聞こえない程度の声で話す。

優子「まあいいわ。何を企んでるか知らないけど、代表がFクラスのバカに負けるなんてありえないし、その提案受けてあげるわ」

白夜「え？本当いいのか？」

先ほどまで会話に参加していなかった俺が声をあげる。

優子「だって白夜、私はあんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌なのよ」

白夜「まあ確かにそうだな」

昨日。根本は女子の制服を着て話をしにきたんだ。そのおかげで提案があつさり通るとは。イレギュラーな収穫だ。

優子「でも、こちらから提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で先に三勝した方の勝ち、この提案なら受けていいわ」

やはり警戒心は緩んでいない。

雄二「なるほど。姫路や白夜が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

優子「多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんや白夜が絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないからね」
「どうやら、俺と姫路は軽く見られてるようだ。最も霧島の実力はそれ程までに高いのだが。」

雄二「安心してくれ。うちからは俺が出る」

優子「無理よ。その言葉を鵜呑みにはできないわ、これは競争じゃなくて戦争だもの」

優位「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

雄二はその条件をあつさり呑む。そのルールで勝つ見込みがあるのだろうか。

優子「あら、話がわかるじゃない」

やばい、なぜか今の優子の顔が笑ったときに顔がニヤけてしまった。なんとか他のやつにはバレなかったが。

雄二「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

やはり、そういう交渉で来るか。科目選択権は俺達にとって重要だが、一騎討ちの上に科目も選ばせるなんて話は流石に虫が良すぎる。

優子「……」

黙り込んで悩む優子。クラスを代表して交渉してる立場ゆえか、安易な判断が出来ないのは当然だ。

翔子「……受けてもいい」

明久「うわっ！」

明久が情けない声を出す。

翔子「……雄二の提案を受けてもいい」

いきなり現れた静かな声をだした人物。Aクラス代表の霧島翔子だ。

優子「代表……いいの？」

翔子「その代わり、条件がある」

明久「条件？」

翔子「……うん」

霧島は頷いて雄二を見た後に姫路をゆっくりと観察した。再度雄二に顔を向けて言い放つ。

翔子「……負けたほうは何でも一つ言う事を聞く」

……これは、やっぱりそういうことが。

ム「……（カチャカチャ）」

明久「ムツツリー二、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！まさかこれも計算の内なんじゃ、流石は学年代表だ。恐ろしい」

白夜「お前ら馬鹿だろ。人の話を聞いてたか？」

ム「…これは告白シーンの撮影のため」

こいつ等には何も期待しないことにしよう。

優子「なら、こうしましょう。勝負内容は五つの内お互い二つずつ決める。最初の一戦だけはランダムで決める」

優子の妥協案が得られた。

となりでは明久と姫路が小声で何か話してるがあまりたいした内容ではなさそうなので気にしない。

雄二「交渉成立だな」

明久「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか」

白夜「明久。何を想像してるか知らんが少し落ち着け、さっき言っただけを聞いてなかったのか？」

俺は明久を宥める。

雄二「心配すんな。姫路は関係ない」

自信満々の台詞。それだけ自身があるということか。

翔子「……勝負はいつ？」

雄二「そうだな。十時からでもいいか？」

翔子「……わかった」

雄二「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

白夜「そうだな。他の奴らにも報告するか」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする。あとは十時まで待つだけだ。

高橋「では、両者共準備は良いですか？」

立会人を務めるのはAクラスの担任で学年主任の高橋教諭。通称、

、高橋女史、。

雄二「ああ」

翔子「……問題ない」

一騎討ちの会場はAクラス。俺達にとっちゃアウェーだ。

高橋「それでは一人目の方、どうぞ」

優子「どうせ結果は見えてるもの。さっさと片付けるわよ」

相手は優子。交渉の時といい今といい。Fクラスを見下してる節がある。

雄二「白夜。頼めるか？」

白夜「ああ、もちろんだ」

雄二の指示でFクラスの一番手は俺に決まる。科目はランダムで数学に決まる。

優子「覚悟はいいかしら白夜？」

白夜「優子こそ、今の内に負けてクラスの連中に謝る準備しといたらどうだ？」

優子「Fクラスに行った癖に言ってくれるわね！」

俺の挑発で眉間にしわを寄せる優子。

優子&白夜「サモン！！」

「Fクラス 霧崎白夜 数学 700点

VS

Aクラス 木下優子 数学 689点」

点数差はほぼ互角だった。これでは結果は見えない。

優子「一気に終わらせてあげるわ！」

白夜「点数が負けてる癖して余裕だな優子」

優子の召喚獣はランスを向けて突進する。俺の召喚獣も優子の召喚獣に立ち向かう。

優子「このっ！」

敵のランスが俺の召喚獣に突きを放つが僅かに狙いが逸れていた。

その隙を突いてハンドガンで撃つ。が僅かに逸れてしまった。

白夜「しくったか!？」

優子「もらったわね!」

ランスによる打撃を食らってしまう。が、敵が更に距離を詰めてくれたおかげでこっちの攻撃も当たる。ツインブレードで連続攻撃を放つ。

優子「くっ!」

白夜「これでまた俺のほうが上だな」

お互いに一撃くらい、召喚獣の体力が弱っている。次の一撃が決め手となる。敵の召喚獣が軽くジャンプしてランスを振り落とす。俺の召喚獣はツインブレードで突きつける。……結果は……俺の勝ちだ。

「勝ち、Fクラス 霧崎白夜 数学 56点

VS

負け、Aクラス 木下優子 数学 0点」

高橋「勝者Fクラス!」

高橋「0対1ですか」

高橋女史がパソコンに打ち込んでいた。ちょっと落ち込んでる様子だった

優子「このわたしがFクラスにいった白夜なんか……」

優子はFクラスに行った俺に負けたのが悔しいのか歯を食いしばる。俺は優子に背を向け仲間の元に戻る。

白夜「なんとか勝ったぞ、雄二」

雄二「ああ。お前は辛いだろうが良く勝ってくれた」

姫路「霧崎君。お疲れ様です」

秀吉「そうじゃよ白夜。姉上相手に勝つなんて大したもんじゃ。まあ白夜じゃろうから勝つとは思ったがの」

明久達はそう言って出迎えてくれる。

白夜「ああ、まったく。優子のやつまた強くなってやがった」

高橋「では、次の方どうぞ」

高橋女史の指示で二回戦が始まる。

佐藤「Aクラスの佐藤美穂です。科目は物理でお願いします」

Fクラスから出るのは――

雄二「よし、頼んだぞ明久」

明久「え！？僕！？」

雄二が明久を推薦した。相手が科目を選択したと言う事はほぼ間違いない得意科目だ。恐らく雄二はこの勝負を諦め残りの三試合で逆転勝ちを狙うつもりのようなのだ。

雄二「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

負けるほうにだろ……

明久「ふう……やれやれ、僕に本気を出させてこと？」

雄二「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場に全員に、お前の本気を見せてやれ」

モブ「おい、吉井って実は凄いのか？」

モブ「いや、そんな話は聞いたことないが」

モブ「いつものジョークだろ？」

味方であるFクラスからの声。ジョークじゃなくて雄二に一方的に騙されてるだけだ。

佐藤「吉井君でしたか？あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤が明久を見て戦く。勝ったも同然なんだから何も警戒する必要なんてない。

明久「あれ、気づいた？ご名答。今までの僕はぜんぜん本気を出しちゃいない」

佐藤「それじゃ、あなたは……！」

明久「そうさ。君の想像通りだよ今まで隠してたけど、実は僕は……左利きなんだ」
ば、ばかだ。

「Fクラス 吉井明久 物理 62点

VS

Aクラス 佐藤美穂 物理 389点」

これで1対1になった。

美波「このバカ！テストの点数に利き腕は関係にでしようが！」

明久「み、美波！フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

二人のやり取りを無視し雄二が口を開く。

雄二「勝負はここからだ」

明久「ちよつと雄二！アンタ僕をぜんぜん信頼してなかったでしよう！」

雄二「信頼？何ソレ？食えんの？」

明久「貴様に本気の左を食らわせたい！白夜。お願いだよ美波を止めて」

俺に助けを求める明久、正直関わりたくないが、仕方なく手を貸すことにする。

美波「島田……このバットを使え」

島田に。

明久「ちよつと！白夜待つてよ！ここに来てどういう風の吹き回し！君は僕の味方じゃなかったの？」

明久が何か騒いでるが正直どうでもいい。

高橋「では、三人目の方どうぞ」

ム「……………（スック）」

土屋が立ち上がる。ここで科目選択権が活きてくる。土屋がほとんどの科目において明久以下の点数だが保健体育のみAクラスの基準を遥かに驚愕する。

俺とは全く正反対の学力だ。

工藤「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートにした女子が現れた。見た感じ少し男っぽくも見えるが。あまりみた事がない。

工藤「一年の終盤に転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

高橋「教科は何にしますか？」

ム「……保健体育」

高橋女史の質問に対し迷わず答える土屋。

工藤「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤が土屋に絡んでくる。余裕の態度で。

工藤「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……君と違って、実技でね」

……保健体育の実技が得意？それはつまりスポーツが得意と言う意味かきつとそうだ。というかそっちの意味であって欲しいと言うのが本音だ

。俺の後ろでは明久がバレバレなぐらいドキドキしているようだった。

工藤「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

明久「フツ。望むところー」

美波「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育なんて要らないのよ！」

姫路「そうです！永遠に必要ありません！」

明久「……」

白夜「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが俺は思わずそう呟いた。

工藤「じゃあ、そっちの霧崎君だっけ？」

今度は工藤が俺に話を振ってきた。

工藤「キミって成績かなりいいのに保健体育は苦手だっけ聞いたよ。保健体育教えてあげようか？実技でね」

俺は工藤のペースに飲まれまいと言い返す。

白夜「保健体育の実技ね。もし本当にあっちの方なら優子に頼んだ

ら良いかもな。悪いがあんたに教わるまでも無い」
これでどうだ。

工藤「霧崎君キミは噂道理で優子にゾッコンラブなんだね？」
何故か俺に近寄ってくる工藤。

白夜「まあな、他の女に興味を示さないだけだ」

工藤「ちえ、つまんないの」

高橋「そろそろ召喚してください」

高橋女史の指示でようやく三回戦が始まる。土屋は小太刀の二刀流。
工藤のは。

明久「なんだあの巨大な斧は」

明久が驚きの声を上げる。オマケに例の腕輪も装備している。

工藤「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤が笑いかけると同時に腕輪が光り召喚獣が動く、かなりのスピードで。大斧に雷光をまとい土屋の召喚獣に襲い掛かる。

工藤「それじゃ、バイバイ。ムツッリーニくん」

ム「……加速」

土屋がそう呟いた時、土屋の腕輪が輝き、召喚獣がブレた。

工藤「……え？」

戸惑う工藤。土屋の召喚獣は敵に射程外にいた。

ム「……加速、終了」

土屋がもう一度呟く。次の瞬間、工藤の召喚獣が全身から血を噴出して倒れた。

「Fクラス 土屋康太 保健体育 572点

VS

Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点」

表示された点数は俺の保健体育の十倍程の高さだった。工藤も驚異的な高さだが土屋はそれすら大きく越えていた。
雄二「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

驚く俺と明久に雄二が説明する。他の科目では俺が勝っているのに
なぜが負けた気分だ。

工藤「そ、そんな……！この、ボクが……！」

工藤がショックで床に膝をつく。

高橋「これで1対2ですね。次の方は？」

高橋女史はそれに構う事無く作業を進める。

順番してはA対Fである

姫路「あ、は、はいっ。私です」

こちらからは瑞希が出る。

久保「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは久保利光。

雄二「やはり来たか、学年次席」

雄二の言うとおり、奴は姫路に次ぐ学年三位の実力者で姫路が振り
分け試験を途中退席したため、学年次席の地位になっている。ちな
みに最近明久に危険な意味で興味を抱いてるとの噂である。

雄二「ここが一番の心配どころだ」

雄二の心配には理由がある。久保と姫路の実力はほぼ互角。総合点
数ではせいぜい20点程の違いでしかなく。科目次第では負ける可
能性が否定できない。

高橋「科目はどうしますか？」

久保「総合科目でお願いします」

高橋女史が二人に尋ねるとすぐに久保が答えた。

明久「ちよつと待った！何を勝手にー」

姫路「構いません」

明久「姫路さん？」

明久の抗議の声を姫路が遮る。

高橋「それでは……」

「Fクラス 姫路瑞希 総合科目 3997点

VS

Aクラス 久保利光 総合科目 4409点

勝ったのは久保だった。点数差は400点以上。至る所から驚きの声があがる。

姫路「やはり最近勉強が減ってきたせいでしょうか」

久保「そんなことないと思うし。むしろ姫路さんがFクラスなのが問題なんだと思う」

久保の声にAクラスは全員頷く。まあ俺もそうおもうけどな、主に体調的に。

高橋「これで二対二です」

高橋女史はこの展開。

高橋「最後の一人、どうぞ」

翔子「…はい」

Aクラス最強で最後の敵、霧島翔子。そしてFクラスからは当然。

雄二「俺の出番だな」

我等が代表が出る。

高橋「教科は何にしますか？」

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点方式だ」

雄二の宣言でAクラスがさわぎだす。

高橋「わかりました。そうなると問題を用意する必要があるのです。このままでお待ちください。」

高橋女史は教室を出て行く。俺と明久は雄二に近づく。

明久「雄二、あとは任せたよ」

白夜「雄二、期待して待つてゐるからな」

雄二「ああ、任された」

俺達は互いの手を握る。

ム「……………（ピッ）」

土屋が歩み寄り雄二にピースサインを向ける。

雄二「お前の力には随分助けられた、感謝する」

ム「……………（フツ）」

土屋は口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻る。

姫路「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

雄二「ああ。明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ」

どうやら雄二は姫路に試召戦争を始めた理由を話したようだ

姫路「はいっ」

高橋「では、最後の勝負、日本史を行います。霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

翔子「……………はい」

霧島が短い返事をし教室を出て行く。

雄二「じゃ、行ってくるか」

それに雄二も続く。

高橋「皆さんはここでモニターを見て下さい」

高橋女史が機械を操作すると壁にディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された。

教師「では、問題を配ります。制限時間は五十分。100点満点です。では始めてください」

二人の手によって問題用紙が表にされる。勝敗あの問題が出るにかかっている。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

小学生レベルとだけあって簡単な問題が出題される。

（ ）年 鎌倉幕府

（ ）年 大化の改新

明久「あ……………」

姫路「よ、吉井君っ」

白夜「うまくいったな」

明久「うん」

姫路「これで、私たち・・・」

明久「僕らの卓袱台が」

Fクラス「システムデスクに！」

Fクラスの声が揃った。そして、教室を揺るがすような歓喜の声。

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

Aクラス戦だよ。試験召還獣戦争最終戦（後書き）

原作のストーリーのようにしないけど原作のようにFクラスには悪いが負けてもらいました。

Aクラス戦、その後（前書き）

問題（歴史） 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

Aクラス戦、その後

高橋「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺達に対する高橋女史の言葉。聞くまでも無く俺たちの負けだった。

翔子「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る。

雄二「……殺せ」

勝手に死んでくれ。

明久「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

姫路「吉井君、落ち着いてください！」

姫路が後ろから明久に抱きついた。俺はひとまず落ち着いた態度で雄二に聞く。

白夜「なあ雄二。0点なら名前の書き忘れとかが考えられるが、5点てのはやっぱー」

雄二「いかにも俺の全力だ」

明久「この阿呆があーっ！」

明久が叫んだ。俺は雄二の事を本当にとんでもない切れ者だと感心してバカだなんて思わなかった。だから今から雄二への評価を改める。こいつは馬鹿だ。

美波「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

明久「それについては否定しない！」

そして明久は大馬鹿だ。

姫路「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

明久「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに！」

姫路「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路に再三説得されようやく明久も大人しくなる。

翔子「……でも、危なかった。雄二が所詮小学生の問題だと油断してなければ負けてた」

雄二「言い訳はしねえ」

図星かよ。代表が伏兵になってどうすんだよ……

翔子「……ところで、約束」

そう言えば、何でも言う事聞くと約束したな。

ム「……………！（カチャカチャカチャカチャ！）」

そして撮影を始める土屋。

雄二「わかつている。何でも言え」

潔い雄二の返事。別にかっこよくはないが。

翔子「……それじゃー」

霧島が姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す。

翔子「……雄二、私と付き合って」

俺の予想道理の要求をする。

雄二「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

翔子「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

ようするに、やっぱり噂はガセで霧島は幼馴染の雄二が好きだったんだ。姫路を見ていたのは、雄二の近くにいる異性を警戒していたわけだ。

雄二「拒否権は？」

翔子「……ない。約束だから。今からデートに行く

雄二「わかったから離せ！」

そんな雄二の言葉は聞かれなかったこととなり。

ぐいっ　つつかつつか

霧島は雄二の首根っこを掴み、教室を出て行った。

「……………」

「……………」

「……………」

あまりの出来事に誰も言葉が出ず、教室にしばしの沈黙が訪れる。完全に熱が冷めた俺はそれに構う事無く、視聴覚室を出ようとするが、扉の前には筋骨隆々の大男。生活指導の鉄人の姿があった。

西村「Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

鉄人の声に他の連中が振り向く。

白夜「なんだ西村先生。俺らになんか用ですか？」

西村「ああ。今から我がFクラスの補習について説明をしようと思っ
つてな」

……我がFクラスとはまさか！

西村「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

Fクラスのバカ共「なにいつ!？」

俺以外の男子全員が悲鳴をあげる。

西村「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまで来るとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つだ。ないがしろにしているものじゃない」

雄二がそれが原因で負けた今、何も言えない。

負け方が負け方だけに、グウの音も出なかった。

西村「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”だからな。そしてお前もだ霧崎！最近風紀委員の仕事をしてないだろ！よってお前も念入りに監視してやる」

明久「そうはいきませんよ！何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

白夜「だが断る！」

西村「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか？それ

と霧崎、だが断るじゃないだろ！」

彼らには、その気は一切なかった。
反省というのは、ポーズだけだが。

西村「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやろう」

白夜「仕方がない、頑張るか、どうせ3ヶ月何もできないんだし
明久「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

西村「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

明久&白夜「ありません！」

呆れるように言う鉄人に、2人して堂々と言い放った

白夜「話はそれだけなんですか？西村先生」

西村「なんだ霧崎？負けたばかりで担任が俺になったと言うのに随分と落ち着いてるじゃないか。」

白夜「負けは負け、騒いだとこで変わらないなら落ち着くしかないですよ、それにバカどもにはいい薬でしょうし」

西村「まあそうだな、霧崎。Aクラスの設備をまだ諦めないというなら、三カ月後に宣戦布告の禁止が解禁されるまで勉強するがいいや……お前の場合には召喚獣の操作能力を鍛えたほうがいいかも知れんな。とにかく精進することだ！」

白夜「言われるまでもありませんね」

それだけ言い残して、俺は視聴覚室を出て行こうとしたが1つ聞くことがあった。

白夜「そういえばこの後って帰っていいんですか？」

西村「ああ、明日からは補習をするが今日はもう帰っていいぞ」

そうか、じゃあ優子を誘って映画でも見に行くか。

白夜「おい優子、この後俺のおごりで映画でも見に行かねえか？」

優子「え、本当？」

さっきまで落ち込んでいたのが嘘のように優子は笑顔で聞いていた。

白夜「ああ、何ならあそこのスウィーツでも奢ってやる」

優子「約束とは別？それとも含めるのかしら」

白夜「今回の別だ！それにまた今度いくのも悪くないだろ？」

優子「ええそうね。じゃあ行きましょ」

黒羽「じゃあ私たちも行きましょうか秀吉様」

秀吉「すまぬの、部活の用事で一緒には帰れそうにないのじゃ」

黒羽「仕方ありません、一緒に行ってもいいでしょうか？」

秀吉「うむ、それでは行こうかの」

こうして終わった学校を出るのであった。余談だがあのあとFクラスAクラス問わずに男子が涙したそうナ。

Aクラス戦、その後（後書き）

次回映画編

バカと映画館とラブレター

二年F組 吉井明久のコメント

僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久、泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん・・・・・・・・

これで、いいかい・・・・・・・・？

以上

【女装が似合いそうな男子ランキングNO、1】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO、1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキングNO、1】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

*尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

二年F組霧崎白夜のコメント

えっと、なんと言ったらいかがわからんが、とりあえずありがとう以上

【彼氏にしたい男子ランキングNO、1】

【やれば出来る男子ランキングNO、1】

【漫研で発売されているBL同人誌に使用された男子キャラNO、

1

の三冠を達成した霧崎白夜さんからのコメントでした。

＊尚、BL同人誌に使用された男子キャラにノミネートされていた木下秀吉さんは使用すると、NLになるなど霧崎白夜さんと共に使用する度になりピーーなことになる為除外されました。

そして、現在霧崎白夜さんと木下秀吉さんのBL本？『ワシの婿になるのじゃ！』は好評発売中です。

何やかんやで映画館前・・・

優子「映画館なんて久しぶりね」

白夜「確かに最近来てなかったからな」

僕と優子は現在映画を見に来ている。

白夜「あつ、明久達がいるな」

優子「代表もいるわね」

すると映画館の中に明久、姫路、島田、霧島、黒こげの人？の姿があった。

白夜「そういえば彼らも映画を見に行くとかあの後FFF団に隠れて言っていたな。そうだ！せっかくだから姫路と島田とメルアドでも交換してきたらどうだ？まだ交換してなかったよな？」

優子「それもそうだったわ。あの二人とは仲良くなれたけどまだ交換してなかったわ」

白夜「とりあえず中に入ろうか？」

優子「うん」

俺と優子は映画館の中へ入り、俺は明久、優子は女子三人の元へ。

白夜「明久はどの映画見るんだ？」

明久「正直言うと僕は見ないで節約したいんだ」

塩、水、砂糖が主食だからな。

白夜「まあまあ、あの二人は明久と見たいからここに来ているんだし、一緒に見るのが普通だぞ」

明久「でも何で僕なんだろ？」

白夜「自分が好意を寄せられてるとは考えないんだ？前に姫路が言つてた気がするが…おっとこれはいわない約束だったな」

あぶね、姫路との約束破るところだった……

明久「そんなわけないよ。二人が僕に好意を寄せてるなんて、それに姫路さんがなんだって？」

まあ明久は鈍感だからな。

明久「それに比べて白夜は良いよなあ」

白夜「何が？」

明久「木下さんなんて美人とデートだなんて」

白夜「デート：異性と待ち合わせて会うこと。また、その約束。この説明を聞いて何かわからないか？」

君もデートをしているってことだよ。

明久「えっ？ てことは僕もデートをしているってこと！？」

白夜「しかも両手に花だぞ」

明久「うおお！ そうか僕は今、デートをしているのか！ なら、映画程度の出費など！」

白夜「そうだ、この程度の出費、どうということはないだろ？」

一応額を見てみると……………

一般1800円

大学・高校生1500円

小・中学生1000円

幼児（3歳） 900円

大金持ち 75890円

イチヤつくのは程々に

上の四行だけで十分だと思うんだけど？
すると女子たちが戻ってきた。

姫路「優子ちゃん、翔子ちゃん、アドレスありがとうございます。」
これからよろしくお願いしますね」

優子「お互い相談しあえるから便利よね」

優子「こちらこそありがとね二人とも」

翔子「………お互い恋はがんばろう」

白夜「仲良くなれたみたいだな」

優子「仲良くしていきたいわね」

白夜「因みに優子はどの映画が見たいんだ？」

優子「うん、どうやら瑞希たちは『世界の中心で僕の初恋』を、
代表は『地獄の黙示録：完全版』を見るみたいよ？ 私も瑞希たち
と同じにしようと思うんだけどいいかな？」

地獄の黙示録：完全版って3時間23分の長編だったような……
・

白夜「うん。じゃあそれにしようか？」

優子「ええ！」

その後、明久たちと共に映画を見た。なかなか良いシナリオだったと思う。

翌朝、昇降口・・・

何やら今日は優子が先生に呼ばれてるらしいので一人早めに登校していた。

秀吉と二人で昇降口に着いたら明久と雄二が話しているのを見つけた。

明久「昨日はどうだった？」

雄二「目が覚めたら、繋がれた牛が殺されるシーンだった」

なんでそんな映画が上映されているんだ？

雄二「隙をみて逃げたそうとしたら、また電気ショックをくらって気を失い、目が覚めたらまた牛が殺されるシーンだった」

タイミングが悪い？

白夜「本当に二回見たんだな」

秀吉「何やら随分と濃い内容を話しておるように聞こえるのう」

明久「あつ、秀吉に白夜。おはよう」

秀吉「うむ、こちらこそおはようじゃ」

白夜「おはよう」

雄二「おつす、おまえらも来たか」

白夜「さっきの会話の内容を聞く限りじゃ、俺たちは随分と幸せな時間を過ごしたんだな」

本当に、幸せな時間だったと思う。

明久「同感だよ。雄二、因みに続きは？」

雄二「また起きて、再び逃げたそうしたら、また気を失って永遠に牛が殺されるシーンで目が覚め続けるんじゃないかって強迫観念に襲われて、逃げられなくなった」

明久「つまり、永遠に映画の最初は見られないんだね」

白夜「せめてもう少し興味のある物にすれば少しは楽しめただろうに」

秀吉「トラウマにならなければ良いがのう」

僕と秀吉も上履きを取り出そうと靴箱を開けると……………

白夜「……………」

秀吉「ん？ どうしたんじゃ白夜何か入っておったのか？」

白夜「え？ ああ、これが」

ラブレターが入っていました。

秀吉「ほほう。お主は姉上がおるのになぜかもてるからのう。雄二、明久、白夜がラブレターを買ったそうじゃぞ！」

えっ？ 秀吉、今俺を売った？

ならばとりあえず迎撃態勢を……って、あれ？ いつものように襲い掛かってこないぞ？

明久「そ、そうなんだ良かったね……って僕もだ」

秀吉「なぬ！わしもじゃと！」

おかしい、いつもなら真っ先に襲い掛かってくるのに、それには秀吉も気がついたみたいだな。って秀吉もだと！波乱の幕あけか？

明久「と、とにかく早く教室行こうよ！ HR始まっちゃうよ！」

そう言って走り出す明久。隠し事下手だなあ。

Fクラス教室……

西村「工藤」

工藤「はい」

西村「久保」

久保「はい」

淡々と出席確認がされていく。

西村「近藤」

近藤「はい」

西村「斉藤」

斉藤「はい」

何も起きないから暇だなあ。何かないかなあ。

西村「坂本」

雄二「・・・・・・・・・・・・・・・・明久と白夜がラブレターを貰ったようだ」

白夜「お前なんて昨日直接霧島から告白されてたじゃねえか！」
『殺せええつ！！』

何か起きました。

明久「ゆ、雄二！いきなりなんてことを言い出すのさ！」

雄二「なぜそこで巻き込むんだ、白夜！」

白夜「まあまあ、落ち着くんだ明久、そして雄二は人生の墓場へ帰れ」

バカA「どういうことだ！？吉井がそんな物を貰うなんて」

バカB「それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探してみろ！」

バカC「ダメだ！腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！」

バカD「もつとよく探せ！」

バカF「……出てきた！未開封のパンだ！」

バカG『あつた、……誰かの書きかけの手紙だ』
バカH『お前は何を探しているんだ！？』

ラブレター一つでこの騒ぎ。まあ嫌いじゃないけどね。

西村「お前らっ！ 静かにしろ！」

——シン

さすが西村だあっさりこの場を静めるなんて。

「それでは出席確認を続けるぞ」

西村「手塚」

手塚「吉井コロス」

西村「藤堂」

「霧崎コロス」

西村「戸沢」

戸沢「坂本コロス」

明久「皆落ち着くんだ！ なぜだか返事が『吉井コロス』と『霧崎コロス』に変わっているよ！」

西村「吉井、静かにしろ！」

明久「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう！？ このままだとクラスの皆は僕らに殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」

西村「新田」

新田「吉井コロス」

西村「布田」

布田「霧崎マジ殺す」

西村「根岸」

根岸「吉井と坂本ブチ殺す」

西村先生、明久の言葉にも耳を傾けてあげな。

西村「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉強に励むように」

明久「待つて先生！ 行かないで！ 可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久必死だな。

西村「吉井、勘違いするな」

勘違い？ いったい何を勘違いするというのだろうか？

西村「お前は不細工だ」

そついうあんたはホントに教師か？

明久「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」

西村「授業は真面目に受けるように」

明久「先生待つて！ せんせーい！」

そつ言つて西村先生は出て行き、明久は姫路さんと島田さんに手紙

を見せるように脅迫されていた。とにかく雄二がまだ動いてないうち
に逃走しておくか。
窓から・・・・・・・・

FFF団『逃がすなあっ！ 追撃隊を組織しろ！』

FFF団『手紙を奪え！ 吉井と霧崎を殺せ！』

FFF団『サーチ&デス！』

明久「そこはせめてデストロイで！」

飛び降りて校舎にもたれかかってラブレターを読もうとしたらそんな
声が聞こえてきた。

明久、君に幸あれ。

さて、とりあえず読んでみるかな。

霧崎白夜さまへ

突然ですが、あなたのことが好きです。

こんな始まり方でごめんなさい。でも、これが私の本当の気持ちな
んです。

私はずっと前からあなたのことが好きでした。

ある時、私のことを助けてくれたのを覚えていますか？

もしあの時あなたに助けられていなければ今私はここにはいないで
しょう。

あなたはいつも自分のことは後回しにして人のことを先にしますよ
ね？

とても優しい方だと思いました。

何でもできるあなたに私なんかがこんな手紙を送ってしまい困らせてしまったならすみません。

でも、今はこうやって手紙でしか気持ちを伝えられません。

しかし、いつかこの気持ちを面と面を向かって伝えたいと思います。もう一度書きますがあなたのことが好きです。

・・・ふむ。初めてのタイプだな。

まあ優子ではない気もするし、優子じゃなかったらちゃんと断わらなければな。

白夜「よいしょつ、と」

Dクラス戦の時みたいに壁キックを使い、一気に屋上へ・・・・・・・・

白夜「まだ誰も来てないのか」

だがすぐに屋上に続く階段の扉が開いた。

雄二「おつ、なんだ、白夜もここに来てたのか？」

白夜「ああ。明久がどうなったか気になったからな」

雄二「まあ安心しろ。俺はお前に危害を加える気はない」

白夜「それは助かるな、まあ明久でも危害加えたら霧島に嘘を電話するけどな」

多分戦うことになったら返り討ちにするけど。

雄二「で、どうだったんだ？ ラブレターは？」

白夜「どうと言われてもな、僕は優子が好きだから送ってくれた子の気持ちには答えられないんだ」

姫路「霧崎君は本当に優子ちゃんのが好きなんですね」

白夜「ああ。まあ、その気持ちに気づいたのは中学のときだけだな」
雄二「まあ他に理由があったとしてもあまり詮索はしないがな」

俺も、そろそろ腹を決めるかな。ちょうど今週末に柚葉さんと秀俊さんが帰ってくるわけだし、秀吉と優子には話しておこう。結構前にいつかお互い気持ちが決まったときに柚葉さんたちを交えて話をしようと思ったからな。

そんなことを考えている時に扉が開いた。明久が来たらしい。

雄二「やはりここに来たか、明久」

姫路「吉井君、言うことを聞いてください」

明久「雄二に白夜、それに姫路さん……！」

明久の前に二人がラスボスのように立ち上がる。

明久「どうして僕がここに来ると？」

雄二「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前なら下見も兼ねてここに来ると思っていた」

白夜「雄二の方が一枚上手だな」

明久「くっ、白夜・・・・・・・・！ 君も僕の邪魔をするの？」

白夜「いんや、俺が手を加えるわけないだろう？」

雄二「そういうわけだから諦めるんだな明久」

明久「雄二、どうしてもそこまで僕の邪魔をするのさ！ そんなことをしても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」

雄二「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」

ほほう。だったらどうして雄二はここまでのことを？

明久「だったら、どうして・・・・・・・・？」

雄二「そう言う問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粹に・・・・・・・・」

迷いのない目で・・・・・・・・。

雄二「お前の幸せがムカつくんだよ」

言い放った。

明久「アンタは最低の友達だ！」

白夜「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねえ。本気でかかってこい。姫路。上着を持っていてくれるか？」

姫路「あ、はい」

雄二が軽くシャドーをして見せている。

あれはかなりケンカなれしているな。

明久がどのくらいの技量なのか知らないが、勝つのは厳しいだろう。

姫路「吉井君、やめておいた方が……」

明久「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから」

姫路「そうですか……。わかりました。もう止めません」

明久「……。ごめん。心配してくれたのに」

姫路「いえ……。なんだか吉井君らしいです。」

明久「僕らしい？————。つと。これ、僕のも持っていてもらえる？」

姫路「あ、はい」

あ、バカがいる。

白夜「……………明久」

明久「雄二、勝負だ！」

雄二「……………お前、バカだろう」

明久「へ？」

呆れたような雄二の声。そりゃそうだよな。戦う理由を明久は……。

姫路「あ、あの、手紙がポケットに入っているみたいなんですけど……見ちゃってもいいんですか……？」

姫路に渡してしまったのだから。

明久「だ、ダメだよッ！ 戦わないでそれを見るのは反則だよ！」

雄二「お前がバカなだけだろうが！ やれ、姫路！ その手紙を始末するんだ！」

白夜「自爆したな。諦めるんだな」

姫路「……………あれ？ こ、これってまさか…………？」

手紙を読んでいた姫路が何かに気がついたようだ。何に気がついたんだ？

姫路「……………」

さらに黙り続ける姫路さん。

明久「姫路さん」

姫路「えっ！？ あ、はい。なんですか？」

明久「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんには手紙に込められた人の気持ちを踏みにじるようなことなんてできないってこと。だから、おとなしく……」

ここぞとばかりに姫路さんに情を訴えかけようとしている明久。
以前追い掛けられたし、仕返ししてみようかな。

白夜「その手紙を細切れにするんだ」

明久「違うっ！ そうじゃない！ 僕の声で言葉をつなげるのは反則だよ！ ていうか白夜声真似できたの！？」

白夜「これぐらい普通でしょ」

姫路「はいっ！ わかりました！」

明久「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってああああっ！
そんなに丁寧到手紙を裂かなくても！ それじゃあもう絶対読めないよね！？ 返してっ！ 僕の幸せな未来と大切なラブレターと十七行前の台詞を返してえっ！」

あれ？ 他人のラブレターを勝手に破いちゃまずいんじゃない？……って
ああ、なるほど。

雄二「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。……すまん、
明久」

雄二がビリビリになった手紙をかき集めながら言う。

雄二「せめてものわびに……」

明久「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ」

白夜「ああと、手が滑ったよ雄二」

雄二「すまん。俺も手が滑った」

俺が雄二にライターを投げ、雄二が華麗な動きでラブレターを燃やす。

シュボツ メラメラメラ……

明久「ってうそおっ!? ここまでやった挙げ句、容赦なく燃やすの!? もうこれ100パーセント読めないよね!? 僕の幸せな未来はどこへいったの!?」

白夜「明久、まあ今度からあんなバカなミスはしないように気をつけるようにすんだな」

消火活動空しくラブレターは灰と化した。

姫路「坂本君と霧崎君は手紙の主が誰だか気にならないんですか?」

白夜「ていうかもうわかってるようなものだし」

姫路「え?」

雄二「ああ。他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな?」

姫路「そ、それは、その……っ!」

明久「雄二、その話をもっと詳しく」

明久が凄い勢いでこちらの会話に入ってきた。

姫路「ああ明久君は聞いちゃダメですっ！」

明久「こぺっ！？」

白夜「明久の首が真後ろを向いている！」

姫路「ご、ごめんなさいっ！ 私、大変なことを！」

白夜「まあ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな」

島田「ア~~~~~~~~！ アンタよくもやってくらたわね~~~~
〜？」

FFF団「吉井いつ！ 絶対殺すうっっ！」

FFF団「ガンホー！ ガンホー！」

FFF団「霧崎もブチ殺せえ~~~~！」

白夜「はいはい。一分で終わらせてあげるよ」

その後どっかの漫画に出ていた技を使ってボコボコにしてあげた。
明久の命が不安だな。

週末の夜の自宅…

優子「今日も楽しかったわね」

白夜「優子結構はしゃいでたもんね？」

秀吉「二人ともお帰りじゃ。今日のデートはどうじゃった？」

今日も優子と映画を見たり、色々な所を回って帰ってきたところで秀吉がリビングから顔を出して言ってきた。

優子「べ、べべべ別にデートってわけじゃ……／／／」

白夜「そ、そうだぞ。ただ一緒に出かけてきたただけだ／／／」

秀吉「そんな顔で言われてものう」

黒羽「説得力なしですよ」

いつも通りの会話。夕食を食べ、少し落ち着いたところで、俺が口を開く。

白夜「なあ優子、そろそろいいんじゃないか？」

優子「え、何の話？」

白夜「俺から言うとしたらあれだが、いくら親同士が決めたことだとしてもそのままってわけにもいかないだろう？」

優子「ああ、そういうええそうね、最近いろいろありすぎて忘れてたわ」

まあ最近試験召喚戦争とかなにやらあったしな。

白夜「こっちとしては忘れないで欲しかったけどな。まあそれは置いていてそろそろ婚約ってことにしてもいいんじゃないかなって思

うんだがだめか？」

優子「そういうこと普通聞かしたら、まあ私としてもこのままっていうのもいやだけど……お父さん達が許してくれるかしら」

秀吉「まあ二人じゃったら大丈夫じゃろうて。父上や母上も白夜のことは昔から気に入っておったしの。それにわしも白夜じゃったら姉上を任せられるしの」

今まで口を開かなかった秀吉はまるで姉の不安を取り除くようにそういった。

とりあえず秀吉は了解してくれたがあとは柚葉さん達だけだ。こうして白夜が不安になりながらも夜は更けていった。

さあ清涼祭が始まるよ！（前書き）

清涼祭編スタートでつ。

そんな・・・・・・・・・・！

血が・・・・・・・・・・

血が止まらない！

このままじゃコイツが死んじゃうよ！

鮮血に染まる学園――！

お願いです！

誰か・・・・・・・・・・誰か・・・・・・・・・・

誰か――コイツの鼻血を止めてください！

『中華喫茶ヨーロッパアンヘようこそっ！』

「ご注文はお決まりですかあ？ 当店は胡麻団子がオススメですよ
」

「そ、それじゃ・・・・・・・・・・」

客は姫路さんの胸元へ目が・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・肉まんを二つ」

「お待たせしました！ 胡麻団子と二皿とウーロン茶二つになります
まっす」

だが客は姫路さんの方を向いている。

ざわざわ・・・・・・・・

(三番テーブルにウーロン茶・・・・・・・・と)

ざわざわ・・・・・・・・

皆さん秀吉の丈がやや短いチャイナドレスに釘付け。

「さすが秀吉」

それを見て満足げな明久。

「僕らのためにありがとうね葉月ちゃん」

島田の妹である葉月ちゃんにお礼を言う明久。

「うっん。葉月も楽しいもん。それにお兄ちゃんが愛してるって言うてくれたし！」

満面の笑みで言う葉月ちゃん。

「え、」

空気が凍る。

『た、大変だっ』

『今度はウェイターが血まみれだぞ!?!』

「あー……………そろそろ召喚大会行ってもいいか?」

鼻血を塞ぐ康太。

「後生じゃ……………置いていかんでくれ」

「秀吉、僕らも召喚大会行くよ?」

それじゃ本編へGO!第十四問　僕とFクラスと清涼祭
学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しい物はなんですか?』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良
いかもしれませんね。

写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本　ではなく　成人向けの写真集』

教師のコメント

訂正の意味があるんでしょうか。

吉井明久の答え

『カロリーー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

霧崎白夜の答え

『両親』

教師のコメント

すいませんでした。

さあ清涼祭がはじまるよ！

桜が消え、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節には文月学園の今年最初の行事『清涼祭』

が行われる。よって、各クラスはその出し物を決め、準備に勤しむ時期なのだが・・・

須川「吉井！ こいつ！」

明久「勝負だ、須川君！」

須川「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

明久「言ったな！？ こうなれば意地でも打たせるもんか！」

姫路、島田、秀吉、そして俺と黒羽以外の４６人は野球やらで遊んでいた。

西村「どうだ？ 出し物は決まったか・・・これはどういうことだ？」

白夜「西村先生、校庭をご覧ください！」

俺が道を空けて西村先生を通す。そして校庭を見た西村先生の反応は・・・

西村「そうか、よくわかった。お前ら、ちょっと待ってろ」

白夜「まったくあやつらは」

黒羽「いつも通りですね？」

秀吉「疑問系で返されても困るのじゃが」

その後校庭から悲鳴が聞こえた。

その後Fクラス・・・

雄二「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

うわっ。雄二やる気ゼロだな。

雄二「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

秀吉「雄二はやる気ゼロのようじゃのう」

白夜「代表なんだからもっとしっかりして欲しいけど、雄二をやる気にさせる材料が何かないとな」

秀吉「そういえば召喚大会というのがイベントの一つとして在るのを知っておるか？」

白夜「もちろん。出場するつもりだ」

召喚大会というのは召喚獣同士を戦わせて勝者が勝ち進んでいくと

いう大会である。

試召戦争と違うのは、それがトーナメント制ということと、二人一組で戦うということである。

秀吉「折角だしお主となら出てみようかと思つてのう。しかも今年は特別な賞品が出るらしいのう」

白夜「白銀の腕輪だったか？」

秀吉「うむ。それと、毎年恒例の如月ハイランドのペアチケットじゃ」

白夜「秀吉はどっちが欲しいんだ？」

秀吉「わしか？腕輪の方が気になるのじゃ」

白夜「じゃあ俺はペアチケットの方だな、なんか嫌な予感がするが」

秀吉「姉上を誘つてみたらどうじゃ？ 案外すんなりOKしてくれるかもしれぬぞ？」

白夜「さすが秀吉だなナイスアイデアだ、じゃあお前は黒羽でも誘つたらどうだ？」

秀吉「まだだめじゃな。もう少したつてからじゃろつて」

優子と如月ハイランドかいいかもな。

雄二「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

あ。実行委員を決めているのを忘れてた。

美波「え？ ウチがやるの？ うーん……、ウチは召喚大

会に出るから、ちょっと困るかな」

明久「雄二。実行委員なら美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

秀治「え？ 私ですか？」

雄二「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてるうちにタイムアップになる」

何やら難航してるみたいだな。

数分後・・・

島田が雄二が提案した副実行員次第ではやってもいいということらしいので副実行委員の候補を挙げることとなった。

FFF団「吉井が適任だと思っ」

工藤「やはり坂本がやるべきなんじゃないか？」

横溝「霧崎はどうだ？」

何やら僕の名前が挙がったりもしているが。

秀吉「ワシは明久が適任じゃと思うがの」

白夜「同じく」

ここは明久に任せようと思う。

明久「って、秀吉に白夜。僕もそういう面倒な役はできればパスしたいな」なんて」

秀吉「それは他の皆とて同意見じゃ。ならば適任の者にやってもらった方が良くじゃろう?」

白夜「まあ最終的には島田に決めてもらえばよくね?」

雄二「と、いうわけだ。島田、今拳がった連中から二人を選んでくれ」

美波「そうね。それじゃ……………」

そう言つて島田は黒板に名前を書いていく。

『候補?……………吉井』

まあ予想通りだな。

『候補?……………明久』

突っ込まない。突っ込まないからね!

雄二「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

明久「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない?」

FFF団『どうする？ どっちが良いと思う？』

FFF団『そうだなあ……………。どちらもクズに変わりないんだが……………』

明久「こらあつ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！

あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

美波「ほらほらアキつてば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まっただから、前に出て議事をやらないと」

明久「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされてる気がするよ……………」

明久ドンマイ！

再び数分後…………

結果的に候補はこの三つとなった。

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】

康太が出した意見である。まあ確実に営業停止処分になるだろうな。しかし凄いネーミングセンスだな。

【候補？ ウエディング喫茶『人生の墓場』】

うん。これになったら厨房決定。

【候？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

須川君が熱弁した意見だ。残りの二つは色々厳しいからこの3つの中から選ぶならこれにするかな。

西村「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

西村先生が戻ってきた。

西村「……………補習の時間を倍にした方が良くかもしれんな」

うえっ！ それはご勘弁を。

FFF団「せ、先生！ それは違うんです！」

FFF団「そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！」

FFF団「僕らがバカなわけじゃありません！」

皆が明久をバカ扱いしている。

西村「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

西村先生が一喝。ほほう。あの人が明久をかばうなんて意外だ……

西村「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

白夜「すいません俺も反対しませんでした！」

西村「霧崎までもか！まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、

そういった気持ちすらないのか？」

FFF団「そうか！ その手があったか！」

FFF団「なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！」

FFF団「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

さすがにあんなことを言われれば活気づくだろうな。

姫路「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

珍しく姫路が立ち上がってやる気を示していた。
何かあるのかな？

FFF団「出し物はどうする？」

FFF団「初期投資の少ない写真館の方が」

FFF団「いや、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるぞ」

白夜「その前にまともじゃなければ俺が許可しないぞ」

FFF団「そうだった！霧崎は風紀委員だった」

うーん。まとまらんな。

FFF団『中華喫茶ならはずれはないだろう』

FFF団『それだと真新しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命傷じゃないか？』

FFF団『ウエディング喫茶はどうだ？』

FFF団『初期投資が大きすぎる。たったの二日間じゃ儲けは出ないんじゃないか』

FFF団『リスクが高いからこそリターンも大きいはずだ』

さてさて、どうなることやら。

美波『はいはい！　ちよつと静かにして！霧崎もなぜとめないの！』

島田が手を叩いて皆を静止させようとするが……。

『お化け屋敷とかの方が受けると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

この通り。皆さん試召戦争の時のまつまりはどこへ？

秀吉『まとまらないのう』

白夜『それがFクラスということだな。司令塔がしっかりすれば、このクラスはきちんと機能するんだがなあ。

そこが島田と明久の腕の見せ所というわけだが』

美波『もうっ。とにかく静かにして！　決まりそうにないから、店はさっき拳がった候補の中から選ぶからね！』

ほらっ！　ブーブー言わないの！　この3つの中から一つだけ選

んで手を挙げること！　いいわね！」

秀吉「島田もやるのう。ワシにはできんぞい」

白夜「島田も案外人をまとめるのには向いてるかもな」

そんなこんなでFクラスの出し物は中華喫茶に決まった。

須川「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

ム「・・・・・・・・・・・・・・・・（スクツ）」

そう言つて須川君と康太が立ち上がる。

明久「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

ム「・・・・・・・・・・・・・・・・紳士の嗜み」

わかつてるじゃん康太。

美波「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まって！」

俺はどうしようかな？

明久「ダメだ姫路さん！　キミはホール班じゃないと！」

とか思案している内に無自覚必殺料理人の肩書きを持つ姫路さんが

厨房班にしようなどという恐ろしい発言を明久が止めていた。

『明久、グツジョブじゃ』

秀吉『・・・・・・・・・・・・・・・・（コクコク！）』

明久『お前は英雄だ』

ふう。危なかった。食中毒になってしまつては成功はまずないからな。

さんざん迷つた結果、俺自身は厨房班にした。

厨房・・・・・・・・俺・康太・須川君・その他

ホール・・・・・・・・姫路・島田さん・明久・雄二・秀吉・その他
兼任・・・・・・・・黒羽

こんな感じにわかれた。さうて、がんばるとしますか！

バカと交渉と始まるの時（前書き）

竹原教頭 〓 竹原

バカと交渉と始まりの時

以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

霧崎白夜の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

あなたが問題を正解にするとは珍しいですね。

明日は雨でしょうか。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高知』

教師のコメント

正解不正解の前に、数があっていないことに違和感を覚えましょう。

放課後・・・

美波「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

島田さんと明久が何やら話しているので、秀吉と共に近づいてみる。

明久「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

美波「ううん、そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だってー」

明久「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからといって別に」

美波「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょ？」

初耳だ。

明久「もう僕お嬢にいけないっ！」

うん。大丈夫だ明久。きつと・・・。

明久「誰が雄二なんかと！ だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」

秀吉「・・・・・・・・あ、明久？」

残念だったな明久。それは絶対に叶わないよ。

秀吉「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われてもワシには、無理じゃ」

明久「うわあああ！　なんか勘違いで振られたあああ！」

白夜「大体、明久と雄二が愛し合っているというのはBLの同人誌の中だけであって・・・・・・・・」

美波「え？　じゃあアンタのは？」

白夜「どうゆうことだ？」

美波「だって、霧崎と木下っていくとこまでいった関係なんじゃないの？」

白夜「ありえない！」

バカな！　俺と秀吉がいくとこまで行った関係ってどういうことだよ！？

秀吉「びゃ、白夜。お主もなのか？　まあ、白夜なら、まだ・・・・・・」

白夜「秀吉くん！　なに満更でもないみたいな顔してるんだよ！？　俺たち男同士じゃないか！」

ま、まさか秀吉、そっちの世界に・・・・・・・・！？

秀吉「え？ あ、そうじゃったの！ ワシらは男同士じゃったな！」

まさか忘れてたのか？

白夜「まあとにかく、深刻な問題でも起きたのか？」

明久「いや、喫茶店の経営とクラスの設備の問題で――」

美波「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なの・・・・・・・・」

明久「え？ どういうこと？」

島田が深刻そうな表情を見せる。

これはマジなようだな。

美波「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてただけ、
事情が事情だし・・・・・・・・」

けど、一応秘密の話だからね？」

明久「う、うん。わかった」

白夜「実は、瑞希なんだけど」

明久「姫路さん？ 姫路さんがどうかしたの？」

美波「あの子、転校するかもしれないの」

明久「ほえ？」

明久がマヌケな声を出す、今はそんなことどうでもいい。

白夜「島田。姫路の転校の理由が大体想像がつくんだが。やっぱりFクラスの環境か？」

美波「そうなのよ。まず、瑞希って身体弱いでしょ？」

白夜「確かに。ござとミカン箱っていう設備にAクラスのトップレベルの学力を持つ身体が弱い娘を置いておきたくないだろうな。例えばそれが、姫路から好きな人を奪うことになっても」

秀吉「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

なにやら島田と話している間に明久が処理落ちしかけてたらしい。

美波「うん。瑞希も抵抗して『召喚大会で優勝して両親に見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

白夜「でも召喚大会には姫路さん以外のFクラスメンバーに優勝してもらわないとあまり効果は期待できないぞ？もし姫路の家族が見に来るんだとしたら尚更。学年でトップクラスの実力を持つ自分の娘が優勝してもあまり家族には響かないだろうし」

美波「そうよね。……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……？」

明久「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉、白夜であつても！」

明久。やっぱり君には人を引きつける力がある。
俺もそれに引きつけられた一人だが。

美波「そつか……。うん。アンタはそうだよね！」

明久「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！」

秀吉「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

黒羽「大体予想は尽きますよ？」

白夜「どこにいるのかわかるのか黒羽」

黒羽「おそらく坂本様なら翔子様から逃げているでしょうからあそこかと」

白夜「明久とりあえず雄二に連絡してみてくれ」

明久「だね」

P r r r r

現在明久が電話中……

明久「あ、雄二。ちょっと話が――」

繋がったみたいだな。

明久「え？ 雄二今何をしてるの？ 雄二！？ もしもし！ もしもし！」

美波「坂本はなんて言ってた？」

明久「えっと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

美波「・・・・・・・・なにそれ？」

まあまあ、そんな目で睨まないであげようぜ。

秀吉「大方、霧島翔子から逃げ回っておるんじやろう。アレはああ見えて異性には滅法弱いからの」

美波「そうすると、坂本と連絡を取るの難しいわね」

明久「いや、これはチャンスだ」

その通り！

黒羽「おそらく翔子様の性格からして考えると男子更衣室には逃げられないので坂本様は女子更衣室かと」

美波「え？ どういうこと？」

明久「雄二を喫茶店に引つ張り出すには丁度良い状況なんだよ。うん。ちよつと四人とも協力してくれるかな？」

美波「それはいいけど・・・・・・・・坂本の居場所はあつての？」

白夜「それについては明久ならわかるだろ」

明久「それじゃじゃ、行ってくる」

白夜「同じく護衛に」

体育館女子更衣室内・・・

明久「やあ雄二。奇遇だね」

あっさり雄二は見つかった。やはり女子更衣室に隠れてたか・・・

雄二「・・・・・・・・・・こういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのかわせてくれ」

白亜「偶然だぞ雄二。気にするな」

雄二「白夜もなあ、こんな場所で偶然会うワケが」

ガチャッ

あ。

優子「えーつと・・・・・・・・あれ？ Fクラスの問題児コンビに白夜？ ここ女子更衣室だよな？」

明久「やあ木下優子さん。奇遇だね」

雄二「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

優子「あ、うん。奇遇だね」

体操服の優子可愛いなあ。

白夜「体操服姿なんて可愛いな」

優子「え！ あ、ありがとう／＼／」

しまった！ つい口から本音が！ でも、どうやら俺が着いてきた意味があつたみたいだな。

優子「先生！ のぞ「させるか！」むううう！」

俺はの護衛についてきた理由はこんなイレギュラーの時のため、明久と雄二を一旦接触させたのち、補習室以外の場所につれていくことだから。とりあえず優子の口を押さえて、更衣室に押し倒す。

白夜「明久、雄二、行け！ ここはなんとかやっておくから」

明久「ありがと白夜」

雄二「恩に着る」

優子「むううう、むううう」

優子が僕の下で暴れてるので押さえつけて身動きできないようにする。

白夜「運動力抜群って便利だな。こうやってあっさり優子の身動きを封じれた。フフ、これで逃げたり、助けを呼ばうと叫ぼうとして

も無駄だ」

優子「む！？ むううう／／／」

あれ？ 何故だか優子の頬が赤いんだけど？

白夜「さて、この後どうするかなあ？」

西村先生呼ばれちゃあ敵わないし、もう少しこのままでいてもらおう。

優子「むううう」

白夜「とりあえずいい加減抵抗をやめない悪い子にはお仕置きが必要かな？」

軽くデコピンでもしようかな。

優子「むううう！／／／」

そして僕は優子にデコピンをしようと手を伸ばしたら……………。

ガチャッ

工藤「今優子の声がしたんだけ……………」ど

あ。工藤だ。

工藤「えーっと、霧崎君。なにしてるの？」

白夜「ちよつと抵抗をやめない優子にお仕置きしようかと」

工藤「お仕置きっていったいなんなのカナ」

白夜「ちよつとデコピンをしようかと」

工藤「その状況でデコピンをしようかとして嘘には無理があるよ白夜君」

白夜「え？ それはいったいどういう……！！！」

しまった！ 今の俺の状況、これはまずい！

まず、

俺は優子を押し倒している。

叫ばせないように口は塞いでいるので声は出せない。

優子を押さえつけて身動きをとれないようにしている。

先ほどお仕置きをするつもりと言ってしまった。

しかも丁度俺」の手は優子の胸元で止まっている。

獣のレッテルは確定だな。

白夜「ち、違うんだ2人とも！ これは優子が叫びそうだったから

「そりゃ獣のように襲われたんだから誰だって叫ぶよ」違う！

優子が叫ぼうとしたのは明久と雄二とここにいたからで「証拠はあるのカナ」？」ゆ、優子が承認だよ！ いたよな！？」

優子「白夜にいきなり襲われたことしか覚えてない／＼／」

白夜「な、なんだと！」

工藤「まさかボクも霧崎君が無理矢理女子を襲うとは思ってなかったよ」

白夜「本当に、その為に襲ったんじゃないんだ……」

ダメだ！ 俺の圧倒的不利である。

工藤「うんうん。わかってるって。霧崎君が欲望に負けて優子を獣のように襲ったんだよね」

白夜「うう………。本当に、違うのに……」

その時優子が俺の制服の裾を引っ張っていた。

白夜「何？」

殺されるのか？

優子「あの、その、今度からは無理矢理じゃなく、せめて私の同意を得てからにしてね？ そうすれば、まだ、あなたの欲望を、満たしてあげられるかも、しれないから」

工藤&白夜「……………」

この時、工藤がいなかったら確実に俺の理性がイイヤッハウオオー！ なことになっていただろう。

Fクラス・・・

白夜「ただいま」

明久「あつ、おかえり、白夜」

雄二「無事だったようだな」

白夜「ああ。野獣のレッテルを張られそうになったが全然問題ない」

理性以外は。

雄二「丁度良いタイミングだったな。これから俺と明久、秀吉の三人で学園長にクラス設備の向上を交渉しに行くところだったんだ。白夜も来るか？」

それは良いタイミングで戻ってきたな。

白夜「もちろんだ」

俺たちは学園長室を目指して歩いていった。

学園長室前・・・

竹原『・・・・・・・・賞品の・・・・・・・・として隠し・・・・・・・・』

学園長『・・・・・・・・こそ・・・・・・・・勝手に・・・・・・・・如月八
イランドに・・・・・・・・』

何やら声が聞こえてきた。

雄二「どうした、明久」

明久「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

雄二「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと入るぞ」

明久「失礼しまーす！」

えっ？ 何言っているのこの子たち？ 普通はノックとかするもんだよね？

秀吉「ちよっ！？ お主ら、ノックとかするもんじゃろ？」

学園長「そいつの言うとおりさね。本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

竹原「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。

……まさか、貴方の差し金ですか？」

中にいたのは学園長の藤堂力オルと教頭の竹原先生だ。しかし、差し金って何のことだ？ 何か聞かれたくない話でもしていたのだろうけど。

学園長「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもな

いのこ」

竹原「それはどうか。学園長は隠し事がお得意のようですから」

何だ？ この二人。仲が悪いのか？ 醜い大人の権力争いか・・・

・・・

とは言っても、学園長に頼るしかないっていうのがシヤクだな。まあ教頭よりはマシだけど。そういえば任務に竹原の邪魔をして学園を守れって書いてあったな。

学園長「さつきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」

竹原「・・・そうですか。そこまで否定されるのならこの場はそういうことにしておきましょう。

それでは、この場は失礼させていただきます」

そう言い残して教頭は部屋から出て行った。

学園長「んで、ガキども。アンタらは何の用だい？」

雄二「今日は学園長にお話があつて来ました」

雄二が俺らを代表して言う。

学園長「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。

それと、まずは名前を名乗るのが礼儀ってモンだ。覚えておきな」

アンタこそ礼儀作法は大丈夫なのかと突っ込みたかったが、今は我

慢する。

雄二「失礼しました。俺は二年Fクラス代表の坂本雄二」

白夜「同じくFクラスの霧崎白夜です」

秀吉「同じく木下秀吉じゃ」

雄二「そしてこっちが――二年生を代表するバカです」

凄い自己紹介だな。

学園長「ほう………。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本、吉井かい。そっちの二人も演劇や冷酷なる惨殺者で名を聞くだ」

明久「ちよつと待って学園長！　僕はまだ名前を言ってますよね！？」

学園長の明久への認識って………。

学園長「気が変わったよ。話を聞いてやろっじゃないか」

雄二「ありがとうございます」

学園長「礼なんか言う暇があつたらさっさと話しな、ウスノロ」

雄二「わかりました」

なんだか今日の雄二はよく我慢してるなあ。

雄二「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

学園長「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

雄二「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

まあ俺も口の利き方が悪い大人にはそれ相応の話し方をするからべつに問題ないかなって思う。

雄二「学園長のように戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

雄二もキレてんだな。秀吉も呆れてるし。

雄二「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、というワケです」

思案顔になる学園長。普通ならここで既に追い出されると思うんだけど。まあ向こうも問題があったからいいのかな？

明久「あの、学園長………？」

学園長「………ふむ、丁度いいタイミングさね………」

白夜「何が丁度いいんですか？」

学園長「ん？ 何のことだい？」

白夜「そうでしたか。聞き間違いました。すみません」

因みに僕には学園長の小声がはつきりと聞こえる。

学園長「よしよし。お前達の言いたいことはよくわかった」

明久「え？ それじゃ、直してもらえますね！」

学園長「却下だね」

白夜「霧崎グループからの資金援助1億円はカットですかね？」
「ははあまいなババア。」

学園長「何を言ってるんだいクソジャリ」

白夜「こういえばいいでしょうかね？霧崎グループ真の総帥霧崎白夜だね」

学園長「なんだって？あんたはいつたい何者なんだい」

白夜「なに、専属執事に社長をやらしてるだけさ、小学生の時にね」
学園長はあきらめたようにいった。

学園長「はあ仕方ないね生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなり、相談に乗ってやろうじゃないか」

交換条件か。

雄二「・・・・・・・・・・・・・・・・」

雄二が考え込んでいる。確かにそれが正解だな。

明久「その条件って何ですか？」

明久が雄二の代わりに聞く。

学園長「清涼祭で行われる召喚大会は知っているかい？」

明久「ええ、まあ」

学園長「じゃ、その優勝賞品は知っているかい？」

明久「優勝チームには、『白銀の腕輪』と『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』が用意されてるんですよ？」

ペアチケットと聞いて雄二が反応した。

学園長「そうさね、そこでアンタたちに頼みがある。そのペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

明久「どんな噂ですか？」

つまらない内容なんだけどね、と前置きして学園長が説明しだした。

学園長「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジンクスをね」

成る程、そういうことね。

白夜「つまり、権力を使い、この学園からカップルをゴールインさせて、一気に企業としての力を付けたいというわけですか」

学園長「多少強引な手を使ってもね」

雄二「な、なんだと!？」

雄二が突然大声を上げる。

まあ雄二にとっては大問題なんだろうけどね。

明久「どうしたのさ、雄二。そんなに慌てて」

雄二「慌てるに決まっているだろう! 今ババアと紫苑が言ったことは、『プレオープンプレミアムペアチケットでやってきたカップルを如月グループの力で強引に結婚させる』ってことだぞ!？」

明久「いいじゃない? 霧島さんが相手だったら」

雄二「全然良くない! くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな

。学生から結婚までいけばジंकクスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

悔しそうに唇をかむ雄二。

学園長「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

明久「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪いことじゃないし

、第一僕らはその話を知っているんだから、行かなければ済む話じゃないか」

きつと霧島さんと何かしらの約束をしたんだろうな。

雄二「……………絶対にアイツは参加して、優勝を狙ってくる……………。行けば結婚、行かなくても『約束を破ったから』と結婚……………。俺の、将来は……………！」

何か雄二の目がやばいんだけど？

でもそうになると、俺が優子を誘ったりできないわけだよな。

まあ結婚の意思があるから問題はないんだけど。

学園長「ま、そんなワケで、本人の意志を無視して、うちの可愛い生徒の未来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

可愛いと思ってるかどうかは甚だ疑問だがね。

うちの技術部門のトップ1の博士は、人間より機械やらに恋してるそうだからな。

明久「つまり交換条件ってのは——」

学園長「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやるうじゃないか」

まあ正々堂々勝ち上がって優勝すれば何の問題もあるまい。

学園長「無論、優勝者から強奪なんて真似はするんじゃないよ。譲ってもらうのも不可だ。私はお前たちに召喚大会で優勝しろ、と言ってるんだからね」

当たり前だ。

明久「……………僕たちが優勝したら、教室の改修と設備の向上

を約束してくれるんですね？」

学園長「何を言ってるんだい。教室の改修だけ。設備についてはうちの教育方針だ。変える気はないよ」

他のクラスに不満が出るだろうからな。

学園長「ただし、清涼祭で得た利益でなんとかしようっていうなら話は別だよ。特別に今回だけは勝手に設備を変更することに目を瞑ってやつてもいい」

秀吉「そこをなんとか設備向上もお願いできませんかのう？」

学園長「無理さね」

明久「そこをなんとか」

白夜「無駄だ。明久、秀吉。教室の改修をやってくれるだけマシつてもんだ。用は喫茶店を成功させればいいんだからな？」

明久「わかりました。この話、引き受けます」

学園長「そうかい。それなら交渉成立だね」

相手にあえて乗せられるというのも一つの手だからな。

雄二「ただし、こちらにも提案がある」

雄二め、学園長に更なる交渉をする気だな。
流石策士。

学園長「なんだい？　言ってみな」

雄二「召喚大会は二対一のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は科学、といった具合で進めていくと聞いている」

学園長「それがどうかしたかい？」

雄二「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

成る程。これで俺たちだけにこの話をしているかどうかがわかるということか。

学園長「ふむ……。いいだろう。点数の水差しとかだったら一蹴していたけれど、それくらいなら協力しようじゃないか」

雄二「……………ありがとうございます」

答えはイエス。

つまり学園長はこの話があり多くの人に知られたくないということ。

だとしたら何故僕たちなんだ？　どうしても勝ちたいならばそれこそAクラスの霧島さんや優子明らかに裏があるけれど、今はこのままの状況でやっていくしかない。

できれば情報は教えて欲しいんだけどな。その方が動きやすい。

学園長「さて。ここまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろっね？」

雄二「無論だ。俺たちを誰だと思っている？」

俺が知る高校生で最も策士肌の男雄二。

明久「絶対に優勝して見せます。そつちこそ、約束を忘れないように！」

文月学園二年生を代表するバカであり、優しき心を持つ観察処分者明久。

秀吉「姫路の転校はワシらが阻止して見せようぞ」

演技への熱意なら誰にも負けない演劇バカ秀吉。

白夜「ベストを尽くします。と、その前にチーム分けをしようよ」

そして、冷酷なる惨殺者の俺。

雄二「それもそうだな。まあチームは俺が考えるに、俺＆明久、秀吉＆白夜の組み合わせが打倒だろうな。お互い召喚獣の扱いに慣れている者が一人づつの方が勝率が上がる」

同感だ。

秀吉「よし。では、白夜。よろしく頼むぞ？」

白夜「こちらこそお手やわらかに」

雄二「おっと、言い忘れていたが、白夜、お前は優勝するな」

白夜「何で？ あっ！ そういうことが」

明久「何でだよ雄二？」

白夜「明久、そもそも俺らは姫路さんの転校を阻止するためにやってるんだから、さっきの雄二と話したであろう会話を思い出せ」

明久「雄二との会話？ うん。あっ！ そういうことが！」

雄二「バカのお前でも覚えていたようだな。白夜の成績は学年で見ても、トップファイブに入るであろう成績だ。
。そんなヤツが優勝しても、姫路の親にはFクラスの凄さをアピールできないんだよ」

と、いうわけだ。

白夜「ごめん秀吉。『白銀の腕輪』は諦められる？」

秀吉「何を言っておるのじゃ？ さっきお主が言っていたであろう？
？ ワシらは『姫路の転校』を阻止するためにやっておるんじゃ。
賞品には執着せんぞい」

白夜「ありがとな。秀吉」

学園長「話はまとまったかい？ それじゃ、ボウズども。任せたよ」

Fクラスバカ4人組「……おうよっ！」「」「」

こうして、俺らの戦いが始まった。

妨害、脅迫、召喚大会前編（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

霧崎白夜の答え

『その喫茶店に適した服装（風紀を乱さない程度のもの）ならなんでもよい』

教師のコメント

なるほど、適材適所というわけですね。それに一般公開もあるので確かに風紀を乱すような服装は好ましくありませんね。

土屋康太の答え

『スカートは15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを――』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え
『ブラジャー』

教師のコメント
ブレザーの間違いだと信じています。

妨害、脅迫、召喚大会前編

霧崎家・・・

白夜&秀吉「ただいま」

優子「あ、白夜に秀吉、お帰りなさい。遅かったじゃない、何かあったの？」

黒羽「もう用事は済んだんですか？」

学園長との交渉があつたため、帰りが若干遅くなったので優子が先に家に帰宅していた。

白夜「ちょっと、な？」

秀吉「うむ、ちょっとあつたんじゃよ」

優子「教えてくれる？黒羽が知ってるのに私が知らないっておかしいでしょ？」

何故だか優子が僕に笑顔で腕をがちりと捕獲した状態で言ってきた。あれ？脅迫？

白夜「いや、大したことじゃないんだ優子？だからサブミッションをしようとするなって痛あ！優子痛い痛い痛い！わかった、話す、話すから！」

何でこんな理不尽なことをされなくてはいけないんだ？

説明中・・・

優子「なるほどね。瑞希の転校を阻止するためにね」

秀吉「清涼祭といえば、姉上のクラスは何をすることになったんじや？」

優子「私のクラス？【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』になったのよ。まさかメイド服着る羽目になるなんて」

優子のメイド服かあ。時間があれば入店したいところだ。

秀吉「まあまあ姉上。人間生きてれば一度くらいメイド服を着るもんじゃ」

黒羽「それは普通あり得ませんよ、秀吉様」
それは違うと思う。

優子「三人とも遊びに来てくれると嬉しいな」

秀吉「もちろん行くぞい。のう？ 白夜に黒羽」

黒羽「そうですね、休憩のときにでもいきましよう」

白夜「あ、ああ。まあ、そうだな」

少し考えていたら優子に腕を掴まれた。

優子「な、何想像してんのよバカあ！／／／」

まさか想像したのがばれたのか！

白夜「あっ優子ツちがつ……………！ その関節はそつちには曲がらなつ……………！」

某アニメの不幸な人のセリフを拝借するならば不幸だ。確かに想像したけどよ。

清涼祭初日、Fクラス・・・

美波「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

見るも無惨だったFクラスの教室は一見本当にFクラスの教室かと思間違えるくらい喫茶店らしいものになっていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

「あ、これは木下君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきた、こう手際よくテキパキと」

きつとそのクロスは演劇部のだろうな。

演劇にもこういった準備が必要になってくるだろうから慣れているんだろうな。

「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

クロスを捲ると見慣れたミカン箱が。

「これを見られたらみせの評判はガタ落ちね」

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもみたとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「だといいんだけど、念のためにこれを組み立てとけ」

「いいけどこれなにさ」

「組み立て式の机だ」

先週からこっそり造っていたものだ。

営業妨害とかが来るかもしれないしな。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

ピンポンパンポン！

ん？ 何だ？

『ご連絡します。二年Fクラス、霧崎白夜君、教頭先生がお呼びです。直ちに教頭室へ向かってください。繰り返しますー』』

僕が教頭に？ 一体何の用だろう？

「白夜って教頭先生と接点あったっけ？」

「いや、教頭とは喋ったことすらないはずだが？」

「とにかく呼ばれていたのだから、行ってみれば呼ばれた訳もわかるじゃろ」

「それもそうだな。悪いけどちょっと行ってくる。召喚大会の一回戦開始十分前までに戻ってこなかったら向こうで待っていてくれ？」

「うむ。了解じゃ」

そう言って俺は教頭室へ向かった。

教頭室前・・・

コンコンッ

「入りたまえ」

ガチャッ

「失礼します」

一応目上なのでこんな感じに礼儀を払う。

「あの、どのようなご用件でしょうか？」

「いや、なに。君とちょっとした取引がしたくてね」

「取引、ですか？」

取引？　僕がこの人とするような物などないはずだが？

「そう。君は学園長側の人間だろう？」

「何のことでしょう？」

この人はさっきの会話を知っているのか？　今は様子を見るために隠しておくか。

「いや、隠さなくていい。如月ハイランドのチケットを回収して欲

しいとでも頼まれたのだろうか？」

「すいませんが自分にはサッパリなのですが」

先ほど険悪な感じだったからな。互いの情報を多少は集めているんだろう。」

「まあ隠すというならそれでもいいがね」

「それで、本題の取引というのは？」

「簡単な話さ。君には私の邪魔をしないで欲しいんだよ」

「邪魔というのは？」

「学園長が君などの生徒に頼み事をしているのと同じように、私にも協力してくれる生徒がいてね。彼らの邪魔をしないでもらいたいんだよ」

成る程。要は学園長を引きずり落としたいから、その為の計画を邪魔するなということか？

だけど、僕は姫路の転校を阻止する為にやっているんだ。そんなことができるわけがない。

「断ると言ったら？」

所詮この人には俺を動かせる為のカードは持っていないだろう。それにこの人の為に動く気もないし、義理もない。

「そうだな、これが世界中にばらまかれるかな？」

そう言つて教頭は書類を俺に渡して自分は仕事をしているであろう席に着いた。

「なっ！？ こ、これは！」

俺に渡されたのは俺の過去に関する秘匿情報が細々とまとめられた書類。

「アンタ、これをどこで手に入れた？」

「まあまあ、そう怖い顔をするな。とあるルートから手に入れてね」

「ふざけるなっ！ 俺に関する情報は警察庁のごく一部の上層部の人間だけが見ることが許可されている物だぞ！ アンタの様な一般人が見られる様な物じゃない！」

「どういうことだ！？ 何で情報が漏れている！？ しかも僕の情報が。」

まさか、警察組織内での裏切り者がいるのか！？ しかも、上層部の人間の。

今まで裏切りは何度かあったが、上層部の人間が裏切るようなことは今までで一度もなかったのに。今になって現れたというのか！

「色々あつてね。それにしても驚きだね。まさか君が生きているとは。死んだと報道されていたが？」

「くっ！」

残念ながら現在は記憶を消すための機械は信用のおける技術者に設

計図を渡して開発してもらっている途中だ。今は何としてもこの情報
の流失は抑えなくては………！

「………わかりました。協力します」

すまん。皆。

「おお！ それはよかった」ただし、こちらにも条件があります」何
かね？」

「俺の大切な人たちを傷つけるな」

「君の大切な人達というと？」

「わかってるはずだ」

「まあ、大体ね。いいだろう。彼らを傷つけないと約束しよう。こ
れで、交渉成立だね？」

こちらが主導権を握っているということとで余裕があるらしいな。
舐められたモンだな。

「はい」

こうして、冷酷なる惨殺者とまで言われた俺は悪の手に墜ちた。

白夜が十分前になっても戻ってこなかったので、現在試合会場へ向かっているところじゃ。

「あつ！ 秀吉」

「ん？」

すると白夜が小走りで向かってきた。

「おお！ よかった、用事は済んだようじゃの」

「すまん遅くなって」

「気にするでない。実際、一回戦には遅れておらんのじゃし」

「それもそうだな。じゃあ試合会場へ行こうか」

試合会場・・・

「それでは、試験召喚大会一回戦を始めたいと思います」

因みにワシらはCブロック。

明久と雄二のペアがDブロックで参加している。

Aブロックには姉上と霧島という強力なペアがおるから心配じゃが、今はワシらも心配ばかりはしておれんのう。同じブロックにはAクラスモブ×2という同じく強力なペアがおるのじゃから。

久保はチケットをもらったら誰と行くつもりなんじゃろう？

気になるのう。もしかや明久かもしれんがのう。

「秀吉、そろそろいくぞ?」

「う、うむ」

考え事をしておったから負けたなどでは話にならんからな。

しつかりせんと! まあ白夜がおるからそう簡単には負けないんじやろうがいつまでも

白夜に頼り続ける訳にはいかんし、頑張らなくては。

「「「「^{サモン}試獣召喚!」」」」

『Dクラス 笹島圭吾 & Dクラス 鈴木一郎

英語R 102点 & 127点

VS

Fクラス 木下秀吉 & Fクラス 霧崎白夜

英語R 58点 & 935点 『

相変わらず白夜は勉強ができるのう。

ワシの11倍じゃ。

「すまぬ白夜。ワシはあまり役に立てそうにない」

「そんなことない。秀吉がいるいないじゃ随分変わってくるぞ?」

「そうかのう?」

「そつだぞ。『それでは、始めてください! 来るぞ秀吉』」

「うむ！」

相手の召喚獣はオーソドックスな剣と槍。
すると2体ともワシの召喚獣の方に突っ込んできた。

「秀吉、防御しろ！」

「了解じゃ！」

長刀で二体の攻撃を受ける。若干点数が減ったがまだいける。

「二体とも秀吉の方へ行っちゃって良かったの？　僕がフリー
だけど？」

すると白夜の召喚獣が武器を取り出し、刃の部分で思い切り相手の
召喚獣の武器に叩き付ける。すると・・・・・・・・。。

「げっ！　剣が折られたぞ！」

「お、俺も折られた！」

「今だ秀吉！」

「くらえっ！」

長刀で相手の召喚獣を二体とも真っ二つに切り裂いた。

「勝者、木下・霧崎ペア」

「やるじゃないか秀吉」

「お主のサポートのおかげじゃよ」

「そんなことない。二体とも秀吉が倒したじゃないか」

「な、何かそう言われると嬉しいのう」

やっぱり白夜といると安心できるのう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・秀吉、白夜。ちょっと来て欲しい」

「ん？ ムツツリーニ、いったいどうしたんじゃ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・営業妨害がいる」

「何じゃと！？ それなら早く戻るぞ白夜」

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

何やら紫苑の様子がおかしいのじゃが？

「どうしたのじゃ白夜？」

「あ、いや。何でもない！ それじゃあ早く戻ろつか！」

そう言ってワシらは教室へ戻って行った。

Fクラスの教室前廊下・・・

白夜side

「む。あの連中じゃな。ってもう雄二がおるではないか」

確かに、廊下まで聞こえる大声でしゃべってる奴らがいる。

もしかしてあいつらが教頭の言ってた協力者か？

好き勝手言ってるな。 僕が手を出せば『劈掛拳ひかけん（中国拳法の一つ）で始まる交渉術』から『八極拳はっきょくけん（中国拳法の一つ）でつなぐ交渉術』、そして、『必殺技で締める交渉術』をおみまいしてやったのに。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

客が一人、また一人と席を立つ。その中には教頭の姿も。

『店、変えるか』

『そうしようか』

「あ、お客さん！」

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの
で、暫定的にこのような物を使ってしまいました。ですが、たった
今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

雄二が頭を下げている後ろにはFクラスの皆が演劇部で見たことがあるテーブルを運んでいた。

すると何人かの客は残ってくれたが、やはり数は減ってしまった。

「あれ？ テーブルを入れ替えてるの？」

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「はいっ。なんとか勝てました」

どうやら姫路さんと島田さんが試合に勝利し、帰還したもようだ。

「そんなことより、テーブル入れ替えちゃってもいいの？ 演劇部にあるテーブルなんて。そこまで多くはないはずでしょう？」

「1回戦行く前に明久に渡したやつもあるしな、まあそれも2つ分が限界だったが」

これでもたりないなら、調達してくれば良いだけだ、生憎俺は厨房が忙しいので、調達にはいけないらしいが。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、ごゆっくりとおくつろぎ下さい」

じゃ、俺も日々の料理の腕を振るうかな。

試合会場・・・

しばらく仕事をしていると二回戦の時間になったので試合会場に来ている。

「それでは二回戦を始めます」

「『『『サモン 試獣召喚！』『』『』」

『Cクラス 黒崎トオル & Bクラス 工藤信二

化学 146点 & 181点

VS

Fクラス 木下秀吉 & Fクラス 霧崎白夜

化学 88点 & 750点 『

「そうだ！ 秀吉。今回は折角だから自分より強い相手との戦闘の練習しておくか？」

「そうじゃな。基本的にワシは点数の高い者とばかりやるのじゃろうから、学んでおきたいのう」

「じゃ、やりますか」

秀吉強化作戦だな。

「それでは、始めてください」

「どうすれば良いかって言うと、まず敵をできるだけ引きつけるんだ」

小さい声で秀吉にアドバイスを送る。

「う、うむ」

「そして、攻撃瞬間に少しだけ避けるんだ」

「こ、こっか？」

ちょうど秀吉の方に向かっていた召喚獣の攻撃が空を切る。

「例え、自分より強い相手でも、ギリギリまで引きつけて、最小限の動きだけで避けることができれば、ついていくことができるはずだ」

「た、確かに互角に渡り合えておるがなかなか難しいのう」

「接近戦ではな。でも、慣れれば召喚獣バトルの時には大いに役立つはずだぞ」

見ると、秀吉の召喚獣が相手の召喚獣の攻撃をかわしつつ、地味ながら点数を減らしている。

「流石秀吉。物覚えが早いな。伊達に演劇の内容を覚えてないな」

「白夜、お主の方は、ってもう倒しておるんじゃない」

「今倒したばかりだ。そのまま頑張れ！」

「うっ。何か白夜が厳しい気がするのじゃ」

そのまま秀吉は順調に点数を減らしていったが、最後に攻撃に当たってしまい、相打ちとなった。

「勝者、木下・霧崎ペア」

「ふう、なんとか相打ちにできたぞい」

「相打ちじゃあ秀吉がクラス代表になった時には負けるぞ？ さあ、このままAクラスの連中とも渡り合えるくらいになろうぜ！」

「うう。がんばるのじゃ」

「その息だぞ」

さあ、次に試合も頑張るぞ！

バカと女装メイドと裁きの鉄槌（前書き）

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希と霧崎白夜の答え

『Peace - Keeping - Operations』

教師のコメント

そうですね。United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshi-ttsuki Oppai』の略。
世界中のスリーサイズを規定する下着メーカーのこと

教師のコメント

君は世界の平和を何だと思っているのですか。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田』の略

教師のコメント

それは世界の平和を守る人達です。

バカと女装メイドと裁きの鉄槌

「ただいま戻ったぞい……ってあまり客はおらんようじやの……」

「あつ、お帰り二人とも。試合はどうだった？」

客があまりいないので、皆さんも暇そうだな。やはりさっきの妨害が痛かったか……

「ばつちり勝ってきたぞい。そっちはどうじゃった？」

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるつてさ」

「あの後妨害はあったの？」

「……あれから、営業妨害は来てない。ここ以外で何かが起きてる可能性が高い」

「確かにな」

そうやって四人で考え込んでいると、

『お兄さん、すいませんです』

『いや。きにするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

ん？ これは雄二と誰かさんの声だ。声の高さからまだ小学生くらいだろうか？

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

『んで、探してるのはどんなヤツだ？』

人捜しか？ 後で手伝ってやるかな……

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

最後のヤツ、ロリコンか？

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探してるんですっ』

『お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？』

特徴次第では多少特定しやすくなるんだが、

『えっと……。バカなお兄ちゃんでした！』

言葉を失うとは正にこのことだね。

『そうか』

流石に雄二でもこの特徴じゃあ……。『

……。沢山いるんだが？』

多すぎて特定できないだろう。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……。』

『うん？ 他に何か特徴があるのか？』

『その……。すっごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『吉井だな』』 明久だな

あれ？ 明久泣いてる？

『全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！

絶対に人違いー！』

『あつ！ バカなお兄ちゃんだっ！』

葉月とか言う女の子が明久に抱きついた。凄い、あの女の子、的確に明久の鳩尾に頭突きをヒットさせている。

『絶対に人違い、がどうした？』

「…………人違いだと、いいなあ…………。って、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな知り合いはいないよ？」

明久キミは何てことを！

「え？ お兄ちゃん…………知らないって、ひどい…………」

泣かせてるし…………

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！ バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

純粹とは、時に残酷なんだな…………

「明久——じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「後でバカなお兄ちゃんはこの人ですって皆に教えておくから、今は勘弁してやってね？」

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに——」

ガラッ！

あ、姫路さんと島田さんだ。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「うぶあつ！？」

凄いタイミングと連携で明久のライフポイントを一気に大幅に奪っ

たな。

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

明久がやばそうだな。

「ちよつと待って！ 結婚の約束なんて僕は全然——」

「ふえええんっ！ 酷いですっ！ ファーストキスもあげたのに——っ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！ はなひをきいてくらはいつ！」

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよつと待ってなさい」

「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

ん？ お姉ちゃんってことはこの子は島田さんの妹？

「ああっ！ あのときのぬいぐるみの子か！」

どうやら知り合いみたいだな。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月です」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしてもよく学校がわかったね？」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

「あれ？ 葉月ってアキと知り合いなの？」

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ?」

さつきそれらしきことを言ってたじゃん。

なんか姫路がブツブツ言っているが、聞かなかったことにしよう。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん! ぬいぐるみありがとうでしたっ!」

礼儀正しい子だな。姫路とも知り合いだろうか?

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる?」

「はいですっ! 毎日一緒に寝てるです」

「良かった。気に入ってくれたんだ」

「ところで、この客の少なさはどういうことだ?」

そういえばそのことについて話し合ってたんだよね!

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ?」

「ん? どんな話だ?」

「えつとね、中華喫茶は汚いから聞かない方がいい、って」

さつきの常夏コンビとやらの仕業かな? だとしたら、ボコボコにしてボロ雑巾のようにしてやる。

「ふむ……。例の連中の妨害が続いてるんだろうな。探し出してシバき倒すか」

僕も同意見だ。

「例の連中って常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂が流れてどこまで広がっているかを確認しないと」

悪事千里を走るって言うしな。

「お兄ちゃん、葉月と一緒にいこっ」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あまり遊べないんだ」

なだすように明久が葉月ちゃんの頭を撫でる。

「む。折角会いに来たのに」

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

偵察は戦略を立てるための基本中の基本だからね。

「ん、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯も食べに行く？」

「うんっ」

嬉しそудな。明久つて結構もてるよね……性別なんて関係なく。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

「ワシも同行しても良いかの？」

「構わんぞ」

「……………喫茶店なら任せておけ」

「そうか。悪いな、ムツッリー」

「いいんですか？ ありがとうございます。土屋君」

「僕も行くよ」

これで合計7人。ちよつと多い気がするけどね。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね……………短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店——」

「なんだって！？ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そудな明久！ 我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に調査しないと！」

そう言つて二人は走り去つていった。場所わかるのかなあの二人？

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……………」

「お兄ちゃんのバカ！」

「あやつら……………」

「仕方ないぞ秀吉。だってあの二人だからな」

Aクラス前・・・

「頼む！　ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

まさかと思ったが本当にここ（Aクラス）だったとは、

「そっか。ここって坂本の大好きな翔子のいるクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだからー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（パシャパシャパシャパシャ！）」

さつき任せとけて言ってたばかりなのに・・・・・・・・

「・・・・・・・・ムツツリーニ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・人違い」

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・盗撮」

正直者め。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら

撮られてる女の子が可哀想だトーー」

「・・・・・・・・一枚百円」

「2ダース貰おうーー可哀想だと思わないのかい？」

あつ、ここにも正直者が1人いる。

「アキ、普通に注文してるわよ」

「・・・・・・・・そろそろ当番だから戻る」

そしてさり気なく明久に写真を渡している。

いつの間にプリントアウトを済ませたんだ？

「まったく、ムツツリー二にも困ったものだね」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

バレてるし。

「やだな。もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう？ もうすぐお腹が減っちゃったよ」

「あ、そうですね。入りましょうか」

姫路、騙されてるぞ？

「うんうん。早く敵情視察も済ませないとーー写ってるのは男の足ばかりじゃないか畜生！」

「やっぱり見てるじゃないですかっ!」

「ご、ごめんなひゃい! くひをひっぱらないで!」

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

「…………おかえりなさいませ、お嬢様」

島田さんが開けたドアから出迎えてくれたのは、霧島さんだ。

「わあ、綺麗……………」

思わず姫路さんが感嘆の声を漏らすのも頷けるくらいによく似合っている。

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜!」

「邪魔になるぞい」

「同じく」

「…………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

「…………チツ」

渋谷雄二も入店。

「…………おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

かなりアレンジされていた。

「霧島さん、大胆です……………」

「ウチも見習わないとね……………」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

葉月ちゃん、キミはそのままでもいいんだよ。

「おかえりなさいませ。ご主人様、お嬢様」

工藤も出迎えてくれた。

「お席にご案内します、と、言いたい所だけどさ」

「白夜君、あのバカ。殺っちゃっていいよ？」

「……優子が困ってる」

「え？ 誰かいるの？」

霧島さんが指を指した方向を見ると、

「な〜良いだろ？ 一緒に回ろうぜ？」

「あ、あの。そういうのはちょっと、」

「え〜、彼氏とかと約束してんの？」

「っ！ いえ、そういうわけではないんですが……」

「じゃあ良いじゃん！ ホラ、行こうぜ」

「あつ！ そ、その、困ります！ お店の方もあるので……」

クソ野郎がいた。

「成る程。わかった。直ちに処理するよ。悪いけど、ゴミ箱を用意しといて貰えるかな？」

皆は先に席に着いてて」

「あいあい」

そう言い残して、クソ野郎の元へ向かう。

アイツ、よくも優子に触ったな。しかもナンパ目的で。ブチ殺す！

「唸れッ！ 僕の^{コスモ}小宇宙――！！」

「おごあつ！？」

「あ、白夜」

全身全霊をかけた拳を顔面にたたき込む。

チツ！ 後方に飛んで、打点をずらされたか。

「優子、大丈夫？」

「え、ええ。大丈夫よ」

「特に何もされてない？」

「今、腕を掴まれたくらいよ」

「くつ、よくも……！！ 優子、後で保健室に行って消毒して貰おう？」

「う、うん。後、その……」

「何？ 何かされた？」

「顔が近い」

「え？ あ！ す、すまん」

いかんいかん。我を忘れていたとはいえ、確かに顔が近かったな。

「すぐに焼却炉にぶち込んで来るからちよつと待っててね？」

「え？ 焼却炉？」

さて、さつさとこいつをぶちのめすか。

「てめえ、何しやがる！？」

「黙れ、後方に飛んで、威力を弱めたくせに」

「それとこれとは話が別だろう！？ それよりも先輩に向かって」

「うるさいぞ。僕の中ではアンタはチンピラと変態を足して、2でかけたような存在なんだよ」

「かけるのか！？ そこは普通2で割るんじゃないのか！？」

「うるさいですよ。変態先輩」

「好き勝手言いやがって、やるか？」

「上等だ」

多分読者の皆様はこいつ誰？ という方もいらっしゃるでしょう。
仕方なく、僕がこいつの自己紹介を簡単にしますね。

こいつは斉藤剛毅。一応警察官、剣道5段の人間で、これでも強い方。（作者のイメージはREBONの登場キャラのザクロ）
暇さえあれば、ナンパするような最低な人間。

それにしても、こいつに優子が触れられるなんて。許せない！

「喰らえっ！」「」

秀吉 side

先ほど姉上をナンパしようとしていたヤツは白夜と何の映画ですか？ と聞かれてもいにくらいの激しい戦闘をしていた。白夜ってそんなに強かったんじやのう。

「改めて、お席にご案内します」

ワシらは席に着くこととした。

「……………では、メニューをどうぞ」

流石Aクラス、メニューも無駄に豪華じゃのう。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「ワシは『アーモンドクッキー』じゃ」

「んじゃ、俺はー」

「……ご注文を繰り返します」

うむ？ 雄二の言葉を遮るように霧島が注文を繰り返しておるが、良いのか？

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『アーモンドクッキー』を一つ、

『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

雄二は霧島に滅法弱いのだ。

「……では食器をご用意致します」

それぞれ頼んだ物に合う食器が目の前に置かれる。

「しょ、翔子！　コレ本当にうちの実印だぞ！　どうやって手に入れたんだ！？」

「・・・・・・・・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

「・・・・・・・・・・明久、秀吉。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ・・・・・・・・・・！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

「お主も大変じゃのう」

「あのー、ちよつといいかしら？」

すると、突然女性の声がする。

「あれ？　美由紀さん？　どうしてここにいるんじゃない？」

なぜここに鈴木さんがいるんじゃないか

「初めまして、皆さん。私は『鈴木　美由紀』です。あなた方は、白夜君のお友達ですか？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

その場にいたわし以外の皆が同時に答える。

「そうでしたか、皆さん。これから白夜と友達でいてくださいかね？　それと、私の連れのバカがご迷惑かけてすいません。きちんと言い聞かせておくので勘弁してくださいね？」

「あの、失礼かもしれませんが、あなたは霧崎君の義理のお姉さんとかですか？」

姫路がふと疑問に思ったのか聞いておる。

確かにそれくらいの若さに見えるが、

「あら、そんなに若く見えるかしら？」

ちよつと嬉しそうに鈴木さんが言う。

「は、はい」

思わず敬語になってしまった。

「これでも私は30よ。さて、私はあのバ力を回収して行きますね。それでは皆さん。白夜君のことをよろしく願います」

ぺこりと頭を下げて言う鈴木さん、礼儀正しい。

「「「「「はい！」「」「」「」」」」

当然ワシらは、はいと答える。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』

丁度その時、例の二人組が入ってきた。

「あ、あの人達だよ。さつき大声で『中華喫茶は汚い』って言うってたの」

さつきということは何度も来ているという事じゃろうか？

『それにしても、この中華喫茶は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつきいった二丁Fの中華喫茶は酷かったからな！』

『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いていたもんな！』

わざわざ大声で叫びあっている。マナーもへつたくれもない。TPOというものを知らないんじゃないだろうか？

「待て、明久」

雄二が明久を止める。

「雄二、どうして止めるのさ！ あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

「でも、このまま見ているというのは」

「いや、やるなら頭を使えということだ。おい、翔子」

「・・・・・・・・何？」

「あの連中がここに来たのは始めてか？」

「・・・・・・・・さつき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさつきとかわらない。ずっと同じようなことを言っている」

「ホント、迷惑だね」

「あんな事を言うためだけに入ってこないで欲しいわ」

工藤と姉上が霧島と同じようにあの連中のことを迷惑そうに言う。

「そうか・・・・・・・・。よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ
「・・・・・・・・わかった」

メイド服を借りてどうするんじや？ まさかワシが着るのか？ 姉
上に殺されかけるから御免こうむりたいのじやが。

「し、翔子ちゃん！？ こんなところで脱ぎ始めちゃダメですっ！」
「そうよ！ ここにはケダモノが沢山いるのよ！？」

「わあ。お姉さん、胸おっきいです」

「だ、代表！　いくら何でも」

「代表大胆だね！」

成る程、大体の想像はついた。

「……雄二が欲しいって言ったから」

「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った！？ 予備のヤツがあれば貸してくれって意味だ！」

「……今、持って来る」

「その必要は無いみたいだよ？」

「どういふことじゃ？ 工藤？」

「あそこを見なさい、白夜が既にやってるわよ」

「えっ？」「どーで？」

呆れている姉上以外の皆は姉上が指刺す方へ向いてみるが白夜らしき姿はどこにもない。

「今接触してるメイドさんよ」

『お客様、ちよつとよろしいでしょうか?』

「なんだ？」
「へえ。こんなコもいたんだな」

『結構可愛いな』

「おい、もしかして、あれか？」

「そうよ。なぜか憎いくらい女子に見えのよ。白夜の変装」

現在あの連中と銀髪の霧島と同じくらいの髪の長さをしたメイドが接触している。

『テーブルの下を掃除致しますので、少々席を立つてもらえないでしょうか？』

「掃除？ さっさと済ませくれよな？」

二人とも席を立つ。

『ありがとうございます。それでは——』

二人の方を向き直り——

『だまし討ち！』

『ぐばあっ！？』

一人に向かつて、肘打ちを入れる。

くらった一人は吹っ飛ぶ。

『なっ！？ てめえ！ 何しやが！』

『もういつちよ！』

『おぶっ！？』

手を密着させたらいきなりもう一人もその場に崩れ落ちた。

何をしたのかよくここからではわからないが、あの二人をのしたの
は事実じやろう。

『きゃー！ この人に今お尻を撫でられました！』

『ちよ、ちよつとま——ぐばあっ！』

『こんな公衆の面前で痴漢行為とはこのゲス野郎が！』

『触られた方の身にもなってみるんだねこの変態どもが！』

チャンスは逃すまいと明久と雄二の二人が白夜？ のもとへ向かつて行つた。

『な、何を見て——』

『黙れ！ たった今、コイツはこのウェイトレスのお尻を撫でまくつてただろうが！ 俺の目は節穴ではないぞ！』

すまぬ。正直節穴だと思うのじゃ。

『今でこのコがどれだけ深い傷を負ったか考えてみるや!』

『だから……傷を、負って……いるのは、こつち・
……』

『さて。抵抗しないのなら痴漢行為取り調べの為、ちょっと来てもらおうか』

白夜? にやられた痛みが相当痛むのだろう。随分一方的な会話に聞こえる。

『逃げる、ぞ。夏川』

『逃がすか! 追うぞ明久! 白夜ちゃん!』

『オツケー!』

『何言ってるんですかご主人様? 私の名前は長谷川京子はせがわきょうこですよ?

それに、もうすぐ試合が始まるので、後は任せましたよご主人様!』

そう言っつて、こちらに戻ってくるなさん。それに咄嗟に偽名を使うなんて、初めから考えていたんじゃないか?

「何なんでしょう? この敗北感」

「本当の敵は女子だと思ってたのに」

「……羨ましい」

「ちょっと自信なくしちゃうなあ」

「秀吉だけじゃなかったのが一番ショックだったわ」

女子がそれぞれの感想? を言っている。

「それでは秀吉君、先に会場で待っていてくださいね?」

「りよ、了解じゃ」

危ない危ない。ワシとしたことが一瞬見入ってしまった。

バカと女装メイドと裁きの鉄槌（後書き）

まだまだ修正入ります。

バカと悪意と決意の始まり（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？

【？ 可愛らしさ ？ 統率力 ？ 行動力 ？ その他（ ）】
また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

土屋康太の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいといったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『【？可愛らしさ】候補・・・姫路瑞希× 木下秀吉× 島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるそうです。

坂本雄二の答え

『【？その他（結婚相手）】候補・・・霧島翔子』

教師のコメント

どうしてAクラスの霧島さんが用紙を持ってきてくれたのでしょうか。

霧崎白夜答え

『【？統率力】候補・・・・・・・・島田美波 霧島翔子 木下優子などの発言力のある人』

教師のコメント

指揮する人がいないと始まりませんからね。

バカと悪意と決意の始まり

「さて、次は四回戦だけだが」

「強敵じゃのう」

変装を解いて三回戦を難なく勝ち上がった俺たち。

でも四回戦の相手はそう簡単に勝てる相手じゃない。次の対戦相手はAクラスのモブペア。

しかも教科は保健体育。モブAは確実に400点オーバーしてきそうだし、モブBも苦手じゃないし。

うゝん。どうしたものか。

因みに明久達のペアは不戦勝だったらしい。何でも、対戦相手が食中毒だとか。

原因がウチの喫茶ではないことを祈りたい。

「それについてはまた後で考えるとして、今は喫茶店の建て直しを考えるぞ」

「あいあい」

現在片手で数えきれんくらいしか客がいない。

あの常夏コンビめゝ！

「やはりインパクトがあることを遣る必要があるよな」

「ふむ。それで何をするか、じゃが……………」

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直すぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう言つて雄二はチャイナ服を取り出した。

一体雄二はどこからそんな物を仕入れているんだろう？

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトがあるじゃろうな。コレを宣伝用に――」

女子二人と多分秀吉が――

「ああ。コレを――明久が着る」

ビックインパクト！

「ちよつ………！　お願い、許して！　チャイナ服を着たら、きっと僕は女装趣味の変態だつて皆に認識されちゃう！」

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらつ」

「あ、なんだ。良かった」

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう………？」

仕方ないよ秀吉。いつそのこと、もう運命として認めてみたらどうかな？

「諦めな秀吉」

「何を言ってるんだ白夜。お前も着るんだぞ?」

「え? でも三人が着れば十分宣伝になると思うが? それに俺厨房だぞ」

「それは男性客にはな。だからお前には男性用のを着てもらう。厨房は何とかなるだろう」

「なるほど! それで女性客の数を増やそうという訳じゃない!」

「え!? それって俺に死ねって言ってるの!?!」

冗談じゃない! それで女性客に言い寄られてるのを優子に見られたらどんな目に遭わされるかわからないというのに!

「大丈夫だろ? 白夜が大好きな木下姉は召喚大会やら店があるだろうから遊びに来ることはあまりないだろうし」

「でも秀吉が優子に言いそうなんだが?」

「白夜。お主はワシを信じてくれんのか?」

「今までその手に何度引つかかってきたことか………。だけでも騙されないぞ!」

「というか大好きだというのは否定しないんだな」

そりゃそうだ。好きなんだし。それに既にばれている雄二達に隠してもどうしようもないし。

「チッ。後で姉上に白夜がナンパしてたと報告するつもりじゃったのに」

出たっ！ 腹黒秀吉！ 恐らくいつも通り何かしらの報酬を用意されているのだろう。

「まあいいよ。どうせ渋ったって仕方ないんだし」

「よし！ 後は姫路と島田だな」

ガラッ！

「たっだいま〜！」

「ただいま戻りました〜」

その二人が帰ってきた。

「帰ってきたばかりで悪いが二人とも、クラスの売り上げの為に協力してもらっぞ」

「そう言うことだよ二人とも」

明久と雄二が言い寄る。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……………」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……………」

二人とも明らかに引いている。

「やれ、明久」

「オーケー！　へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ！　マジすんませんした！　自分チョーシくれてましたっ！」

「「弱いな、お前（明久）」」

「どうしてまた、急にそんなこと言い出すのよ？　前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」

まあ当然の反応だよね。

「店の宣伝の為と、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

「大好——愛してる」

正直者め。

「…………お前は本当に嘘がつかないヤツだな」

「し、仕方ないわね。売り上げの為に、仕方なく協力してあげるわ」

「そ、そうですね！　お店の為ですしね！」

雄二って二人を扱うのが上手いよな。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が――」

「……………！！（チクチクチクチク）」

いきなり康太が現れたかと思ったら裁縫を始めたした。

「ム、ムツリニ！ どうしてそんな凄い勢いで裁縫を！？ つていつかさっきまでいなかったよね！？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

嗅覚？

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

二人の声がハモる。

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

「こ、これを来て出場しろって言つの……………？」

「流石に恥ずかしいです……………」

「二人とも、お願いだ」

明久が頭を下げる。

「明久……………。お前は本当に——チャイナが好きなんだな……………」

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

島田さんが姫路さんの言葉を遮るように言った。
「ナイス判断だ。」

「あ。は、はいっ！ これくらいお安いご用です！」

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

二人は会場に向かって行った。

「秀吉、白夜、お前らもだ」

「了解じゃ」

「仕方ないよね」

「・・・・・・・・・・できた」

「わ、このお兄ちゃん凄いです!」

まだ5分と経っていないのにチャイナドレスを作り上げてしまった
康太。

未来の奥さんは大助かりだな。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちょ、ちょっと秀吉! ここで着替えるの! ? きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ! !」

「まったく、ワシは男じゃというのに。では白夜、一緒に着替えようぞ」

「あいあい」

ん? 殺気がする。

「いいつしゃああ! !」

ヒュッ! (明久がハイキックをする音)

パシッ! (明久のハイキックを掴む音)

「ど、どうしたんだ明久？ いきなり蹴りを繰り出すなんて」

「許さん！ 秀吉と一緒に着替えるなど！ 秀吉を白夜の魔の手から守るんだ！」

「大丈夫じゃ明久よ。白夜とは子供の頃からよく一緒に風呂も入っておるのじゃから今更ワシの裸を見てもどうこうならんぞい。それにワシらは男同士じゃし」

「何だつて！」

その後、明久と康太がいつものように襲い掛かってきたから軽くあしらってあげた。

「たっただいま！」

「ただいま戻りました！」

二人が帰還したみたいだな。

「丁度良かったよ。二人とも疲れてるところ悪いけど、ホールに回ってきてくれる？」

二人の活躍や、団子の味などもあり、席がだんだん埋まってきた。
ん？ あれは……。

『君。注文をしてもいいかな？』

教頭の竹原が来ていた。

何でこの場所に？ 僕の監視のつもりか？

「白夜、どうしたのじゃ？ む、あれは竹原教頭じゃのう。あの人がどうかしたのかの？」

秀吉や皆を俺の過去のことに関きこみたくない。

「いや、ちょっと珍しかったもんだからさ。」

すると明久が教室を出て行った。
気になって教室から出て明久を目で追うと誰だかわからないが数人で明久を追っていた。

「おい白夜、明久を追い掛けて餡子も持ってきて欲しいって言うて来てくれ」

「わかった。そんなわけだからちよつとの間任せるよ？」

「うむ。任せておくのじゃ」

空き教室・・・

「明久、無事かい？」

「あ、白夜丁度良かった」

「チツ、見られた以上ただでは帰さねえ！」

やはりそういうことか。竹原！

「明久、とりあえず荷物は俺が適当に持っていくから念の為に数を聞いて来てくれない？」

そのころには終わってるから」

「わかった！」

明久をとりあえずここから一旦教室に戻す。

「逃がすな！」

「おっと！ 君たちの相手は俺だぜ？」

俺は明久を追わせまいとこいつらの前に立ちはだかる。

「いいだろう。先にお前からボコしてやるよ！」

一人が顔面に向かって拳を振るう。

だがケンカしかしたことのない人間と特別な訓練をした人間では力量に違いがあるんだよねえ。

「なっ！？ き、消えた！？」

いんや、消えてないよあ？

「後ろだよ」

「うつ！」

首に手刀をいれて気絶させる。
こんな感じでまず一人。

「こ、こいつ、相当できるぞ………！」

ただのチンピラが冷酷なる惨殺者の異名つきになった俺に勝てるわけないでしょ？

「さて、ここでお前らに質問。お前らは何故こんな事をしているの？ 目的、お前らを雇った人物を教えてくれるかな？」

「言うわけねえだろうがつ！」

「じゃあとりあえずお前から一人一人聞きだそう」

殴りかかってきたのを顔を左に逸らしてかわし、手加減して腹に掌底（手を平にして突く技のこと）をいれる。

「おぶつ！」

これで二人目。

「さあ、後はお前らだぞ？ おとなしく吐いてくれないかなあ？」

「ち、ちくしょう！」

やけくそに殴りかかってくるが簡単にかわす。

「フツ！！ シツ！！」

腕を受け流し、頬を叩く、もう一度左右逆で同じ事をし、手で頬を抑えて足払いをする。

すると簡単にチンピラは倒れる。当然手加減をする。

「はい。教えてくれるかな？」

「お、俺たちは吉井ってやつをやれって言われたただけだ！ それ以外は何も教えてくれなかったから」

「やれって言ったのは誰だ？」

「フードを被ってたから顔は見えなかった」

流石にそう簡単に尻尾は掴ませてくれないか。

「そう。あんがとさん。もう行っていいぞ。ただし、また手を出そうとしたら殺すぞ！」

「は、はいっ！」

そのチンピラは気絶した二人を抱えて部屋から出て行った。その後、戻ってきた明久と一緒に頼まれていた物を運んだ。

そんなこんなで時間が過ぎ、召喚大会の会場・・・

「いよいよじゃな」

「ああ。正直、勝てるかわからない試合だ」

「しかも教科は保健体育じゃから間違いなくモブAは400点越えをしてくるじやろっし、モブBもかなりの点数を取ってくるはずじや。」

「しかも姫路や島田みたいに弱点を作りにくじやろっし。強敵じゃな」

「どうするかねえ……」

『それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ』
「どうやら始まるみたいだな。」

「さて、どんな風に戦うのかなあ？」

「悪いけど手加減はしないからね？」

よし、とりあえず一つ仕掛けてみるか。

「モブA、モブBさん、二人は何が目的でこの大会に出場しているんだ？」

「わ、私は白銀の腕輪に興味があつて」

「まったく。正直じゃないなあ。真奈は」

「な、何よ？」

おっと！ これは何かあるのか？

「もし優勝してチケットが手に入ったらひでよ「きゃああああ！！」

」

「な、何じゃ？」

「ちよちよちよっとモブB！ それは言わない約束じゃない！」

「だって言った方が楽になれるよ？」

「だったらモブAだってムツツリ「ちよっとー！！」」

「それこそ言わない約束だよ！」

「先に言ったのはモブAだよ？」

へえ。モブAさんって康太のこと好きなのか？

『そろそろ始めますよ？』

マイクを持った先生が苦笑いをしながら言ってきた。

「何じゃかよくわからんがとにかくいくぞい、白夜」

「オッケー！」

「『『『『^{サモン}試獣召喚！』』』」

『Fクラス 木下秀吉 & Fクラス 霧崎白夜

保健体育	88点	&	350点
VS			
Aクラス	モブA	&	Aクラス モブB
保健体育	470点	&	405点
			☐

うわぁお！ これはこれは、どうしたものか。

こちらのペアは腕輪は使えず、向こうのペアは二人とも腕輪の能力が使用できる。

しかも俺らは向こうの腕輪の能力を知らない。対応しようにもどうにもできない。

先ほど秀吉に保健体育を詰め込んで貰ったが、約5倍の相手だから焼け石に水というやつでろうか。

「じゃ、行つくよー！」

そう言って二体の召喚獣が突進してきた。こうなったらやるしかない！

「秀吉、打ち合わせ通りにいくよ！」

「それしかあるまい」

僕たちの打ち合わせとはまだ召喚獣を大して行っていないモブBを二人がかりで倒してからモブAを二人がかりで倒すという物だ。もはや作戦なのかすらサッパリだ。

「やっぱり来たね、でもお見通しだよ！」

するとモブBの召喚獣の腕輪が光り、モブBの召喚獣に翼が生えた。そうかモブBの召喚獣の腕輪の能力は飛翔能力を得ることか！

「やばいつ！」

完全に意表を突かれた僕たちは一瞬対応が遅れて直ぐさま急降下して腕に装備している爪で突いてくるモブBの召喚獣をなんとか防御するものの、モブAの召喚獣が迫ってきていた。

「秀吉！ 何とかできる！？」

「やれるだけやってみるぞい！」

モブBの召喚獣に手一杯な僕にはモブAさんに対応する術がない。ここは秀吉に任せるしかない。

「やるねえ、弟君。でも、いつまで持つかな？」

「ち、力の差が有りすぎるぞい！」

「秀吉！」

「よそ見は禁物だよ！」

秀吉を助けに行きたいけど、モブBが再び空中から攻撃を仕掛けてきた。

ん？ 何だか急にスピードが上がったような………！？
防御したのは良いものの、フィードバックが先ほどよりも凄い。
何があっただんだ！？

「ナイス、モブA！」

「まっかせてよ！」

どうやらモブAの召喚獣の能力らしい。

「白夜！ やばいのじゃ！」

「わかってるけど・・・！」

正直八方手詰まりだ。どうしよう。

「よいしょお！」

「うおっ！ 武器が！」

秀吉の召喚獣の武器が壊されたみたいだ。しかもまた腕輪の能力を使われたみたいだ。

俺の方も防戦一方になっている。完全に制空権を握られているため防御が精一杯だ。

光弾を放つにしても当たるとはとても思えない。

こうなったら捨て身の作戦でいくか。でも痛いんだよなあ。

「秀吉、最終手段でいこう！」

「そうじゃな、もはやここまでじゃろう」

そう言っつて秀吉の召喚獣が僕の召喚獣の後ろに立つ。

「あれ？ もう逃げないの？」

「悪いけど、勝たせて貰うわよ！」

モブBとモブAの召喚獣が突っ込んでくる。
だが俺の召喚獣はそこ攻撃を避けてあえてくらう。

『Fクラス 霧崎白夜 保健体育 20点』

「ぐうう！」

「な、何で避けないのよ？」

流石この点数の召喚獣の攻撃だ。フィードバックがめちゃくちゃ痛い。

でも勝利の条件は全て揃った！

「今だ秀吉！ 僕の召喚獣もろともぶった切るんだ！」

「すまぬ白夜！」

「えっ！？ でも弟君の召喚獣の武器はもうないはず……………」

「いや、俺の召喚獣の武器があるでしょ？」

「しまった！」

そう、この作戦は俺の召喚獣がわざと攻撃をその身に受けて、後ろにいる秀吉の召喚獣が俺の召喚獣の武器を使って、俺の召喚獣ごと相手の召喚獣を倒すという作戦だ。

とは言っても、俺の召喚獣が攻撃を耐えきれぬかが問題だったけど、その最大の問題はクリアされた。しかも……………。

「ダメ！ 逃げられない！」

そう、この作戦の最大の利点は俺の召喚獣が相手の召喚獣を捕らえているため、逃げられなくなり、確実にこちらの攻撃が当たるということだ！

「これでっ！」

「チエツクメイトだ！」

秀吉の召喚獣が俺の召喚獣ごとモブAとモブBの召喚獣を真っ二つにする。

当然、三人の召喚獣は戦闘不能になる。そして……………。

「ぐおおお！ 全身が真っ二つに割れるような痛みがっ！」

戦死したときのフィードバックってこんなに痛いんだね。

『木下、霧崎ペアの勝利です』

それでも何とか勝つことができたのでよしとしよう。

Fクラスの教室……

「あ、お帰り。二人とも。試合どうだった？」

「白夜の作戦のおかげで何とか勝てたぞい」

「それは何より。さつそく悪いが、秀吉。お前に仕事を頼みたい」

「ワシにか？ いったいどんな仕事じゃ？」

「俺たちの次の対戦相手が翔子、木下姉のペアなんだ。そこで秀吉には姉とすり替わって貰いたい」

「優子を封じて霧島さんを三人がかりで倒そうというわけだな？」

「そういうことだ」

でもね、雄二その作戦には致命的な欠点があることを教えてあげよう。

「雄二、その作戦には有る致命的な欠点がある！」

「な、何！？ 一体、どんな？」

それはね、

「それは――」

僕は今まで秀吉と優子を十数年見てきて言えることがあるんだ。

「その作戦はまず秀吉が優子が無力化する必要があるけれど、秀吉は優子に一度も勝っていないんだよ！ そつ、断言できる。秀吉は、優子には勝てないんだよ！」

これがその作戦に存在する致命的な欠点だよ雄二。

「白夜、齒を食いしばるのじゃ」

「避けてみせるよ」

何やら秀吉が喝でも入れてくれるらしいが、遠慮しておこう。

「まったく。とにかく、要は姉上を無力化できれば良いのじゃろう？」

「まあ、おおむねそんな感じだ」

「じゃったら、もっと有効で、確実に成功させられる方法があるぞい」

召喚大会の会場・・・

「ねえ秀吉、結局優子を封じる為の作戦って一体何だったの？」

「そのうち教えてあげるのじゃ」

「さいですか」

「さて、準決勝は例の常夏コンビが相手のようじゃのう」

そうだ、準決勝の相手はあの竹原側の人間の常夏コンビ。契約があるから僕は彼らの邪魔はできない。

『それでは、これより準決勝を始めたいと思います！ 出場選手の

入場です！」

常夏コンビと僕たちが向き合うように対峙する。

「よう、ご苦労さん。あのやっかいなペアを片づけてくれてよ」

「あいつらと当たってたら正直勝てたかわからなかったしな」

もし、ここで僕が彼らの邪魔をして、彼らに勝利してしまったら？
その場合、竹原との契約は無効になる。
彼らに危害が及ぶ。

「さてと、わかってるよな？」

「この場合どうするのか」

でも、僕は決めたんだ。

「前に、俺に居場所をくれた人が言っていた」

「なんだ？ 皆の役に立てない時を謝り方でも教えてくれたのか？」

ギャハハハ、と笑う坊主の先輩。

「『あなたが今生きてここにいる。それだけで私は笑顔になれる』
って」

「ハア？ コイツ何言ってるんだか」

「その言葉を聞いたとき、本当に嬉しかったんだ。俺のことなど嫌

いになって忘れているであろうと思っていた人がまだ俺のことを覚えていて、しかも、また今まで通りに暮らそう？　って言ってくれたから」

「白夜」

そうだ、あの時、俺は決めた。誓った。

「そして俺は自分自身に誓った。その人と、その周りの人達の笑顔を守ってみせるって。貴様らの、自分自身の欲望の為の計画はその人と、その人の周りから笑顔を奪うことに繋がる。だから――」

もう迷わない。俺は今自分が持っている力は全て優子と秀吉、そしてその周りの人達の笑顔を守る為に使う。

「お前たちは僕が倒す。今日、ここで！　それが、少しでも自分の保身の為に皆を助けられなかった俺の罪滅ぼしだ！」

「なっ！？　てめえ、裏切るのか！？」

「裏切る？　違うな。俺はお前たちのことを一度も仲間だと思っていない」

「あの情報がどうなってもいいのかよ！？」

「あの情報？」

秀吉が知リたそうだけど、これに捲き込むわけにはいかない。

「一つ質問です。あなた方はその内容を知っているんですか？」

「どんな情報かは知らねえが、相当やばい情報だつて事は知ってるぜ」

「そうですか。ならいいや。とつと始めましょうか先輩？ ギャラリーも先生も待っている」

「まあいい。このことは報告させて貰うからな！」

「いくよ！ 秀吉！」

「うむ！」

「「「「試獣召喚！」」」」
サモン

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平
英語W 276点 & 293点

VS

Fクラス 木下秀吉 & Fクラス 霧崎白夜
英語W 53点 & 450点

「絶対に負けられないんだよ！」

俺は武器を取り出させて突撃させる。

「こいつ！ 点数が高い！」

「はあああ！」

俺の召喚獣が繰り出す剣撃を防御する先輩の召喚獣。けどそれが僕の狙いだ！

「悪いけど速攻で方をつける！」

皆に報復が来る前に何としても戻らないと。一応護衛がいるだろうけど。

俺は今大会初使用の腕輪の能力を使い、左腕に白銀の腕を装備する。そしてその腕で防御している先輩の召喚獣の頭を鷲づかみにする。そしてそのまま波動衝撃波を放つ。

『Aクラス 夏川俊平 英語W 0点』

「う、嘘だろ!?!」

「後一人！」

「白夜、こっちはワシがやる！」

「チツ！ 舐めてんじゃねえ！」

「秀吉！ だったらコレを使え！」

そう言つて俺は自分の召喚獣の剣を秀吉の召喚獣に向けてパスをする。

「すまぬっ」

キャッチして再び斬りかかっていく秀吉。

先輩の召喚獣は縦に剣を振るが、難なくかわして一撃をいれる。

「こいつっ！ 何で当たらない!?!」

「これで、終わりじゃあ！」

『Aクラス 常村勇作 英語W 0点』

『勝者 木下、霧崎ペア！』

これで、あいつらの計画は阻止できた。後は、皆の安全を確認するだけだ！

バカと悪意と決意の始まり（後書き）

修正多いかも

バカと誘拐と王子様（前書き）

以下の文章の（ ）に入る正しい物質を答えなさい。

『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（ ）である』

姫路瑞希と霧崎白夜の答え

『水酸化カルシウム』

教師のコメント

正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え

『塩化吸収剤』

教師のコメント

勝手に便利な物を作らないように。

吉井明久の答え

『アンモニア』

教師のコメント

それは反則です。

バカと誘拐と王子様

常夏コンビに勝った僕と秀吉のペアは急いで教室に向かっている。
その途中で明久と雄二、康太に出会った。

「皆、ここで何してるの？」

「それが大変なんだよ！ ウェイトレスが連れて行かれたらしいんだ！」

くそっ！ 間に合わなかったのか！

「だんだん手段を選ばなくなってきたな」

「一応予想の範疇とはいえ、これは誘拐沙汰だぞ。最悪清涼祭そのものが中止になるかもしれないな」

「それでは姫路の転校は必然的に防げなくなってしまうということじゃろう！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・かなりまずい」

「康太、連れて行かれたメンバーは？ 場所は特定できる？」

「連れて行かれたのは、姫路、島田、とその妹、あと、遊びに来ていた霧島、工藤、木下姉。場所は盗聴の受信機でわかる」

「オーケー。敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

しまった！島田たちはわかるが優子もなのか！やっぱ情報が漏れるだけあったか。

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「それには雄二も含まれてるよね？」

「黙れ明久」

「とにかく、まずはあいつらを助けだそう。ムツリーニと秀吉はタイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかった」

「了解じゃ」

「雄二、悪いんだけど、作戦とかには従えそうにないぞ。手遅れになる前に殺す！」

カラオケボックス・・・

優子 side

折角白夜に会いに来たのにこんな事に捲き込まれるなんて最悪よ！

「さてどうする？ 坂本とー吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？」

「いや、もう一人追加があったよな。確か霧崎とか言ったか？ あとにかく吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。」

今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな、それと霧崎も下手するとマズいぞ」

なんなのこいつら？ 白夜たちを呼び出して何するつもりよ？

「坂本って、まさかあの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくないんだが……。とは言ってもあの嘘か誠かわからんが『冷酷なる惨殺者』の噂にはあの坂本も見劣りするぜ」

『冷酷なる惨殺者』？

「ああ。知ってるぜその噂。確か見た目は中学生程度なのにケン力が抜群に強くて、ここら一帯の暴力団を全て壊滅させたってヤツだろ？」

噂じゃ誘拐事件起こした奴ら全員無表情に切り殺していつてそれにかかわったやつも殺してるからその異名なんだろう？」

それって！ 昔の時の……

「確かニュースにもなってたよな。最終的にそれをやったのが中学生だつて知った時は信じられなかったぜ。噂じゃ霧崎ってやつかもしれないんだつてよ」

「だよな。そうなると俺たちやべえかもな」

「そりゃ、違いねえ」

「お、お姉ちゃん………」

「アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよ！」

美波がチンピラどもに言っている。恐らく効果は無いと思うけど。

「お姉ちゃん、だってさ！ かつわいいー！」

「ギャははははー！」

正直気持ち悪い。白夜みたいな素敵な（自分から見た）男もいるのにこんなクズとも言えるようなヤツらもいるという事実が信じられない。

「………灰皿をお取り替えます。それと注文はありますか？」

あれって土屋君？ 何でこんな所に？

「注文はまた後でいいから今は下がってくれ」

「かしこまりました」

「ところでこのオネーちゃんたちどうする？ やっちゃっていいの？」

「だったら俺はこの巨乳ちゃんがいいなー！」

「あつ！ ブリー！ それなら俺二番ね！」

こいつらが話してることがやばい！ この状況でやるとかって多分一つしかないわよね？

だとしたらそんなの絶対嫌！ こんなヤツらに初めてを奪われるなんて！

初めては白夜以外にはあげないって決めてるのに！

「あ、あのっ！ 葉月ちゃんを話して、私たちを帰らせて下さい！」

「だってさ。どうする？」

「それはオネーチャンの頑張り次第だよな？」

「やつ！ さ、触らないで——」

「ちょっと、やめなさいよ！」

「こんなことして絶対後悔するわよ！？」

思わず叫ぶ私。

「あーもう。うつせえ女だな！」

「生意気なんだよ！」

殴られる！ すぐ感じるであろう痛みを耐える為に目を閉じる。――

——でも、痛みはいつになってもやって来なかった。

目を開けてみると、そこには私と美波に手を挙げようとした二人の腕を掴んでいる幼なじみがいた。

「白夜？」

「止める。頼むから、止めてくれ」

「ハア？ お前誰よ？」

「もう、味わいたくねえんだよ。あんな感情は。だから自分なりに考えた。どうすればあんな事やらなくて済んだんだろうってな。そして、俺は一つの答えを出した。それが――」

「くっくっ！」

白夜が手を放し、捕まっていた二人が白夜に捕まっていた所を抑えている。

「大切な人が傷ついてからじゃ、もう遅いんだって！！」

白夜がチンピラの方を向き直って言う。

「！！ 何！？ 何故か体が震えだしている。冷房の効きすぎなんかじゃない！」

この白夜の周りから出てくるこれって何！？

「な、何だよ、これ。震えが止まらねえ……………」

「れ、冷房の効きすぎじゃねえのか！？」

何？ この白夜。こんな白夜見たこと……！ いや、ある！――
度だけだけど。

「白夜っ！」

私は白夜に向かって叫ぶ。

「ああ。わかってる。大丈夫、お前らは絶対に傷つけさせねえよ」

あれ？ 震えが、止まった？

「僕に刀の使い方が言ってた。

『刀は使う人間次第で善にも悪にも染まる。特に、まだお前のような子供はな。だからお前自身でその力の使い方を決めるんだ』って。だから僕は決めた。この力は大切な人を守る為に使う！ だから今こそ使おう、この力を。今こそ振るおう、この斬撃を。

見せてやろう！ お前たちのする暴力じゃなく、本物の剣術を！」

「な、なめてんじゃねえ！」

一人が白夜に殴りかかる。

だが白夜は軽くその突きをかわして、

「抜刀一閃！」

白夜が殴ってきたやつを刀を抜きながら切り裂いた。

「ぐおっ！」

「ヤスオッ！？」

「てめえ・・・！ 何しやがった！？」

「ああ少し斬ってやったのさ。そのヤスオとかいうやつは大丈夫だ？　かなり浅く切ったからな」

そついう問題ではないような気がするのは私だけなのかしら？
でも白夜ってあんな剣技いつのまに使えるようになったのかしら。

「このっ！」

「くたばれっ！」

また二人殴りかかっていった。

「はあっ！」

素早く右側の人の懐に入り込んで、数回斬った後、腕を顔の正面からぶつけて、足払いをする。それでその人は倒れ込む。

「ぐふっ！」

「な、何！？　いつ間に！？」

そしてもう一人の方にも近寄って、

「斬鉄剣！
ざんてつけん」

また切り裂いた。

「こ、こいつ！　かなりできるぞ！」

「これじゃあ『冷酷なる惨殺者』みたいじゃねえか！」

「どうしたんだ？ もう終わりか？」

白夜。やっぱり凄い。

ガチャッ！

「おじやましーす！」

あ、吉井君。

「よ、吉井君？」

「アキ・・・・・・・・」

瑞希と美波の王子様の登場ってどこかしら？

「ハア？ お前誰よ？」

「それでは失礼して・・・・・・・・」

吉井君が一番近い人の手を握り、

「死にくされやあっ！」

その人の股間を思い切り蹴り上げた。

「ほごあああっ！」

かなり痛そうだけどどのくらい痛いのかしら？

白夜side

やっと来たか。ヒーローは遅れてくるものだが。

「てっ。てめえ！ 何しやる！」

明久にそう言ったヤツが殴りかかろうとしている。

「させるかっての！」

「ぐぼっ！」

明久に殴りかかろうとしていたヤツを弾き飛ばす。

「明久！ そのまま行け！」

「イイツシャアアー！」

「ぐぶああっ！」

「デメエら、よくも美波に手をあげようとしたな！ 全員ブチ殺してやる！」

「まったく、お前らは——おらっ！」

「くはっ！」

「雄二っ!」

「・・・・・・・・雄二」

「こいつら、吉井って野郎と坂本だ!」

「霧崎ってヤツだけでも手一杯なのに!」

「坂本よお。こいつらがどうなってもいいのかア?」

しまった! 俺としたことが、工藤を人質に取られてしまっなんて!

「いいか? おとなしくしているよ? さもないとヒデエ傷をー
ー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・負うのはお前」

ゴインッ

「あがあっ!」

ナイス! 康太。

「ムツツリーニ君」

ふう、これで一息つけるかな?

「お、お姉ちゃん! お姉ちゃん!」

「葉月っ! 良かった・・・・・・・・。怖かったよね・・・・・・・・?」

姉妹の感動の再会だな。

「吉井君っ!」

おお! 姫路さんが明久に向かって腕を広げて駆け寄っている。
良かったね明久。

「姫路さんっ!」

あ、感動シーンを怖そうとしている無粋なヤツがいる。

「吉井い! よくも」人の恋路は邪魔するもんじゃないよ!」ぐぼ
おっ!」

姫路さんと明久が抱き合っている。

うんうん。やっぱ良いもんだよねえ。

今頃気づいたけれど、俺以外の男子は女子の皆様から見たら王子様
だよなあ。

俺だけ場違いだな。

「くはははは! それにしても丁度良いストレス発散相手ができた
な! 生まれてきたことを後悔させてやるぜええっ!」

「こ、これが坂本か……!」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……」

今のストレス発散ができていない雄二と喧嘩なんてご愁傷様だな。

「はいはい。雑魚どもの始末は雄二に任せて、王子様とお姫様の皆さんは先に学校に戻ろうぜ？」

Fクラス・・・

「皆、そろそろ来る時間だ」

現在、誘拐されたメンバーと助け出したメンバーでFクラスの教室を貸し切っている。

俺が巻きこまれた皆には真相を知る権利があるからと言った為だ。

「？ 来るって、誰が？」

「ババアだ」

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせる』ってな」

「話ねえ・・・。。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

その通りだが交渉に行った時にババアって言ってなかったっけ？

「用事もクソも・・・この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

「ババアに原因がーえええっ!？」

明久がすつとんきような声を上げる。

「あ、あのババア！ 僕らに何か隠していたのか！」

『ババアって言うてるじゃん!』 多分、明久と雄二以外の皆の考えが一致した瞬間だと思う。

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが。
これまた大人数で」

「………こんにちは学園長」「………」

流石女子＋秀吉＋康太。きちんと挨拶したな。

「彼女たちは捲き込まれて誘拐されたんだ。知る権利くらい有るはずだ」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

その通りだ。作戦成功の確率を上昇させるには情報が不可欠。なのにこの人はその情報を持っているにも関わらず

、それを僕たちに明かさなかった。これは明らかな裏切り行為だ。

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。

例えばここにいるAクラスの才女たちに頼めば良かったんだからな」

「……雄二、取引って？」

事情を知らない人達からすればもったもな質問を霧島さんが雄二に問うた。

「この際だから隠す必要もないだろう。良いか明久？」

「うん。姫路さん、ごめんね？」

「え？ どういうことですか？」

「実は――」

説明中……

「そうだったんだ」

「少しだけなら知ってたけど、こんな風になっていたなんてね」

「吉井君、やっぱりー」

「まあとにかく、どうなんだババア？ わざわざ俺たちを擁立するなんて効率が悪いことをしたんだ？」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、交渉の場にいた少なくとも僕以外の三人に召喚大会に出場させる為にわざと渋ったってことですね？」

「どうして白夜以外なの？」

「さっきも雄二が言った通り、Aクラスの才女たちに頼まなかったんだからそういうことになるんじゃない？ ねえ雄二？」

「ああ。あの時に俺がババアに一つ提案をしたのを覚えているか？」

「提案？ えーっと」

科目を決めさせるってヤツだ。

「科目を決めさせるってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めばしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、

俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑んだ」

「それに、学園祭の喫茶店をわざわざ妨害したり、明久を襲撃したり最終的には誘拐だ。ただの嫌がらせには到底思えない」

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか………すまなかったね」

プライドが高いであろう研究者兼、学園長が頭を下げた。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えていたんだろうけど………決勝まで進まれて焦ったんだろうね。裏切りもあつたみたいだし」

「裏切り？」

チッ！ 学園長め。まあ確かにここで確認しておかないとあっちとしても危ないだろうからな。

「そういえば白夜が常夏コンビと裏切るだか何だかを口走っていたような………」

「その通り。学園長や秀吉の言う通り。俺は黒幕である教頭と繋がっている」

「何だつて!？」

明久が憎しみのこもった眼差しで僕を見ている。
当然の反応だな。

「いや、まて明久」

「何でだよ雄二！ 白夜は僕らを裏切ってたんだよ！？」

「バカが………。どうしてお前はそう単純なんだ？
だったら何で白夜は常夏コンビの妨害を阻止するのに協力したんだ？
何で誘拐された女子たちを真っ先に助けに向かったんだ？」

「それは……………」

「何か理由があるんだろ？ でもお前は教頭を裏切り、いや、正確
には初めから仲間じゃなくなってたんだからこの言葉は適切ではないが
、俺たち助けることを選んだ。違うか？」

「それは……………」

流石は雄二この程度の芝居では見透かされるか。

「白夜、ちよつとこつち向いて？」

突然優子から声が掛かる。

「何だ？」

グイッと顔を引き寄せられる。

「!？」

突然優子の顔がドアップになったのでかなりビックリした。

「む。よし！」

「えーっと、何が？」

「坂本君、どうやらあなたの推測で間違いなさそうよ？」

「そうか。ならば話の続きに戻ろう」

「えっと、何したの木下さん？」

「ワシら姉弟は白夜とは長い付き合いじゃ。目を見れば隠し事をしているかしてないくらいわかるのじゃ。じゃから姉上は白夜が嘘をついて、

実はまだ教頭側についてるのではないかという事を確認したんじゃない。まあ白夜がワシらを傷つける事なんてできんじゃろうけどな」

そっいえば以前目でわかるって言ってたっけな。

「そうだったんだ。ごめん、白夜。一瞬でも疑ったりして」

明久が僕に頭を下げている。

「いや、相談しなかった俺も悪い。というか、教頭の言葉に負けてしまった俺が悪いんだから」

俺も頭を下げる。

「さて、これでアンタも安心して俺たちに種明かしができるよな？」

「はぁ………。アタシの無能を晒け出すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね………」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして学園長は俺らに真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

だろうな。

「ペアチケットじゃない！？　どういことですか！？」

「アタシにとっちゃあ企業の企みなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品の方なのさ」

「『白銀の腕輪』か」

「そうさ。その腕輪を吉井と坂本のペアに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？　回収して欲しいわけじゃなくて？　しかも何で僕らのペアなんですか？」

「あのな……。回収が目的だったら俺たちに依頼する必要はないだろう？　そもそも回収なんて真似は極力避けたいだろうし、

な」

「研究者としては、新技術は見せびらかしたいだろうし、しかも何故かAクラスの才女たちを使わずにー」

「俺や明久という低得点者を選んだ。つまり高得点者を使わなかったんじゃない。

使えなかったんじゃないのか？」

「本当に頭の回転が良いねえ。その通りさね。入出力が一定水準を超えると暴走してしまうっていう不具合があるからだよ」

「なるほどな」

「えーっとつまり……」

「アンタらみたいなのは『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められているってことでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

明久、泣けてくるぜ。お前の理解能力ってこんなに低かったか？

「吉井君……」

「アキ・・・・・・・・」

「本当にバカなお兄ちゃん・・・・・・・・」

女子三人に呆れられてるし。

「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが・・・」

ごもつともである。

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作成用はある程度まで耐えられるんだけどねえ・・・・・・・・」

もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、バカにされている。もの凄い勢いで」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づけ！」

「そっいえば学園長、こいつ渡すの忘れてました」

「なんだいそいつは」

学園長は気づいてないみたいだ。これは俺が秘密裏に作っていた修正プログラムだ、これがあればおそらくは不具合が直るはずである。「学校にハッキングして作った不具合修正プログラムの入ったC

Dですよ」

「ってことはもしかしてあれかい、そのプログラムがあれば腕輪の不具合も直るってことかい」

「ええ、そういうことです」

「まさかあんたに助けられるとはね、まったくありがたいくそじやりさね」

明久。

あ、学園長が若干ほくそ笑んだ！

「つまり、さっき白夜が言った通り、教頭が黒幕で間違いなさそうだな」

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。」

恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものと見て間違いなさそうさね」

明久が何のことだかわからないって顔をしているけど今は面倒なので後で説明してあげよう。

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビやら例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。最終的には白夜が送り込まれていたかもしれないがな」

そうならまず教頭を襲撃するけどな。

「あのさ、コレってーかなりマズい話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存亡が懸かっている話しになっていたかな」

「なっていたかも？」

「そうだろ？ 教頭側の人間である常夏コンビは秀吉と白夜が、チンピラどもはたった今俺たちが、
白夜は俺たちを取ったんだから、教頭にはもう戦力は残されていないさ」

「できることといっても闇討ちくらいだろうけど、さっきでチンピラどもは懲りてるだろうしね」

「いわば、万事解決ってところか。」

「だが、最後までは気を抜くなよ？ しつこい常夏コンビのことだ、まだ何か奥の手があるかもしれない」

「わかってるさ！」

「まあ今日のところは何もしてこないだろう。ご苦労だったねガキども。これで少しは枕を高くして寝ることができるよ。」

男どもはまた女子が誘拐されちゃ敵わんだろっから、家まで送ってやんな」

「「「「「はい！」「」「」「」

こうして学園祭初日は幕を降ろした。

バカと誘拐と王子様（後書き）

うーんやっぱり修正あるかも

お知らせ（前書き）

大事なお知らせだよ。

お知らせ

このたびこの小説は誤字脱字を修正することを前提に内容が少し変わるようになりました。変わる内容は以下になります。

霧崎白夜：一人っ子から妹を追加するとともに京都の名家の人間というふうになります。

霧崎妹：名前は霧崎黒羽きりさきくろはその他プロフィールはキャラ紹介にて。

霧崎家の事情：白夜と黒羽の両親は白夜の中学の時亡くなったとなっておりですが文月学園入学後、実家に黒羽を連れていったときに事故で死亡、黒羽は実家にしばらく住むことになったというふうにしてその時白夜は学校だったというふうにします。

なおこのお知らせはストーリーの内容が新しいものに変わった時にキャラ紹介または新しい話に内容が変更されます。長いこと更新がなく申し訳ございません。これからもこの小説をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2135q/>

バカとテストと召喚獣＋

2011年10月9日19時04分発行